

Oracle® Database

Companion CD インストール・ガイド

10g リリース 2 (10.2) for Solaris Operating System (SPARC 64-bit)

部品番号 : B25029-02

2006 年 3 月

Oracle Database Companion CD インストール・ガイド, 10g リリース 2 (10.2) for Solaris Operating System (SPARC 64-bit)

部品番号 : B25029-02

原本名 : Oracle Database Companion CD Installation Guide, 10g Release 2 (10.2) for Solaris Operating System (SPARC 64-Bit)

原本部品番号 : B15694-02

原本著者 : Apolina Das, Sanjay Sharma, Lyju Vadassery

原本協力者 : Kevin Flood, Pat Huey, Clara Jaeckel, Emily Murphy, Terri Winters, David Austin, Subhranshu Banerjee, Mark Bauer, Robert Chang, Jonathan Creighton, Sudip Datta, Padmanabhan Ganapathy, Thirumaleshwara Hasandka, Joel Kallman, George Kotsovolos, Richard Long, Rolly Lv, Padmanabhan Manavazhi, Matthew McKerley, Sreejith Minnanghat, Krishna Mohan, Santhana Natarajan, Rajendra Pingte, Srinivas Poovala, Hanlin Qian, Janelle Simmons, Preeti Shukla, Roy Swonger, Douglas Williams

Copyright © 2006, Oracle. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかるとして使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性 (redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle, JD Edwards, PeopleSoft, Retek は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性ががあります。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

目次

はじめに	v
対象読者	vi
ドキュメントのアクセシビリティについて	vi
関連ドキュメント	vi
表記規則	vii
コマンド構文	vii
用語	viii
ドキュメントへのアクセス	viii
サード・パーティ・ソフトウェア情報	viii
サポートおよびサービス	ix
1 Oracle Database Companion CD のインストールの概要	
Oracle Database Companion CD のインストールの概要	1-2
Oracle HTML DB インストール・タイプでインストールされる製品	1-3
Oracle HTML DB	1-3
Oracle HTTP Server	1-3
このリリースとその他の Oracle HTTP Server リリースの違い	1-4
Oracle HTTP Server のインストール先	1-4
Oracle Database 10g Products インストール・タイプでインストールされる製品	1-5
Oracle JDBC Development Drivers	1-5
Oracle SQLJ	1-5
Oracle Database Examples	1-6
Oracle Text のナレッジ・ベース	1-6
Oracle Workflow Server	1-6
Oracle Ultra Search	1-7
ネイティブ・コンパイル Java ライブラリ	1-7
JPublisher	1-7
Oracle Database 10g Companion Products インストール・タイプでインストールされる製品	1-8
Oracle Workflow 中間層コンポーネント	1-8
Oracle HTTP Server	1-8

2 Oracle Database Companion CD の要件

ハードウェアおよびソフトウェアの動作保証	2-2
Oracle ソフトウェアをインストールするための全般的な要件	2-2
root としてのシステムへのログイン	2-2
必要なオペレーティング・システム・グループおよびユーザー	2-3
Oracle インベントリ・グループ	2-4
Oracle ソフトウェア所有者ユーザー	2-5
必須ソフトウェア・ディレクトリ	2-6
oracle ユーザーの環境の構成	2-9
Oracle HTML DB 製品をインストールするための要件	2-11
Oracle HTTP Server の要件	2-11
Oracle Database の要件	2-11
ハードウェア要件	2-11
ソフトウェア要件	2-12
Oracle HTML DB の要件	2-15
Oracle Database の要件	2-15
ディスク領域要件	2-16
Oracle HTTP Server の要件	2-16
Oracle XML DB の要件	2-16
Oracle Text の要件	2-16
ブラウザの要件	2-16
Oracle Database 10g Products のインストール要件	2-17
Oracle Database の要件	2-17
ディスク領域要件	2-17
Oracle Workflow Server の要件	2-17
Oracle Database 10g Companion Products のインストール要件	2-18
Oracle Workflow Server の要件	2-18
Oracle HTTP Server の要件	2-18
ディスク領域要件	2-18
ネットワークの設定	2-19
DHCP コンピュータへのインストール	2-19
複数のホームがあるコンピュータへのインストール	2-19
複数の別名を持つコンピュータへのインストール	2-19

3 Oracle Database Companion CD ソフトウェアのインストール

Companion CD 製品をインストールするための全般的な手順	3-2
インストール・ソフトウェアへのアクセス	3-2
ディスクのマウント	3-3
Oracle HTML DB のインストール	3-4
Oracle Database 10g Products のインストール	3-7
Oracle Database 10g Companion Products のインストール	3-11

4 Oracle Database Companion CD のインストール後の作業

パッチ・セット情報	4-2
Oracle HTTP Server のインストール後の作業	4-3
ファイルのバックアップ	4-3
以前のリリースの Oracle HTTP Server からの移行	4-3
httpd.conf ファイルの移行	4-3
mod_plsql で使用される DAD の移行	4-10
Oracle HTTP Server の高可用性機能の有効化	4-11
Oracle HTML DB のインストール後の作業	4-11
プロセスの再起動	4-11
新規 Oracle HTML DB インストールに対する Oracle HTTP Server の構成	4-11
Oracle HTTP Server リリース 9.0.3	4-11
Oracle HTTP Server 10g リリース 1 または Oracle Application Server 10g	4-13
Oracle HTML DB のアップグレードに対する Oracle HTTP Server の構成	4-14
Oracle HTTP Server リリース 9.0.3	4-14
Oracle HTTP Server 10g リリース 1 または Oracle Application Server 10g	4-15
PlsqlDatabasePassword パラメータの不明瞭化	4-15
新規 Oracle HTML DB インストールでのパスワードの不明瞭化	4-15
Oracle HTML DB のアップグレードでのパスワードの不明瞭化	4-15
リモートの Oracle Database に対する Oracle HTML DB のインストールおよび構成	4-16
htmldbca の実行要件	4-16
htmldbca の構文	4-16
htmldbca の実行	4-19
Oracle Workflow Server のインストール後の作業	4-20
初期化パラメータの値の確認	4-20
無効なオブジェクトのコンパイル	4-20
Oracle Workflow HTML のヘルプの構成	4-21
その他の設定作業の完了	4-21

5 Oracle Database Companion CD 製品のスタート・ガイド

インストール内容のチェック	5-2
Oracle HTTP Server のスタート・ガイド	5-2
Oracle HTTP Server の起動、停止および再起動	5-2
Oracle HTTP Server へのログイン	5-2
Oracle HTML DB のスタート・ガイド	5-3
Oracle HTML DB へのログイン	5-3
Oracle HTML DB 管理者の設定作業	5-4
Oracle Workflow のスタート・ガイド	5-4
Oracle Workflow ホーム・ページへのログイン	5-4
Oracle Workflow Manager へのログイン	5-4
Oracle Workflow 管理者の設定作業	5-5

6 Oracle Database Companion CD 製品の削除

Oracle HTML DB データベース・オブジェクトの削除	6-2
Oracle Workflow の削除	6-2
Oracle ソフトウェア・ファイルの削除	6-2

A Oracle Database Companion CD のインストールに関するトラブルシューティング

要件の確認	A-2
X Window の表示エラー	A-2
インストール・エラーが発生した場合の操作	A-3
インストール・セッションのログの確認	A-3
コンフィギュレーション・アシスタントのトラブルシューティング	A-4
コンフィギュレーション・アシスタントの障害	A-4
致命的エラー	A-4
インストール失敗後のクリーン・アップ	A-4
サイレント・モードでのレスポンス・ファイルに関するエラー処理	A-5
Oracle HTML DB でイメージが正しく表示されない場合	A-5
Oracle HTML DB のオンライン・ヘルプが動作しない場合	A-5

B 非対話型モードでの Oracle Database Companion CD 製品のインストール

非対話型モードでの Oracle コンポーネントのインストール	B-2
非対話型モードで Oracle コンポーネントをインストールするためのレスポンス・ファイルの使用 ...	B-2
レスポンス・ファイル・テンプレートの編集	B-3
レスポンス・ファイルの記録	B-4
サイレント・モードまたは抑止モードでの Oracle Universal Installer の実行	B-5
非対話型モードでの Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントの実行	B-6

C Oracle Database Companion CD グローバリゼーション・サポートの構成

異なる言語での Oracle コンポーネントのインストールと使用	C-2
異なる言語での Oracle HTML DB のインストール	C-2
異なる言語での Oracle Workflow のインストール	C-3
異なる言語での Oracle Universal Installer の実行	C-3
異なる言語での Oracle コンポーネントの使用	C-4
NLS_LANG 環境変数を使用したロケールおよびキャラクタ・セットの構成	C-4

D Oracle Database Companion CD のポート番号の管理

ポートの管理	D-2
ポート番号およびアクセス URL の表示	D-2
Oracle コンポーネントのポート番号およびプロトコル	D-2
Oracle HTTP Server ポートの変更	D-3
Oracle Workflow コンテナ・ポートの変更	D-4
Oracle Ultra Search ポートの変更	D-5

索引

はじめに

このマニュアルでは、Oracle Database 10g Companion CD インストール・メディアから入手可能な製品をインストールして構成する方法について説明します。

対象読者

このマニュアルは、Oracle Database 10g Companion CD インストール・メディアから入手可能な製品のインストール担当者を対象としています。

ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/accessibility/> を参照してください。

ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

スクリーン・リーダーはドキュメント内のサンプル・コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかし一部のスクリーン・リーダーは括弧だけの行を読まない場合があります。

外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。

Oracle サポート・サービスへの TTY アクセス

アメリカ国内では、Oracle サポート・サービスへ 24 時間年中無休でテキスト電話 (TTY) アクセスが提供されています。TTY サポートについては、(800)446-2398 にお電話ください。

関連ドキュメント

Oracle Database 10g 製品のプラットフォーム固有のドキュメントには、次のマニュアルが含まれます。

- Oracle Database
 - 『Oracle Database リリース・ノート for Solaris Operating System (SPARC 64-bit)』
 - 『Oracle Database インストール・ガイド for Solaris Operating System (SPARC 64-bit)』
 - 『Oracle Database クイック・インストール・ガイド for Solaris Operating System (SPARC 64-bit)』
 - 『Oracle Database Oracle Clusterware および Oracle Real Application Clusters インストール・ガイド for Solaris Operating System』
 - 『Oracle Database 管理者リファレンス for UNIX Systems』
- Oracle Database Client
 - 『Oracle Database Client インストール・ガイド for Solaris Operating System (SPARC 64-bit)』
 - 『Oracle Database Client クイック・インストール・ガイド for Solaris Operating System (SPARC 64-bit)』

- Oracle Database Companion CD
 - 『Oracle Database Companion CD インストレーション・ガイド for Solaris Operating System (SPARC 64-bit)』
 - 『Oracle Database Companion CD クイック・インストレーション・ガイド for Solaris Operating System (SPARC 64-bit)』

このマニュアルのリリース時に記載されなかった重要な情報は、『Oracle Database リリース・ノート for Solaris Operating System (SPARC 64-bit)』を参照してください。Oracle Database 10g のリリース・ノートは、定期的に更新されます。最新バージョンは次の URL で OTN-J からダウンロードできます。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

表記規則

このマニュアルでは、次の表記規則を使用しています。

規則	意味
太字	太字は、操作に関連付けられているグラフィカル・ユーザー・インタフェース (GUI) 要素、または本文中や用語集で定義されている用語を示します。
イタリック体	イタリック体は、特定の値を指定する必要があるプレースホルダ変数を示します。
固定幅フォント	固定幅フォントは、段落内のコマンド、URL、コード例、画面に表示されるテキストまたはユーザーが入力するテキストを示します。

コマンド構文

UNIX のコマンド構文は、固定幅フォントで表示されます。ドル記号 (\$)、シャープ記号 (#) またはパーセント記号 (%) は、UNIX コマンド・プロンプトです。これらの文字は、コマンドの一部として入力しないでください。

規則	説明
バックスラッシュ \	バックスラッシュは、長すぎて 1 行に収まらないコマンドの継続文字を表します。この種の行は、このマニュアルで記載しているとおりに入力する (バックスラッシュを付ける) か、バックスラッシュを付けずに 1 行で入力します。 <pre>dd if=/dev/rdskc0t1d0s6 of=/dev/rst0 bs=10b \ count=10000</pre>
中カッコ {}	中カッコは、必須の入力項目を表します。 <pre>.DEFINE {macro1}</pre>
大カッコ []	大カッコは、カッコ内の項目を任意に選択することを表します。 <pre>cvtcrt termname [outfile]</pre>
省略記号 ...	省略記号は、同じ項目を任意の数だけ繰り返すことを表します。 <pre>CHKVAL fieldname value1 value2 ... valueN</pre>
イタリック体	イタリック体は、変数を表します。変数には値を代入します。 <pre>library_name</pre>
縦線	縦線は、中カッコまたは大カッコ内の選択肢を区切ります。 <pre>SIZE filesize [K M]</pre>

用語

このマニュアルでは、Companion CD 製品という用語は、Oracle Database Companion CD インストール・メディアに収録された製品を指すために使用しています。これに対して、Oracle Database 10g Companion Products という用語は、Oracle Database 10g Companion Products インストール・タイプに含まれる製品を示すために使用しています。

このマニュアルではオペレーティング・システムの正式名 Solaris Operating System (SPARC 64-bit) を Solaris と短縮して使用しています。

ドキュメントへのアクセス

Oracle Database 10g リリース 2 (10.2) のドキュメントには、プラットフォーム固有のドキュメントおよび汎用製品のドキュメントがあります。

プラットフォーム固有のドキュメント

プラットフォーム固有のドキュメントには、特定のプラットフォームでの Oracle 製品のインストールと使用に関する情報が記載されています。この製品のプラットフォーム固有のドキュメントは、製品ディスクに Adobe Portable Document (PDF) 形式と HTML 形式で収録されています。ディスクに収録されたプラットフォーム固有のドキュメントにアクセスする手順は、次のとおりです。

1. Web ブラウザを使用してディスクの最上位ディレクトリにある welcome.htm ファイルを開きます。
2. 該当の製品リンクを選択します。
3. 「Documentation」タブを選択します。

印刷されたマニュアルが必要な場合は、PDF ファイルを開いて印刷してください。

製品のドキュメント

製品のドキュメントには、すべてのプラットフォームでの Oracle 製品の構成、使用または管理に関する情報が記載されています。Oracle Database 10g 製品の製品ドキュメントは、Oracle Database 10g リリース 2 (10.2) Online Documentation Library に HTML 形式と PDF 形式の両方で用意されています。このライブラリは、次の URL にある Oracle Technology Network Japan (OTN-J) の Web サイトにあります。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

サード・パーティ・ソフトウェア情報

このプログラムには、HP 社のサード・パーティ・ソフトウェアが含まれています。Oracle プログラム (HP 社のソフトウェアを含む) を使用する権利は、この製品に付随する Oracle プログラム・ライセンスによって許諾されます。これと異なる規定が Oracle プログラム・ライセンス内にある場合でも、HP 社のソフトウェアは現状のままであり、この規定によっていかなる種類の知的財産権保護、保証またはサポートもオラクル社または HP 社から提供されることはありません。

このプログラムには、IBM 社のサード・パーティ・ソフトウェアも含まれています。Oracle プログラム (IBM 社のソフトウェアを含む) を使用する権利は、この製品に付随する Oracle プログラム・ライセンスによって許諾されます。

これと異なる規定が Oracle プログラム・ライセンス内にある場合でも、IBM 社のソフトウェアは現状のままであり、この規定によっていかなる種類の知的財産権保護、保証またはサポートもオラクル社または IBM 社から提供されることはありません。

サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

Oracle サポート・サービス

オラクル製品サポートの購入方法、および Oracle サポート・サービスへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/support/>

製品マニュアル

製品のマニュアルは、次の URL にあります。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

研修およびトレーニング

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

<http://www.oracle.co.jp/education/>

その他の情報

オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

<http://www.oracle.co.jp>

<http://otn.oracle.co.jp>

注意： ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

Oracle Database Companion CD の インストールの概要

この章では、Oracle Database Companion CD インストール・メディアからインストールできる製品の概要と、各製品のインストール前に考慮する必要がある問題について説明します。この章の内容は、次のとおりです。

- Oracle Database Companion CD のインストールの概要
- Oracle HTML DB インストール・タイプでインストールされる製品
- Oracle Database 10g Products インストール・タイプでインストールされる製品
- Oracle Database 10g Companion Products インストール・タイプでインストールされる製品

Oracle Database Companion CD のインストールの概要

インストール・プロセスは、次の手順で構成されます。

1. **リリース・ノートの確認:** インストールを開始する前に『Oracle Database リリース・ノート for Solaris Operating System (SPARC 64-bit)』を一読してください。プラットフォーム固有のマニュアルに加え、リリース・ノートを利用します。最新バージョンのリリース・ノートは、次の Oracle Technology Network の Web サイトから入手できます。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

2. **インストールの計画:** この章で、インストールできる製品と、ソフトウェアのインストール前に知っておく必要のある情報を提供します。

関連項目: サイトの要件に応じた Oracle 製品の最善のインストール方法については、『Oracle Database インストール・ガイド for Solaris Operating System (SPARC 64-bit)』の付録、「インストールに関してよくある質問」を参照してください。

3. **システム要件の検証:** 第 2 章で、Companion CD 製品をインストールするために必要な最小のシステム要件について説明します。
4. **ソフトウェアのインストール:** 次の章および付録で、Companion CD 製品のインストールに関する情報を提供します。
 - 第 3 章「Oracle Database Companion CD ソフトウェアのインストール」
 - 付録 A「Oracle Database Companion CD のインストールに関するトラブルシューティング」
 - 付録 B「非対話型モードでの Oracle Database Companion CD 製品のインストール」
5. **インストール後の作業の完了:** 第 4 章で、インストール後に必要な作業および実施しておくことが望ましい作業について説明します。ポート番号の確認または変更が必要な場合は、付録 D を参照してください。
6. **Companion CD 製品の使用の開始:** 第 5 章で、Companion CD 製品を使用する上での情報を提供します。

Oracle HTML DB インストール・タイプでインストールされる製品

次の各項では、Oracle HTML DB インストール・タイプを選択した場合にインストールされる製品について説明します。

- [Oracle HTML DB](#)
- [Oracle HTTP Server](#)

注意： Oracle Universal Installer の「サマリー」画面には、Oracle HTML DB インストール・タイプを選択した場合にインストールされる製品の詳細なリストが表示されます。

Oracle HTML DB

Oracle HTML DB は、Oracle Database インストールで Web アプリケーションを迅速に開発およびデプロイするためのツールです。このツールを使用すると、デスクトップ・データベースの生産性の利点と、Oracle Database のセキュリティ、信頼性およびパフォーマンスが得られます。既存の表、ビューまたはスプレッドシートからのインポート・データに関して、わずかなプログラミングまたはスクリプト記述と Web ブラウザのみで、レポート・アプリケーションやデータ入力アプリケーションを作成できます。

Oracle HTML DB のインストール先

Oracle HTML DB は、Oracle HTTP Server とともに新規の Oracle ホームにインストールできます。または、インストール・メディアからインストールした Oracle HTTP Server が格納されている既存の Oracle ホームにこの製品をインストールできます。Oracle HTML DB の既存のインストールがある場合、このインストールは、現行のリリースの Oracle HTML DB にアップグレードされます。Oracle HTML DB は、他の Oracle HTTP Server の Oracle ホームにはインストールしないでください。

注意： Oracle HTTP Server が格納されている可能性のある他の Oracle ホームに対する Oracle HTML DB のインストールはサポートされません。

Oracle HTTP Server

Oracle HTTP Server は、Apache Standalone 10.1.2.0.0 をベースとする Web サーバーです。Oracle HTML DB インストール・タイプを使用して、新しい Oracle ホームに Oracle HTTP Server をインストールできます。

注意： Oracle Workflow 中間層コンポーネントをインストールしている場合は、Oracle HTTP Server と Oracle Database 10g Companion Products インストール・タイプを併用できます。

このスタンドアロン・リリースの Oracle HTTP Server には、次の機能が用意されています。

- Web ページの提供に使用できる堅牢で信頼性の高い Web サーバー
- mod_perl および mod_fastcgi を使用した Perl および Fast CGI スクリプトのサポート
- mod_plsql を使用した PL/SQL アプリケーションのサポート
- Oracle Process Manager and Notification サーバー (OPMN) の使用による高可用性
OPMN は Oracle HTTP Server プロセスを監視し、障害の発生時に再起動します。
- Secure Sockets Layer (SSL) を使用したセキュアなトランザクションのサポート

- mod_osso を使用したシングル・サインオン機能
シングル・サインオン機能を有効化するには、Oracle HTTP Server とともに Oracle Internet Directory および Single Sign-On Server を使用する必要があります。これらは両方とも Oracle Application Server 10g と併用できます。
- オラクル社が提供するモジュールのみでなく多数の標準 Apache モジュール

関連項目： Oracle Internet Directory および Single Sign-On Server の詳細は、『Oracle Application Server インストレーション・ガイド』を参照してください。

このリリースとその他の Oracle HTTP Server リリースの違い

Oracle HTTP Server のスタンドアロン・バージョンと Oracle ソフトウェアの他のリリースに付属しているバージョンの違いは、次のとおりです。

- Oracle9i リリース 2 以下および Oracle9iAS リリース 1 との相違
 - このリリースの Oracle HTTP Server には Apache JServ は付属していません。したがって、このリリースでの Apache JServ のサポートもありません。Apache JServ がサポートされないため、デフォルト構成では mod_oprocmgr モジュールはロードされません。
 - このリリースでは、mod_ssl が Oracle で開発された mod_oss1 に置換されています。
 - apachectl ユーティリティでは、現在、Oracle HTTP Server の起動、停止または再起動をサポートしていません。Oracle HTTP Server を起動、停止または再起動するのに OPMN を使用する必要があります。

関連項目：

- SSL 証明書を mod_oss1 に必要な書式に移行する方法の詳細は、4-7 ページの「[手順 9: サーバー証明書と秘密鍵を移行する](#)」を参照してください。
 - OPMN の使用についての詳細は、4-11 ページの「[Oracle HTTP Server の高可用性機能の有効化](#)」を参照してください。
- Oracle9iAS リリース 2 以上との相違
 - Oracle9iAS または Oracle Application Server 10g クラスタには、スタンドアロン・リリースの Oracle HTTP Server は構成できません。
このため、このリリースの Oracle HTTP Server に関連したプロセスの起動、停止または再起動には、dcmctl ユーティリティを使用できません。
 - このリリースの Oracle HTTP Server の管理には、Oracle Enterprise Manager の Application Server Control を使用できません。

Oracle HTTP Server のインストール先

Oracle HTTP Server は新規の Oracle ホームにインストールする必要があります。既存の Oracle ホームにはインストールしないでください。Oracle HTTP Server は、インストールごとに別の Oracle ホームを使用する場合にかぎり、同じシステム上に複数インストールできます。

Oracle Database 10g Products インストール・タイプでインストールされる製品

次の項では、Oracle Database 10g Products インストール・タイプを選択した場合にインストールされる製品について説明します。これらの製品は、既存の Oracle Database 10g リリース 2 (10.2) の Oracle ホームにインストールする必要があります。

- [Oracle JDBC Development Drivers](#)
- [Oracle SQLJ](#)
- [Oracle Database Examples](#)
- [Oracle Text のナレッジ・ベース](#)
- [Oracle Workflow Server](#)
- [Oracle Ultra Search](#)
- [ネイティブ・コンパイル Java ライブラリ](#)
- [JPublisher](#)

注意：

- Oracle Universal Installer の「サマリー」画面には、「Oracle Database 10g Products」インストール・タイプを選択した場合にインストールされる製品の詳細なリストが表示されます。
- Oracle Database では、現在、Legato Single Server Version (LSSV) をサポートしていません。バックアップおよびリカバリ・ツールの Oracle Database Recovery Manager (RMAN) が Oracle Database に統合されました。

RMAN の詳細は、『Oracle Database バックアップおよびリカバリ基礎』を参照してください。

Oracle JDBC Development Drivers

Oracle には、コードのデバッグおよび他のデプロイ計画に使用できる一連の JDBC ドライバが用意されています。これらのドライバは Oracle Database リリース 8.1.7 以上にアクセスできます。

Oracle SQLJ

Oracle SQLJ を使用すると、アプリケーション・プログラマは、Java の設計理念に準拠する方法で SQL 操作を Java コードに埋め込むことができます。SQLJ プログラムとは、埋込み SQL 文が含まれている Java プログラムです。Oracle SQLJ は、動的 SQL 操作（リアルタイムで変更できる操作）をサポートする拡張機能を提供します。動的 SQL 操作は、SQLJ アプリケーション内の JDBC コードまたは PL/SQL コードを介して使用することもできます。一般的なアプリケーションでは、動的 SQL よりも静的 SQL のほうが広く使用されています。SQLJ はトランスレータ (Oracle SQLJ Translator) とランタイム (Oracle SQLJ Runtime) のコンポーネントで構成され、ユーザーの開発環境に円滑に統合されます。

Oracle Database Examples

Oracle Database Examples には、Oracle Database の製品、オプションおよび機能の習得に使用できる様々な例と製品デモが含まれています。これらの例の多くは、Oracle Database にインストールできるサンプル・スキーマを処理するように設計されています。Oracle Documentation Library にあるマニュアルの多くは、Oracle Database Examples で提供されるサンプル・プログラムおよびスクリプトを使用しています。

必須製品

Oracle Database Examples を使用するには、その前にサンプル・スキーマを Oracle Database にインストールする必要があります。データベースの作成時にサンプル・スキーマを組み込むかどうかは、Oracle Database をインストールするとき、またはデータベース・コンフィギュレーション・アシスタント (DBCA) を使用して新規データベースを作成するときを選択できます。また、サンプル・スキーマを既存のデータベースに手動でインストールすることもできます。

関連項目： サンプル・スキーマを既存のデータベースに手動でインストールする方法については、『Oracle Database サンプル・スキーマ』を参照してください。

Oracle Text のナレッジ・ベース

Oracle Database 10g Products インストール・タイプは、2つの Oracle Text ナレッジ・ベース（英語とフランス語）をインストールします。提供されるナレッジ・ベースは、要件に応じて拡張できます。あるいは、英語とフランス語以外の言語で独自のナレッジ・ベースを作成できます。

関連項目： ナレッジ・ベースの作成および拡張の詳細は、『Oracle Text リファレンス』を参照してください。

Oracle Workflow Server

Oracle Workflow は、ビジネス・プロセス・ベースの統合をサポートする完全なワークフロー管理システムを提供します。これにより、ビジネス・プロセスのモデル化、自動化および継続的な改善が可能になり、ユーザー定義のビジネス・ルールに従って様々な情報をルーティングできます。Oracle Workflow のインストールでは、Oracle Database 10g Products インストール・タイプの場合は Oracle Workflow Server および Oracle Workflow Manager がインストールされ、Oracle Database 10g Companion Products インストール・タイプの場合は Oracle Workflow 中間層コンポーネントがインストールされます。

このリリースでは、Oracle Workflow Manager の Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) インスタンスの起動で、2つのスクリプトが実行されるように簡素化されました。

注意： Oracle E-Business Suite データベースには、Oracle Workflow Server をインストールしないでください。Oracle Database 10g と併用できる Oracle Workflow バージョンを使用する場合、またはこのバージョンの Oracle Workflow に基づいて Oracle Database コンポーネントを使用する場合は、Oracle E-Business Suite インスタンスが使用していないデータベースに Oracle Workflow Server をインストールする必要があります。

Oracle E-Business Suite データベースについては、Oracle E-Business Suite に埋め込まれている Oracle Workflow Server のバージョンを引き続き使用できます。

関連項目： Oracle Workflow Client インストール・ソフトウェアは、Oracle Technology Network の Web サイトから入手できます。

<http://www.oracle.com/technology/products/ias/workflow/index.html>

Oracle Workflow をインストールするその他のインストール・タイプ

Oracle Workflow は、次の製品の一部のインストール・タイプを使用してインストールすることもできます。

- Oracle Application Server 10g
- Oracle Content Management SDK 10g

これらのいずれかの製品をインストールした場合は、Oracle Workflow がすでにインストールされている可能性があります。この場合は Oracle Workflow を再度インストールする必要はありません。

Oracle Ultra Search

Oracle Ultra Search を使用すると、Web サイト、データベース表、ファイル、メーリング・リスト、Oracle Application Server のポータルおよびユーザー定義のデータソースを索引付けおよび検索できます。また、様々な種類の検索アプリケーションを作成できます。

ネイティブ・コンパイル Java ライブラリ

「Oracle Database 10g Products」インストール・タイプは、JAccelerator および Oracle *interMedia* Image Accelerator をインストールします。これには、Oracle JVM および Oracle *interMedia* 用のネイティブ・コンパイル Java ライブラリ (NCOMP) が含まれています。プラットフォーム上でこの 2 つの製品のパフォーマンスを改善するには、これらのライブラリが必要です。

JPublisher

JPublisher は Java ユーティリティであり、Java プログラム内で次のユーザー定義データベース・エンティティを表す Java クラスを生成します。

- SQL オブジェクト型
- オブジェクト参照型 (REF 型)
- SQL コレクション型 (VARRAY 型または NESTED TABLE 型)
- PL/SQL パッケージ
- サーバー・サイド Java クラス
- SQL 問合せおよび DML 文

JPublisher を使用すると、SQL オブジェクト型、オブジェクト参照型およびコレクション型 (VARRAY またはネストした表) から Java クラスへのマッピングを強い型指定で指定し、カスタマイズできます。

また、JPublisher で PL/SQL パッケージ用のクラスも生成できます。これらのクラスは、PL/SQL パッケージ内でストアド・プロシージャを起動するためのラッパー・メソッドを持ちます。

さらに、JPublisher により Java から PL/SQL のみの型へのアクセスが単純化されます。PL/SQL の型と SQL の型の間で事前定義済マッピングまたはユーザー定義マッピングを使用できます。また、これらの型の間で PL/SQL 変換ファンクションを使用できます。これらの型が適切に対応していれば、JPublisher では必要な Java および PL/SQL コードが自動的に生成されます。

SQL または PL/SQL エンティティを Java に公開する場合と同じように、サーバー・サイド Java クラスをクライアント・サイド Java クラスに公開できます。これにより、アプリケーションからデータベースの Java クラスを直接コールできます。

JPublisher を使用すると、生成された Java クラスを Web サービスとして公開できます。たとえば、SQL または PL/SQL エンティティやサーバー・サイド Java エンティティを公開できます。

JPublisher は、生成されるほとんどの Java クラスで SQLJ コードを使用するため、Oracle SQLJ Translator および Oracle SQLJ Runtime が組み込まれています。Oracle SQLJ は、Java プログラムに SQL 文を埋め込むための標準的な方法です。

Oracle SQLJ Translator

JPublisher は生成されるクラスで SQLJ コードを使用するため、必要に応じて、コードの生成プロセスで Oracle SQLJ Translator を自動的にコールします。Oracle SQLJ Translator は、埋込み SQL 文を JDBC コールに変換します。

Oracle SQLJ Runtime

Oracle SQLJ Runtime はプログラムの実行中に使用され、JPublisher によって生成されたほとんどのクラスを実行します。SQLJ Runtime は、JDBC ドライバ上で動作する、Pure Java コードの Thin レイヤーです。SQLJ Runtime は、SQL 操作に関する情報を読み取り、JDBC ドライバに指示を伝達する中間プログラムとして機能します。

関連項目：『Oracle Database JPublisher ユーザーズ・ガイド』

Oracle Database 10g Companion Products インストール・タイプでインストールされる製品

次の項では、Oracle Database 10g Companion Products インストール・タイプを選択した場合にインストールできる製品について説明します。

- [Oracle Workflow 中間層コンポーネント](#)
- [Oracle HTTP Server](#)

Oracle Workflow 中間層コンポーネント

Oracle Workflow 中間層コンポーネントを使用すると、Oracle Workflow のデータベース・アクセス記述子 (DAD) や仮想ディレクトリ・マッピングも含めて、Oracle Workflow ユーザー・インタフェース Web ページが使用可能になります。Oracle Workflow Server を使用するには、その前に Oracle Workflow 中間層コンポーネントをインストールする必要があります。

Oracle Database 10g Companion Products インストール・タイプを使用すると、Oracle Workflow Server をインストールした後に Oracle Workflow 中間層コンポーネントをインストールできます。

Oracle HTTP Server

Oracle HTTP Server の詳細は、1-3 ページの「[Oracle HTTP Server](#)」を参照してください。

Oracle Database Companion CD の要件

この章では、Oracle Database 10g Companion CD インストール・メディアから製品をインストールするための要件について説明します。この章の内容は、次のとおりです。

- ハードウェアおよびソフトウェアの動作保証
- Oracle ソフトウェアをインストールするための一般的な要件
- Oracle HTML DB 製品をインストールするための要件
- Oracle Database 10g Products のインストール要件
- Oracle Database 10g Companion Products のインストール要件
- ネットワークの設定

ハードウェアおよびソフトウェアの動作保証

このマニュアルに記載されているプラットフォーム固有のハードウェア要件とソフトウェア要件は、このマニュアルの発行時点での最新情報です。ただし、このマニュアルの発行後にプラットフォームとオペレーティング・システム・ソフトウェアの新バージョンが動作保証されている場合があるため、Oracle MetaLink の Web サイトで動作保証情報を確認してください。この Web サイトには、動作保証されているハードウェア・プラットフォームとオペレーティング・システムのバージョンの最新リストが掲載されています。Oracle MetaLink の Web サイトには、次の URL からアクセスできます。

<http://metalink.oracle.com>

Oracle ソフトウェアをインストールするための全般的な要件

次の各項では、Oracle ソフトウェアをインストールするための全般的な要件について説明します。

- [root としてのシステムへのログイン](#)
- [必要なオペレーティング・システム・グループおよびユーザー](#)
- [必須ソフトウェア・ディレクトリ](#)
- [oracle ユーザーの環境の構成](#)

root としてのシステムへのログイン

Oracle ソフトウェアをインストールする前に、root ユーザーとして複数の作業を完了しておく必要があります。root ユーザーとしてログインするには、次の手順のどちらか一方を実行します。

注意： サイレント・インストールを実行する場合を除き、X Window System ワークステーション、X 端末、または X サーバー・ソフトウェアがインストールされている PC またはその他のシステムからソフトウェアをインストールする必要があります。

- X Window System ワークステーションまたは X 端末からソフトウェアをインストールする手順は、次のとおりです。
 1. X 端末 (xterm) などのローカル・ターミナル・セッションを開始します。
 2. ソフトウェアをローカル・システムにインストールしない場合は、次のコマンドを入力して、ローカルの X サーバー上にリモート・ホストの X アプリケーションを表示します。

```
$ xhost fully_qualified_remote_host_name
```
 3. ソフトウェアをローカル・システムにインストールしない場合は、ssh、rlogin または telnet コマンドを使用して、ソフトウェアをインストールするシステムに接続します。

```
$ telnet remote_host
```
 4. root ユーザーとしてログインしていない場合は、次のコマンドを入力してユーザーを root に切り替えます。

```
$ su - root
```

- X サーバー・ソフトウェアがインストールされている PC またはその他のシステムからソフトウェアをインストールする手順は、次のとおりです。

注意： この手順の詳細は、必要に応じて X サーバーのドキュメントを参照してください。使用中の X サーバー・ソフトウェアによっては、作業を異なる順序で完了することが必要な場合もあります。

1. X サーバー・ソフトウェアを起動します。
2. X サーバー・ソフトウェアのセキュリティ設定を構成して、リモート・ホストの X アプリケーションをローカル・システム上で表示できるように構成します。
3. ソフトウェアをインストールするリモート・システムに接続し、そのシステム上で X 端末 (xterm) などのターミナル・セッションを開始します。
4. リモート・システムで root ユーザーとしてログインしていない場合は、次のコマンドを入力してユーザーを root に切り替えます。

```
$ su - root
```

必要なオペレーティング・システム・グループおよびユーザー

このシステムへ Oracle ソフトウェアを初めてインストールするかどうか、およびインストールする製品によっては、次のオペレーティング・システム・グループおよびユーザーの作成が必要になる場合があります。

- Oracle インベントリ・グループ (通常は oinstall)

Oracle ソフトウェアをシステムに初めてインストールする場合は、Oracle インベントリ・グループを作成する必要があります。通常、このグループ用に選択する名前は oinstall です。このグループは、システムにインストールされている全 Oracle ソフトウェアのカタログである Oracle インベントリの所有者となります。

注意： すでに Oracle ソフトウェアがシステムにインストールされている場合は、既存の Oracle インベントリ・グループを、新規 Oracle ソフトウェアのインストールに使用するオペレーティング・システム・ユーザーのプライマリ・グループにする必要があります。

- Oracle ソフトウェア所有者ユーザー (通常は oracle)

Oracle ソフトウェアをシステムに初めてインストールする場合は、Oracle ソフトウェア所有者ユーザーを作成する必要があります。このユーザーは、特定のインストールでインストールされる全ソフトウェアの所有者となります。このユーザーのプライマリ・グループには、Oracle インベントリ・グループを指定する必要があります。

注意： Oracle のドキュメントでは、Oracle ソフトウェア所有者ユーザーは oracle ユーザーと呼ばれます。

システム上の Oracle ソフトウェアの全インストールに対して、1つの Oracle インベントリ・グループが必要です。初回インストール後は、そのシステムへの以降のすべての Oracle ソフトウェアのインストールに、同じ Oracle インベントリ・グループを使用する必要があります。ただし、個別にインストールする場合は、異なる Oracle ソフトウェア所有者ユーザーを作成して、別のインストールにすることはできます。

注意： ローカル・ユーザーおよびグループを作成するかわりに、ディレクトリ・サービスに適切なユーザーおよびグループを作成できます。たとえば、Network Information Service (NIS) などのディレクトリ・サービスです。ディレクトリ・サービスの使用方法は、システム管理者に問い合わせるか、またはオペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。

次の各項では、Oracle インベントリ・グループおよび Oracle ソフトウェア所有者ユーザーの作成方法について説明します。

- Oracle インベントリ・グループ
- Oracle ソフトウェア所有者ユーザー

Oracle インベントリ・グループ

すでに Oracle ソフトウェアがシステムにインストールされている場合は、既存の Oracle インベントリ・グループを、新規 Oracle ソフトウェアのインストールに使用するオペレーティング・システム・ユーザーのプライマリ・グループにする必要があります。次の各項では、既存のインベントリ・グループを識別する方法と、必要な場合に作成する方法について説明します。

Oracle インベントリ・グループの有無の判別

Oracle ソフトウェアをシステムに初めてインストールするときに、Oracle Universal Installer により oraInst.loc ファイルが作成されます。このファイルで、Oracle インベントリ・グループ名および Oracle インベントリ・ディレクトリのパスが識別されます。Oracle インベントリ・グループが存在するかどうかを判別するには、次のコマンドを入力します。

```
# more /var/opt/oracle/oraInst.loc
```

このコマンドの出力に oinstall グループ名が表示される場合、そのグループはすでに存在しています。

oraInst.loc ファイルが存在する場合、このコマンドの出力は次のようになります。

```
inventory_loc=/u01/app/oracle/oraInventory
inst_group=oinstall
```

inst_group パラメータは、Oracle インベントリ・グループ名 oinstall を示しています。

Oracle インベントリ・グループの作成

注意： Oracle インベントリ・グループのグループ名には oinstall を使用することをお勧めします。

oraInst.loc ファイルが存在しない場合は、次のコマンドを入力して oinstall グループを作成します。

```
# /usr/sbin/groupadd oinstall
```

Oracle ソフトウェア所有者ユーザー

次のいずれかの場合には、Oracle ソフトウェア所有者ユーザーを作成する必要があります。

- Oracle ソフトウェア所有者ユーザーが存在しない場合（Oracle ソフトウェアを初めてインストールする場合など）。
- Oracle ソフトウェア所有者ユーザーは存在するが、別のオペレーティング・システム・ユーザーを使用する場合。

注意： このドキュメントでは、Oracle ソフトウェア所有者ユーザーは `oracle` と呼ばれます。

Oracle ソフトウェア所有者ユーザーの有無の判別

`oracle` という名前の Oracle ソフトウェア所有者ユーザーが存在するかどうかを判別するには、次のコマンドを入力します。

```
# id -a oracle
```

`oracle` ユーザーが存在する場合、このコマンドの出力は次のようになります。

```
uid=440(oracle) gid=200(oinstall) groups=201(dba),202(oper)
```

ユーザーが存在する場合は、既存のユーザーを使用するか、ユーザーを作成するかどうかを決定します。既存のユーザーを使用する場合は、そのユーザーのプライマリ・グループが Oracle インベントリ・グループであることを確認します。

詳細は、次のいずれかの項を参照してください。

注意： 既存のユーザーを使用または変更する前に、必要に応じてシステム管理者に問い合せてください。

- 既存の Oracle ソフトウェア所有者ユーザーを使用する場合で、そのユーザーのプライマリ・グループが Oracle インベントリ・グループの場合は、2-6 ページの「[必須ソフトウェア・ディレクトリ](#)」の項を参照してください。
- 既存のユーザーを変更する場合は、2-6 ページの「[既存の Oracle ソフトウェア所有者ユーザーの変更](#)」の項を参照してください。
- ユーザーを作成する場合は、次の項を参照してください。

Oracle ソフトウェア所有者ユーザーの作成

Oracle ソフトウェア所有者ユーザーが存在しない場合、または新規 Oracle ソフトウェア所有者ユーザーが必要な場合は、次の手順で作成します。

注意： 次の手順では、`oracle` という名前のユーザーがすでに存在する場合を除き、ユーザー名 `oracle` を使用してください。

1. `oracle` ユーザーを作成するには、次のようなコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/useradd -g oinstall[ -G dba] oracle
```

各項目の意味は次のとおりです。

- `-g` オプションでは、`oinstall` などのプライマリ・グループを指定します。これは、Oracle インベントリ・グループを指定する必要があります。
- `-G` オプションは、オプションのセカンダリ・グループを指定します。

2. 次のように oracle ユーザーのパスワードを設定します。

```
# passwd -r files oracle
```

作業を進めるには、2-6 ページの「[必須ソフトウェア・ディレクトリ](#)」の項を参照してください。

既存の Oracle ソフトウェア所有者ユーザーの変更

oracle ユーザーが存在し、プライマリ・グループが oinstall ではない場合は、次のようなコマンドを入力し、-g オプションを使用してプライマリ・グループを指定し、-G オプションを使用して必要なセカンダリ・グループを指定します。

```
# /usr/sbin/usermod -g oinstall -G dba oracle
```

必須ソフトウェア・ディレクトリ

この項では、Oracle ソフトウェアについて識別または作成する必要がある次のディレクトリについて説明します。

- Oracle ベース・ディレクトリ
- Oracle インベントリ・ディレクトリ
- Oracle ホーム・ディレクトリ

Oracle ベース・ディレクトリ

Oracle ベース・ディレクトリは、Oracle ソフトウェア・インストールの最上位ディレクトリとなります。Microsoft Windows システム上で Oracle ソフトウェアに使用される C:\¥Oracle ディレクトリに似ています。UNIX ベースのシステム上では、Optimal Flexible Architecture (OFA) ガイドラインに、Oracle ベース・ディレクトリに次のようなパスを使用するという推奨事項があります。

```
/mount_point/app/oracle_sw_owner
```

各項目の意味は次のとおりです。

- `mount_point` は、Oracle ソフトウェアが格納されるファイル・システムのマウント・ポイント・ディレクトリです。
このマニュアルの例では、マウント・ポイント・ディレクトリに `/u01` を使用しています。ただし、別のマウント・ポイント・ディレクトリも選択できます。たとえば、`/oracle` または `/opt/oracle` です。
- `oracle_sw_owner` は、oracle など、Oracle ソフトウェア所有者のオペレーティング・システム・ユーザー名です。

複数のインストールに同じ Oracle ベース・ディレクトリを使用する方法と、インストールごとに個別の Oracle ベース・ディレクトリを作成する方法があります。様々なオペレーティング・システム・ユーザーが同じシステムに Oracle ソフトウェアをインストールする場合は、各ユーザーが個別の Oracle ベース・ディレクトリを作成する必要があります。たとえば、次の Oracle ベース・ディレクトリは、同時に同じシステムに存在することが可能です。

```
/u01/app/oracle  
/u01/app/orauser  
/opt/oracle/app/oracle
```

Oracle ベース・ディレクトリを作成するか既存のものを使用するかを問わず、ORACLE_BASE 環境変数を設定してこのディレクトリへのフル・パスを指定する必要があります。

注意： システムに他の Oracle ベース・ディレクトリが存在する場合にも、Oracle ベース・ディレクトリを作成できます。

既存の Oracle ベース・ディレクトリの識別

既存の Oracle ベース・ディレクトリのパスが、Oracle Flexible Architecture (OFA) ガイドラインに準拠していない場合があります。ただし、既存の Oracle インベントリ・ディレクトリまたは既存の Oracle ホーム・ディレクトリを識別する場合には、通常、Oracle ベース・ディレクトリを識別できます。次の手順を実行します。

- 既存の Oracle インベントリ・ディレクトリの識別

次のコマンドを入力して oraInst.loc ファイルの内容を表示します。

```
# more /var/opt/oracle/oraInst.loc
```

oraInst.loc ファイルが存在する場合、このコマンドの出力は次のようになります。

```
inventory_loc=/u01/app/oracle/oraInventory
inst_group=oinstall
```

inventory_loc パラメータは、Oracle インベントリ・ディレクトリ (oraInventory) を示します。oraInventory ディレクトリの親ディレクトリは、通常、Oracle ベース・ディレクトリです。前述の例では、/u01/app/oracle が Oracle ベース・ディレクトリです。

- 既存の Oracle ホーム・ディレクトリの識別

次のコマンドを入力して oratab ファイルの内容を表示します。

```
# more /var/opt/oracle/oratab
```

oratab ファイルが存在する場合は、次のような行が含まれています。

```
*:/u03/app/oracle/product/10.2.0/db_1:N
*/opt/orauser/infra_904:N
*/oracle/9.2.0:N
```

各行で指定されているディレクトリ・パスは、Oracle ホーム・ディレクトリを示します。使用する Oracle ソフトウェア所有者のユーザー名が末尾に付いているディレクトリ・パスが、Oracle ベース・ディレクトリとして有効な選択となります。前述の例で、ソフトウェアのインストールに oracle ユーザーを使用する場合は、次のディレクトリのどちらかを選択できます。

```
/u03/app/oracle
/oracle
```

注意： 可能な場合は、1 行目のようなディレクトリ・パス (/u03/app/oracle) を選択してください。このパスは OFA ガイドラインに準拠しています。

決定した方法に応じて、次のどちらかを参照してください。

- Oracle ベース・ディレクトリが存在し、それを使用する場合は、2-9 ページの「[oracle ユーザーの環境の構成](#)」の項を参照してください。

oracle ユーザーの環境を構成するときに (後述)、選択したディレクトリを指定するように ORACLE_BASE 環境変数を設定します。

- Oracle ベース・ディレクトリがシステムに存在しない場合、または Oracle ベース・ディレクトリを作成する場合は、次の項を参照してください。

Oracle ベース・ディレクトリの作成

適切なファイル・システムを識別する手順は、次のとおりです。

1. `df -k` コマンドを使用して、マウントされている各ファイル・システムの空きディスク領域を判断します。
2. 表示される出力から、十分な空き領域のあるファイル・システムを識別します。
3. 識別したファイル・システム用のマウント・ポイント・ディレクトリの名前をメモします。

Oracle ベース・ディレクトリを作成し、適切な所有者、グループおよびアクセス権を指定する手順は、次のとおりです。

1. 次のような各コマンドを入力して、識別したマウント・ポイント・ディレクトリに推奨サブディレクトリを作成し、それに対する適切な所有者、グループおよびアクセス権を設定します。

```
# mkdir -p /mount_point/app/oracle_sw_owner
# chown -R oracle:oinstall /mount_point/app/oracle_sw_owner
# chmod -R 775 /mount_point/app/oracle_sw_owner
```

識別したマウント・ポイントが `/u01` で、`oracle` が Oracle ソフトウェア所有者のユーザーの場合、推奨される Oracle ベース・ディレクトリ・パスは次のようになります。

```
/u01/app/oracle
```

2. この後の項で `oracle` ユーザーの環境を構成するときに、`ORACLE_BASE` 環境変数を設定してこのディレクトリを指定してください。

Oracle インベントリ・ディレクトリ

Oracle インベントリ・ディレクトリ (`oraInventory`) には、システムにインストールされた全ソフトウェアのインベントリが格納されます。このディレクトリは、単一システムにインストールされたすべての Oracle ソフトウェアに必須であり、共有のものです。システムに Oracle ソフトウェアを初めてインストールするときには、Oracle Universal Installer からこのディレクトリへのパス指定を求めるプロンプトが表示されます。次のパスを選択することをお勧めします。

```
oracle_base/oraInventory
```

Oracle Universal Installer により、指定したディレクトリが作成され、そこに適切な所有者、グループおよびアクセス権が設定されます。Oracle インベントリ・ディレクトリを手動で作成する必要はありません。

注意： このディレクトリは、すべての Oracle ソフトウェアのインストールで使用されます。必ず定期的にバックアップを作成してください。

すべての Oracle ソフトウェアをシステムから完全に削除する場合を除き、このディレクトリを削除しないでください。

Oracle ホーム・ディレクトリ

Oracle ホーム・ディレクトリは、特定の Oracle 製品のソフトウェアをインストールするために選択するディレクトリです。様々な Oracle 製品、または同じ Oracle 製品の異なるリリースは、個別の Oracle ホーム・ディレクトリにインストールする必要があります。Oracle Universal Installer を実行すると、このディレクトリへのパスと識別名の指定を求めるプロンプトが表示されます。Oracle ホーム・ディレクトリは、Oracle ベース・ディレクトリのサブディレクトリとして指定する必要があります。Oracle ホーム・ディレクトリについては、次のようなパスを指定することをお勧めします。

```
oracle_base/product/10.2.0/companion_1
```

Oracle Universal Installer により、指定したディレクトリ・パスが Oracle ベース・ディレクトリの下に作成されます。また、適切な所有者、グループおよびアクセス権も設定されます。Oracle ホーム・ディレクトリを手動で作成する必要はありません。

oracle ユーザーの環境の構成

Oracle Universal Installer は oracle アカウントから実行します。ただし、Oracle Universal Installer を起動する前に、oracle ユーザーの環境を構成する必要があります。環境を構成するには、次の設定が必要です。

- シェル起動ファイルで、デフォルトのファイル・モード作成マスク (umask) を 022 に設定します。
- DISPLAY 環境変数を設定します。

oracle ユーザーの環境を設定する手順は、次のとおりです。

1. X 端末 (xterm) などの新規ターミナル・セッションを開始します。
2. 次のコマンドを入力して、リモート・ホスト上で実行されている X Window アプリケーションがこのシステムに表示されるかどうかを確認します。


```
$ xhost fully_qualified_remote_host_name
```
3. ソフトウェアをインストールするシステムにログインしていない場合は、そのシステムに oracle ユーザーとしてログインします。
4. oracle ユーザーとしてログインしていない場合は、ユーザーを oracle に切り替えます。


```
$ su - oracle
```
5. oracle ユーザーのデフォルト・シェルを判別するには、次のコマンドを入力します。


```
$ echo $SHELL
```
6. テキスト・エディタで oracle ユーザーのシェル起動ファイルを開きます。
 - Bash (bash) シェルの場合


```
$ vi .bash_profile
```
 - Bourne シェル (sh) または Korn シェル (ksh) の場合


```
$ vi .profile
```
 - C シェル (csh または tcsh) の場合


```
% vi .login
```
7. 次の行を入力または編集して、デフォルトのファイル・モード作成マスクに値 022 を指定します。


```
umask 022
```
8. ファイル内で ORACLE_SID、ORACLE_HOME または ORACLE_BASE 環境変数が設定されている場合は、ファイルから該当する行を削除します。
9. ファイルを保存してエディタを終了します。
10. シェル起動スクリプトを実行するには、次のいずれかのコマンドを入力します。
 - Bash シェルの場合


```
$ . ./bash_profile
```
 - Bourne または Korn シェルの場合


```
$ . ./profile
```
 - C シェルの場合


```
% source ./login
```

11. ソフトウェアをローカル・システムにインストールしない場合は、次のコマンドを入力し、Xアプリケーションをローカル・システム上に表示するように指示します。

- Bourne、Bash または Korn シェルの場合

```
$ DISPLAY=local_host:0.0 ; export DISPLAY
```

- C シェルの場合

```
% setenv DISPLAY local_host:0.0
```

この例で、`local_host` は、Oracle Universal Installer の表示に使用するシステム（ワークステーションまたは PC）のホスト名または IP アドレスです。

12. /tmp ディレクトリの空きディスク領域が必要量より少ないと判断した場合、必要量の空き領域があるファイル・システムを識別し、TMP および TMPDIR 環境変数を設定して、このファイル・システムの一時的ディレクトリを指定します。手順は次のとおりです。

- a. `df -k` コマンドを使用して、十分な空き領域がある適切なファイル・システムを識別します。

- b. 必要に応じて、次のような各コマンドを入力して、識別したファイル・システムに一時的ディレクトリを作成し、このディレクトリに対する適切なアクセス権を設定します。

```
$ su - root
# mkdir /mount_point/tmp
# chmod a+wr /mount_point/tmp
# exit
```

- c. 次のようなコマンドを入力し、TMP および TMPDIR 環境変数を設定します。

- * Bourne、Bash または Korn シェルの場合

```
$ TMP=/mount_point/tmp
$ TMPDIR=/mount_point/tmp
$ export TMP TMPDIR
```

- * C シェルの場合

```
% setenv TMP /mount_point/tmp
% setenv TMPDIR /mount_point/tmp
```

13. 次のコマンドを入力して、ORACLE_HOME および TNS_ADMIN 環境変数が設定されていないことを確認します。

- Bourne、Bash または Korn シェルの場合

```
$ unset ORACLE_HOME
$ unset TNS_ADMIN
```

- C シェルの場合

```
% unsetenv ORACLE_HOME
% unsetenv TNS_ADMIN
```

14. 環境が適切に設定されたかどうかを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
$ umask
$ env | more
```

`umask` コマンドで値 22、022 または 0022 が表示され、この項で設定した環境変数が正しい値になっていることを確認します。

Oracle HTML DB 製品をインストールするための要件

Oracle HTML DB インストール・タイプをインストールすると、Oracle HTML DB、Oracle HTTP Server、または Oracle HTML DB と Oracle HTTP Server をインストールできます。

注意： Oracle HTML DB 製品は、Oracle Database で使用する Oracle ホームとは別の Oracle ホームにインストールする必要があります。

Oracle HTML DB 製品インストール・タイプの要件は、次のように分類できます。

- [Oracle HTTP Server の要件](#)
- [Oracle HTML DB の要件](#)

Oracle HTTP Server の要件

Oracle HTTP Server は新規の Oracle ホームにインストールする必要があります。Oracle HTTP Server は、インストールごとに個別の Oracle ホーム・ディレクトリを使用させることにより、同じシステム上に複数インストールできます。

Oracle HTTP Server を新規の Oracle ホームにインストールする前に、システムが次の要件を満たしていることを確認してください。

- [Oracle Database の要件](#)
- [ハードウェア要件](#)
- [ソフトウェア要件](#)

Oracle Database の要件

Oracle HTTP Server を実行するには、Oracle9 ただし、Oracle HTTP Server は個別のホームに存在する必要があります。

たとえば、Oracle Database を OraDB10g_Home1 にインストールしたとします。Oracle Universal Installer を実行して Oracle HTML DB をインストールするとき、OraDB10g_Home1 にインストールした Oracle Database を指定できます。ただし、Oracle HTML DB は、Oracle HTTP Server を含む Oracle ホームとは別の Oracle ホーム（たとえば、OraDB10g_Home2）にインストールする必要があります。

ハードウェア要件

システムは、次の最小ハードウェア要件を満たしている必要があります。

- 256 MB の物理 RAM
- 512 MB のスワップ領域
- /tmp ディレクトリに 125 MB の空きディスク領域
- ソフトウェア・ファイル用に 530 MB の空きディスク領域

システムがこれらの要件を満たしているかどうかを確認する手順は、次のとおりです。

1. 物理 RAM のサイズを判別するには、次のコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/prtconf | grep "Memory size"
```

システムにインストールされている物理 RAM のサイズが必要サイズより小さい場合は、先に進む前にメモリーを増設する必要があります。

2. 構成済スワップ領域のサイズを判別するには、次のコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/swap -s
```

追加のスワップ領域を構成する方法は、必要に応じてオペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。

3. /tmp ディレクトリの空きディスク領域の量を判別するには、次のコマンドを入力します。

```
# df -k /tmp
```

/tmp ディレクトリの空きディスク領域が 125 MB 未満の場合は、次のいずれかの手順を実行します。

- /tmp ディレクトリから不要なファイルを削除します。
- oracle ユーザーの環境を設定するときに、TMP および TMPDIR 環境変数を設定します。
- /tmp ディレクトリを含むファイル・システムを拡張します。ファイル・システムの拡張については、必要に応じてシステム管理者に問い合わせてください。

4. システム上の空きディスク領域の量を判別するには、次のコマンドを入力します。

```
# df -k
```

5. システム・アーキテクチャでソフトウェアを実行できるかどうかを判別するには、次のコマンドを入力します。

```
# /bin/isainfo -kv
```

このコマンドの予期される出力はプロセッサのタイプです。プロセッサのアーキテクチャが、現行リリースの要件と一致していることを確認してください。

注意： 予期される出力が表示されない場合、このシステムにはソフトウェアをインストールできません。

ソフトウェア要件

システムに次のソフトウェアがインストールされているかどうかを確認します。これらの要件を確認する手順は、表の後に説明します。

項目	要件
オペレーティング・システム	次のいずれかの 64 ビット・オペレーティング・システム・バージョン <ul style="list-style-type: none"> ■ Solaris 8 Update 7 以上 ■ Solaris 9 Update 6 以上 ■ Solaris 10
パッケージ	SUNWarc SUNWbtool SUNWhea SUNWlibm SUNWlibms SUNWspot SUNWtoo SUNWilof SUNWilcs SUNWi15cs SUNWxfnt SUNWspox 注意： ロケールによっては、Java 用の追加フォント・パッケージが必要となる場合もあります。詳細は、次の Web サイトを参照してください。 http://java.sun.com/j2se/1.4.2/font-requirements.html

項目	要件
Oracle Messaging Gateway	Oracle Messaging Gateway は、Oracle Streams Advanced Queuing (AQ) の次のソフトウェアとの統合をサポートしています。 IBM MQSeries V5.3、クライアントおよびサーバー Tibco Rendezvous 7.2
PL/SQL ネイティブ・コンパイル	次のいずれか： <ul style="list-style-type: none"> ■ Sun ONE Studio 8 (C および C++ 5.5) ■ gcc 3.4.2
Pro*C/C++、Oracle Call Interface、Oracle C++ Call Interface、Oracle XML Developer's Kit (XDK)、GNU Compiler Collection (GCC)	Sun ONE Studio 8 (C および C++ 5.5)
Oracle JDBC/OCI ドライバ	次のオプションの JDK バージョンを Oracle JDBC/OCI ドライバとともに使用できますが、インストールには必要ありません。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Sun Java 2 SDK Standard Edition 1.2.2_14 および JNDI 拡張機能 ■ Sun Java 2 SDK Standard Edition 1.3.1_09 および JNDI 拡張機能 ■ Sun Java 2 SDK Standard Edition 1.4.2-b05 以上 (32 ビットおよび 64 ビット用、JNDI 拡張機能付き) 注意： このリリースでは JDK 1.4.2 がインストールされます。

システムがこれらの要件を満たしているかどうかを確認する手順は、次のとおりです。

1. オペレーティング・システムのバージョンを判別するには、次のコマンドを入力します。

```
# uname -r
```

このコマンドのサンプル出力を次に示します。

```
5.9
```

このサンプル出力では、表示されたバージョンは Solaris 9 (5.9) です。オペレーティング・システムのアップグレードの詳細は、必要に応じてオペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。

2. 必要なパッケージがインストールされているかどうかを判別するには、チェックするパッケージごとに次のようなコマンドを入力します。

```
# pkginfo -i SUNWarc SUNWbtool SUNWhea SUNWlibm SUNWlibms SUNWsprot \
SUNWsprox SUNWtoo SUNWilof SUNWilcs SUNWl15cs SUNWxfnt
```

パッケージがインストールされていない場合、インストールします。

必要なパッチのチェック

注意： 次の表に示すパッチ・バージョンは最低バージョンです。同じパッチの以降のバージョンもサポートされています。

必要なオペレーティング・システム・パッチは次のとおりです。

インストール・タイプ または製品	要件
すべてのインストール	<p>Solaris 8 のパッチ：</p> <p>Solaris 8 の J2SE Patch Cluster に含まれるすべてのパッチ：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 108528-23、SunOS 5.8: kernel update patch ■ 108652-66、X11 6.4.1: Xsun patch ■ 108773-18、SunOS 5.8: IIIM and X I/O Method patch ■ 108921-16、CDE 1.4: dtwm patch ■ 108940-53、Motif 1.2.7 and 2.1.1: Runtime lib. patch for Solaris 8 ■ 108987-13、SunOS 5.8: Patch for patchadd and patchrm ■ 108989-02、/usr/kernel/sys/acctctl & /.../exacctsypatch patch ■ 108993-45、SunOS 5.8: LDAP2 client, libc, libthread and libnsl libraries patch ■ 109147-24、SunOS 5.8: linker patch ■ 110386-03、SunOS 5.8: RBAC Feature Patch ■ 111023-02、SunOS 5.8: /kernel/fs/mntfs and ... sparcv9/mntfs ■ 111111-03、SunOS 5.8: /usr/bin/nawk patch ■ 111308-03、SunOS 5.8: /usr/lib/libmtmalloc.so.1 patch ■ 111310-01、SunOS 5.8: /usr/lib/libdhcpageant.so.1 patch ■ 112396-02、SunOS 5.8: /usr/bin/fgrep patch <p>次の追加パッチ：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 111721-04、SunOS 5.8: Math Library (libm) patch ■ 112003-03、SunOS 5.8: Unable to load fontset ... iso-1 or iso-15 ■ 112138-01、SunOS 5.8: usr/bin/domainname patch
すべてのインストール	<p>Solaris 9 のパッチ：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 112233-11、SunOS 5.9: Kernel Patch ■ 111722-04、SunOS 5.9: Math Library (libm) patch <p>Numa Systems では次の追加パッチが必要です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 115675-01、SunOS 5.9: liblgrp API ■ 113471-08、SunOS 5.9: Miscellaneous SunOS Commands Patch ■ 115675-01、SunOS 5.9: /usr/lib/liblgrp.so Patch
PL/SQL ネイティブ・コンパイル、Pro*C/C++、Pro*FORTRAN、Oracle Call Interface、Oracle C++ Call Interface、Oracle XML Developer's Kit (XDK)	<p>Solaris 8 および Solaris 9 のパッチ：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 112760-05、C 5.5: Patch for S1S8CC C compiler

インストール・タイプ または製品	要件
Oracle Messaging Gateway	WebSphere MQ の Corrective Service Diskettes (CSD) : <ul style="list-style-type: none"> ■ MQSeries V5.1 の CSD09 以上 ■ MQSeries Client for Sun Solaris, Intel Platform Edition- V5.1 SupportPac MACE

オペレーティング・システム・パッチがインストールされているかどうかを判別するには、次のようなコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/patchadd -p | grep patch_number
```

注意： 前述のコマンドでパッチ番号を指定する際に、バージョン番号を含めないでください。こうすることで、パッチのいずれかのバージョンがインストールされていれば、コマンドにより結果が戻されます。

オペレーティング・システム・パッチがインストールされていない場合、次の Web サイトからダウンロードし、インストールします。

<http://sunsolve.sun.com>

Oracle HTML DB の要件

Oracle HTML DB の要件は次のとおりです。

- [Oracle Database の要件](#)
- [ディスク領域要件](#)
- [Oracle HTTP Server の要件](#)
- [Oracle XML DB の要件](#)
- [Oracle Text の要件](#)
- [ブラウザの要件](#)

Oracle Database の要件

Oracle HTML DB には、Oracle Database リリース 9.2.0.3 以上のインストールが必要です。Oracle HTML DB は、Oracle HTTP Server を含む Oracle ホームにインストールします。この Oracle ホームは、Oracle HTML DB および Oracle HTTP Server のいずれの場合も、Companion CD Oracle ホームと呼ばれます。この Companion CD Oracle ホームは、Oracle HTML DB が Oracle*Net を使用して Oracle Database にアクセスできるかぎり、Oracle Database ホームとは別の物理サーバー上に存在することが可能です。

たとえば、Oracle Database を OraDB10g_Home1 にインストールしたとします。Oracle Universal Installer を実行して Oracle HTML DB をインストールするとき、OraDB10g_Home1 にインストールした Oracle Database を指定できます。ただし、Oracle HTML DB は、Oracle HTTP Server を含む Oracle ホームとは別の Oracle ホーム（たとえば、OraDB10g_Home2）にインストールする必要があります。

インストール時に、次のデータベース情報を指定する必要があります。

- データベース・システムのホスト名
- Oracle Net Listener のポート番号
- データベースのサービス名
- SYS ユーザーのパスワード

インストールを開始する前に、この情報を確認してください。

ディスク領域要件

Oracle ホームがあるファイル・システムに 355 MB 以上の空きディスク領域があることを確認します。

Oracle ホーム・ディレクトリに十分な領域があるかどうかをチェックするには、次のコマンドを入力します。

```
# df -k /httpserver_oracle_home_path
```

Oracle HTTP Server の要件

Oracle HTML DB を実行するには、Oracle HTTP Server および `mod_plsql` にアクセスできる必要があります。次の製品には、この要件を満たすバージョンの HTTP Server と `mod_plsql` が含まれています。

- Oracle9i Database リリース 2 (9.2) 以上
- Oracle9i Application Server リリース 1 (1.0.2.2) 以上

システムがこれらの要件を満たしていない場合は、Oracle Database 10g Companion Products のインストール時に Oracle HTTP Server 10g をインストールする必要があります。

Oracle XML DB の要件

使用するデータベースには Oracle XML DB をインストールする必要があります。インストール時に作成されたか Oracle Database Configuration Assistant により作成された事前構成済データベースを使用する場合、Oracle XML DB のインストールと構成はすでに完了しています。

関連項目： Oracle XML DB を既存のデータベースに手動で追加する方法は、『Oracle XML DB 開発者ガイド』を参照してください。

Oracle Text の要件

Oracle HTML DB で検索可能なオンライン・ヘルプを使用するには、Oracle Text をインストールする必要があります。Oracle Text は、デフォルトで Oracle Database の一部としてインストールされます。

さらに、Oracle Text のデフォルト言語設定がインストールされていることを確認します。Oracle Text のデフォルト言語をインストールするには、適切な `drdeflang.sql` スクリプト（たとえば、アメリカ英語の場合は `drdefus.sql`）を次のディレクトリから実行します。

```
$ORACLE_HOME/ctx/admin/defaults
```

関連項目： Oracle Text の詳細は、『Oracle Text アプリケーション開発者ガイド』を参照してください。

ブラウザの要件

Oracle HTML DB アプリケーションを表示または開発するには、使用する Web ブラウザで JavaScript と HTML 4.0 および CSS 1.0 規格がサポートされている必要があります。この要件を満たしているブラウザは、次のとおりです。

- Netscape Communicator 7.0 以上
- Microsoft Internet Explorer 5.5 以上
- Mozilla 1.2 以上
- Mozilla Firefox 1.0 以上

Oracle Database 10g Products のインストール要件

Oracle Database 10g Products インストール・タイプの要件は次のとおりです。

- [Oracle Database の要件](#)
- [ディスク領域要件](#)
- [Oracle Workflow Server の要件](#)

関連項目： 1-8 ページ「[Oracle Database 10g Companion Products インストール・タイプでインストールされる製品](#)」

Oracle Database の要件

Oracle Database 10g Products インストール・タイプから製品をインストールする前に、システムが Oracle Database 10g リリース 2 (10.2) の Oracle ホームにアクセスできることを確認する必要があります。必要な場合は、最初にこのリリースの Oracle Database をインストールまたはアップグレードします。

関連項目： Oracle Database のインストール方法については、『Oracle Database インストレーション・ガイド』を参照してください。

Oracle Database インストールで使用する Oracle ホーム・ディレクトリを識別するには、次のコマンドを使用して oratab ファイルの内容をチェックします。

```
# more /var/opt/oracle/oratab
```

ディスク領域要件

Oracle ホーム・ディレクトリを含むファイル・システムに 1194 MB 以上の空きディスク領域があることを確認します。

Oracle ホーム・ディレクトリに十分な領域があるかどうかをチェックするには、次のコマンドを入力します。

```
# df -k oracle_home_path
```

Oracle Workflow Server の要件

Oracle Workflow Server の要件は次のとおりです。

- フレーム、JavaScript、Java Development Kit (JDK) バージョン 1.3.1 および AWT をサポートする Web ブラウザ。たとえば、Netscape Communicator バージョン 4.76 以上の 4.7x バージョン、Microsoft Internet Explorer バージョン 5.0x または 5.5x などです。
- wfdoc.zip ファイルから Workflow HTML ヘルプを抽出するための unzip ユーティリティ。
- Oracle Workflow Java Function Activity Agent および Workflow XML Loader を実行するための Java Development Kit (JDK) バージョン 1.4。
- アウトバウンド SMTP メール・サーバーおよびインバウンド IMAP メール・サーバー (Oracle Workflow の通知メーラーを使用して電子メール通知の送受信を行う場合)。

インストール時に、Oracle Database インストールに関する次の情報を指定する必要があります。

- ホスト名
- ポート
- サービス名
- Oracle Workflow Server のユーザー名とパスワード (通常は owf_mgr)

Oracle Database 10g Companion Products のインストール要件

Oracle Database 10g Companion Products インストール・タイプを使用すると、Oracle HTTP Server、Oracle Workflow 中間層コンポーネント、または Oracle HTTP Server と Oracle Workflow 中間層コンポーネントの両方をインストールできます。これらの製品は、Oracle Database とは異なる Oracle ホームにインストールする必要があります。

Oracle Workflow 中間層コンポーネントの要件は次のとおりです。

- [Oracle Workflow Server の要件](#)
- [Oracle HTTP Server の要件](#)
- [ディスク領域要件](#)

Oracle Workflow Server の要件

Oracle Workflow 中間層コンポーネントをインストールする前に、Oracle Workflow Server が Oracle Database 10g の Oracle ホームにインストールされていることを確認する必要があります。Oracle ホームの内容は、Oracle Universal Installer を使用してチェックできます。または、`/etc/oratab` ファイルを開いて、システム上に Oracle Database インストール用に作成された Oracle ホームの詳細を確認できます。

Oracle Workflow Server がインストールされていない場合は、このマニュアルにある Oracle Database 10g Products のインストールに関する指示に従ってください。Oracle Workflow は、インストール後に Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントを使用して構成する必要があります。

関連項目： 3-7 ページ [「Oracle Database 10g Products のインストール」](#)

Oracle HTTP Server の要件

Oracle Workflow 中間層コンポーネントを実行するには、Oracle HTTP Server にアクセスする必要があります。Oracle Workflow 中間層コンポーネントは、Oracle HTTP Server とともに新規の Oracle ホーム・ディレクトリにインストールできます。また、この製品は、`mod_plsql` とともに Oracle HTTP Server を含む既存の Oracle HTTP Server の Oracle ホームにインストールすることもできます。次の製品の Oracle ホーム・ディレクトリは、この要件を満たしています。

- Oracle HTTP Server 10g
- Oracle Identity Management 10g (Oracle Application Server 10g に含まれます)

関連項目： このリリースの Oracle Database Companion CD とともに使用可能な Oracle HTTP Server を使用する場合は、2-16 ページの [「Oracle HTTP Server の要件」](#) を参照してください。

ディスク領域要件

次の表に、Oracle Database 10g Companion Products のディスク領域要件を示します。

インストールする製品	必要なディスク領域 (MB)
Oracle HTTP Server	2100
Oracle HTTP Server および Oracle Workflow	2400

ネットワークの設定

一般的に、Oracle Database をインストールするコンピュータは、ネットワークに接続されており、Oracle Database インストールを格納するローカル記憶域、表示モニター、および CD-ROM か DVD ドライブを備えています。

この項では、一般的な環境とは異なるコンピュータに Oracle Database をインストールする方法について説明します。次の場合について説明します。

- DHCP コンピュータへのインストール
- 複数のホームがあるコンピュータへのインストール
- 複数の別名を持つコンピュータへのインストール

DHCP コンピュータへのインストール

Dynamic Host Configuration Protocol (DHCP) はネットワークに動的な IP アドレスを割り当てます。動的なアドレス割当てにより、コンピュータはネットワークに接続するたびに異なる IP アドレスを使用できます。場合によっては、コンピュータの接続中に IP アドレスを変更することもできます。1 つの DHCP システムに静的および動的な IP アドレス割当てを混在させることも可能です。

ソフトウェアは DHCP 設定内で IP アドレスを追跡するため、ネットワーク管理が簡素化されます。このため、新規のコンピュータをネットワークに追加する際は、そのコンピュータに固有の IP アドレスを手動で割り当てる必要はありません。

複数のホームがあるコンピュータへのインストール

Companion CD 製品は、複数のホームがあるコンピュータにインストールできます。複数のホームがあるコンピュータは、複数の IP アドレスに関連付けられています。このため、通常は、コンピュータに複数のネットワーク・カードがあります。各 IP アドレスは 1 つのホスト名に関連付けられます。さらに、ホスト名の別名も設定できます。Oracle Universal Installer は、デフォルトで ORACLE_HOSTNAME 環境変数の設定を使用してホスト名を検索します。ORACLE_HOSTNAME が設定されておらず、インストール先が複数のネットワーク・カードがあるコンピュータの場合、Oracle Universal Installer は /etc/hosts ファイルの最初のエントリを使用してホスト名を判別します。

クライアントは、このホスト名、またはこのホスト名の別名のいずれかを使用してコンピュータにアクセスする必要があります。これを確認するには、短縮名 (ホスト名のみ) および完全名 (ホスト名とドメイン名) を使用して、クライアント・コンピュータからホスト名を ping します。両方のテストをパスする必要があります。

ORACLE_HOSTNAME 環境変数の設定

次の手順で ORACLE_HOSTNAME 環境変数を設定します。

たとえば、完全修飾ホスト名が somehost.us.acme.com の場合は、次のいずれかのコマンドを入力します。

Bourne、Bash または Korn シェルの場合

```
$ ORACLE_HOSTNAME=somehost.us.acme.com
$ export ORACLE_HOSTNAME
```

C シェルの場合

```
% setenv ORACLE_HOSTNAME somehost.us.acme.com
```

複数の別名を持つコンピュータへのインストール

複数の別名を持つコンピュータは、1 つの IP と複数の別名でネーミング・サービスに登録されます。ネーミング・サービスでは、これらの別名を同じコンピュータに対して解決します。このようなコンピュータに Oracle Database をインストールするには、ORACLE_HOSTNAME 環境変数を、使用するホスト名のコンピュータに設定します。

Oracle Database Companion CD ソフトウェアのインストール

この章では、Oracle Universal Installer を起動して、Oracle Database Companion CD インストール・メディアに含まれている製品をインストールする方法について説明します。この章の内容は、次のとおりです。

- Companion CD 製品をインストールするための全般的な手順
- インストール・ソフトウェアへのアクセス
- ディスクのマウント
- Oracle HTML DB のインストール
- Oracle Database 10g Products のインストール
- Oracle Database 10g Companion Products のインストール

Companion CD 製品をインストールするための全般的な手順

第1章と第2章で説明した作業を完了した後は、次の全般的な手順に従って Companion CD 製品をインストールします。

1. 次の点を考慮してください。
 - **対話型または非対話型モードでのインストール:** この章では、対話型モードでインストールする場合の手順を説明しています。非対話型モードでインストールする場合（たとえば、サイトで複数のインストールが必要な場合）の詳細は、B-2 ページの「[非対話型モードでの Oracle コンポーネントのインストール](#)」を参照してください。
 - **異なる言語でのインストール:** 言語に関する考慮事項については、C-2 ページの「[異なる言語での Oracle コンポーネントのインストールと使用](#)」を参照してください。
2. ソフトウェアをハード・ドライブからインストールする場合、またはリモートでインストールする場合は、3-2 ページの「[インストール・ソフトウェアへのアクセス](#)」を参照してください。インストール・メディアをコピーするか、または直接インストールする場合は、3-3 ページの「[ディスクのマウント](#)」の項で説明する手順を参照してください。
3. インストールする製品に応じて、次の各項で説明する手順に従ってインストールを実行します。

- [Oracle HTML DB のインストール](#)

Oracle HTML DB は、Oracle HTTP Server のホームにインストールします。既存の Oracle HTTP Server インストールがない場合は、Oracle HTTP Server とともに Oracle HTML DB をインストールできます。

- [Oracle Database 10g Products のインストール](#)

Oracle Database 10g Products に含まれる Oracle Workflow Server を使用する場合は、Oracle Workflow 中間層コンポーネントをインストールする前に、3-8 ページの「[Oracle Workflow 中間層コンポーネントをインストールするための Oracle Workflow Server の準備](#)」で説明する手順を実行する必要があります。Oracle Workflow 中間層コンポーネントは Oracle Database 10g Companion Products とともに使用できます。

- [Oracle Database 10g Companion Products のインストール](#)

この項では、Oracle Workflow 中間層コンポーネントをインストールする方法について説明します。

インストール・ソフトウェアへのアクセス

Oracle Database Companion CD ソフトウェアはインストール・メディアで使用可能です。または、Oracle Technology Network の Web サイトからダウンロードすることもできます。

ソフトウェアをインストールする準備をしてから、次のいずれかの方法でソフトウェアにアクセスします。

- ハード・ディスクへのソフトウェアのダウンロード
- ソフトウェアのインストール・メディアからハード・ディスクへのコピー
- リモート・ドライブを使用したソフトウェアへのアクセス
- リモート・アクセス・ソフトウェアを使用したリモート・コンピュータへのインストール

ディスクのマウント

ほとんどの UNIX ベースのシステムでは、ディスクをディスク・ドライブに挿入すると自動的にマウントされます。ディスクが自動的にマウントされない場合は、この項で説明する手順を実行します。

ディスクをマウントする手順は、次のとおりです。

1. ユーザーを root に切り替えます。

```
$ su - root
```

2. 必要な場合は、次のようなコマンドを入力し、現在マウントされているディスクをアンマウントしてドライブから取り出します。

```
# eject
```

3. ディスクをディスク・ドライブに挿入します。

4. Oracle Universal Installer で「ディスクの場所」画面が表示された場合は、ディスクのマウント・ポイント・ディレクトリ・パスを入力します。

5. ディスクが自動的にマウントされたかどうかを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
# ls /media/dvd
```

6. この手順でディスクの内容が表示されない場合は、次のようなコマンドを入力してディスクをマウントします。

```
# /usr/sbin/mount -r -F hsfs /dev/dsk/cxyt2d0s2 /dvd
```

この例では、/dvd はディスクのマウント・ポイント・ディレクトリ、
/dev/dsk/cxyt2d0s2 はディスク・デバイス名 (/dev/dsk/c0t2d0s2 など) です。

7. Oracle Universal Installer で「ディスクの場所」画面が表示された場合は、ディスクのマウント・ポイント・ディレクトリ・パスを入力します。次に例を示します。

- ディスクが自動的にマウントされた場合

```
/dvd/dvd0
```

- ディスクを手動でマウントした場合

```
/dvd
```

操作を続けるには、次の該当する項を参照してください。

- [Oracle HTML DB のインストール](#)
- [Oracle Database 10g Products のインストール](#)
- [Oracle Database 10g Companion Products のインストール](#)

Oracle HTML DB のインストール

この項では、次のいずれかのオプションを使用した Oracle HTML DB のインストール方法を説明します。

- **Oracle HTML DB を Oracle HTTP Server とともにインストール:** このオプションを選択した場合、Oracle HTML DB は Oracle HTTP Server とともに新規の Oracle ホームにインストールされます。
- **既存の Oracle HTTP Server ホームで Oracle HTML DB をインストールまたはアップグレード:** このオプションを選択した場合、インストール前の条件に応じて、Oracle HTML DB がインストールされるか、または既存の Oracle HTML DB インストールがアップグレードされます。

Oracle HTML DB をインストールする手順は、次のとおりです。

1. インストール・メディアからインストールするとき、ディスクをマウントしていない場合はマウントします。
2. 必要な場合は、Oracle ソフトウェア所有者ユーザー (oracle) としてログインし、DISPLAY 環境変数を設定します。
3. Oracle HTML DB に使用する Oracle Database がアクセス可能で実行中であることを確認します。
4. Oracle Universal Installer を起動するには、次のコマンドを入力します。

```
$ cd /tmp  
$ /directory_path/runInstaller
```

このコマンドの *directory_path* は、インストール・メディアまたはハード・ディスク上の companion ディレクトリのパスです。

5. 「ようこそ」画面で「次へ」をクリックします。
6. このシステムへの Oracle 製品の初回インストールの場合は、「インベントリ・ディレクトリと資格証明の指定」画面が表示されます。次の情報を指定して「次へ」をクリックします。
 - **インベントリおよびディレクトリのフルパスの入力**
次のようなパスを入力したことを確認します。 *oracle_base* は、ORACLE_BASE 環境変数に指定した値です。

```
oracle_base/oraInventory
```
 - **オペレーティング・システム・グループ名の指定**
Oracle インベントリ・グループ *oinstall* を指定したことを確認します。
7. 「インストールする製品の選択」画面で、**Oracle HTML DB** を選択して「次へ」をクリックします。
8. 「インストール・タイプの選択」画面で、次のいずれかを選択して「次へ」をクリックします。
 - **Oracle HTML DB と Oracle HTTP Server:** Oracle HTTP Server とともに Oracle HTML DB を新規の Oracle ホームにインストールする場合は、このオプションを選択します。
 - **Oracle HTML DB のみ:** 新規の Oracle HTML DB を既存の Oracle HTTP Server ホームにインストールする場合は、または既存の Oracle HTML DB インストールをアップグレードする場合は、このオプションを選択します。

9. 「ホームの詳細の指定」画面で、次の項目を入力します。
 - **名前:** 前の手順で「Oracle HTML DB と Oracle HTTP Server」を選択した場合は、新規の Oracle ホームの名前を指定します。「Oracle HTML DB のみ」を選択した場合は、既存の Oracle HTTP Server ホームの名前を選択します。「Oracle HTML DB のみ」を選択し、既存の Oracle HTML DB インストールがある場合は、既存のインストールの Oracle ホームの名前を指定します。
 - **パス:** 「名前」で指定した Oracle ホームのディレクトリの位置を入力します。ディレクトリが存在しない場合は、Oracle Universal Installer によりそのディレクトリが作成されます。

関連項目: Oracle ホームの検索方法については、2-17 ページの「[Oracle Database の要件](#)」を参照してください。各ホームを選択して Apache Standalone を検索します。Oracle HTTP Server は、「ホームの詳細の指定」画面に Apache Standalone として表示されます。

10. 「次へ」をクリックします。

11. 「製品固有の前提条件のチェック」画面で、Oracle Universal Installer によるシステムのチェック中に発生したエラーをチェックして修正します。次に、「次へ」をクリックします。

「次へ」をクリックしたとき、警告メッセージが表示されることがあります。既存の Oracle HTML DB インストールがある場合、このメッセージは、このインストールに関連付けられたデータベース・アクセス記述子 (DAD) の値が、必要なディレクトティブの一部に対して不十分か誤っていることを通知します。このため、これらの値はアップグレードに不適切となります。この条件で Oracle HTML DB をアップグレードする場合、まず問題を修正する必要があります。Oracle HTML DB をインストールする場合は、このインストール・セッションを続行します。

次へ進むには「OK」をクリックします。

12. このインストール手順で表示される画面は、Oracle HTML DB をインストールするか、または既存の Oracle HTML DB インストールをアップグレードするかに応じて異なります。
 - **Oracle HTML DB のインストール**

「HTML DB データベースの詳細の指定」画面で、Oracle HTML DB の構成に必要な情報を入力します。

ホスト名

データベースがインストールされているシステムのホスト名を指定します。ホスト名がローカル・ホストの場合は、localhost ではなく、コンピュータの名前を入力します。

ポート

データベース・システム上の Oracle Net Listener の TCP/IP ポート番号を指定します。デフォルトのポート番号は 1521 です。Oracle Database インストールのデフォルトのポート番号を調べるには、tnsnames.ora ファイルをチェックします。このファイルは、デフォルトで \$ORACLE_HOME/network/admin ディレクトリにあります。

データベース・サービス名

Oracle HTML DB データベース・オブジェクトをインストールするデータベースのデータベース・サービス名 (sales など) を指定します。または、ドメイン名を入力できます。通常、このドメイン名はグローバル・データベース名 (sales.us.mycompany.com など) と同じです。

Oracle HTML DB を構成するには、Oracle HTML DB データベース・オブジェクトをリリース 9.2.0.3 以上の Oracle Database にインストールする必要があります。10g リリースの Oracle HTTP Server を使用する場合は、インストール時に指定した情報に基づいて、mod_plsql 構成ファイルにデータベース・アクセス記述子 (DAD) が、Oracle HTTP Server 構成ファイル httpd.conf にディレクトリ別名が自動的に作成さ

れます。ただし、Oracle9i HTTP Server リリース 2 インストールを使用する場合は、[第 4 章](#)で説明するインストール後の手順を実行して、これらの設定値を手動で作成する必要があります。

表領域名

Oracle HTML DB データベース・オブジェクトをロードする表領域の名前を入力するか、デフォルト (SYS_AUX) を受け入れます。

SYS パスワード

データベースの SYS ユーザーのパスワードを指定します。

HTML DB パスワード

Oracle HTML DB スキーマ (users) に使用するパスワードを指定します。このスキーマは、インストール時にデータベース内に作成されます。

インストールが完了すると、このパスワードを使用して、Oracle HTML DB に管理ユーザーとして接続できます。指定したパスワードは、HTMLDB_PUBLIC_USER スキーマ (mod_plsql でデータベースに接続するために使用)、FLOWS_010600 スキーマおよび FLOWS_FILES スキーマでも使用されます。

HTML DB パスワードの確認

正しいパスワードを指定したかどうかを確認するために、パスワードを再入力します。

■ 既存の Oracle HTML DB インストールのアップグレード

「HTML DB アップグレード情報の指定」画面で、使用可能な DAD のリストから、アップグレードする Oracle HTML DB インストールを選択します。

アップグレードする Oracle HTML DB インストールを指定すると、ホスト名、ポートおよびデータベース・サービス名の値が各フィールドに自動的に表示されます。これらの値は変更できません。これ以外のフィールドは、「HTML DB データベースの詳細の指定」画面に表示される内容と同じです。

13. 「次へ」をクリックします。
14. 「サマリー」画面で、インストールされる製品のリストをチェックし、「インストール」をクリックします。
15. プロンプトが表示されたら、root ユーザーとして別の端末ウィンドウで次のスクリプトを実行します。

```
oracle_base/oraInventory/orainstRoot.sh
oracle_home/root.sh
```

次に、「OK」をクリックします。

16. インストールの完了後に、「終了」→「はい」をクリックして Oracle Universal Installer を終了します。

関連項目：

- ソフトウェアのインストール後に完了する必要がある作業については、[第 4 章](#)を参照してください。
- 追加の Oracle HTML DB インスタンスをリモートの Oracle Database にインストールする場合は、4-16 ページの「[リモートの Oracle Database に対する Oracle HTML DB のインストールおよび構成](#)」を参照してください。

17. Oracle HTTP Server を起動するには、5-2 ページの「[Oracle HTTP Server の起動、停止および再起動](#)」の指示に従ってください。

関連項目： [第 4 章「Oracle Database Companion CD のインストール後の作業」](#)

Oracle Database 10g Products のインストール

Oracle Database 10g Products は、既存の Oracle Database 10g リリース 2 (10.2) の Oracle ホームにインストールする必要があります。

関連項目： このインストール・タイプでインストールできる製品については、1-5 ページの「[Oracle Database 10g Products インストール・タイプでインストールされる製品](#)」を参照してください。

Oracle Database 10g Products をインストールするには、最初に Oracle Universal Installer を実行します。次に、Oracle Workflow Server を構成してから Oracle Workflow 中間層コンポーネントをインストールします。

Oracle Database 10g Products をインストールする手順は、次のとおりです。

1. インストール・メディアからインストールするとき、ディスクをマウントしていない場合はマウントします。
2. 必要な場合は、Oracle ソフトウェア所有者ユーザー (oracle) としてログインし、DISPLAY 環境変数を設定します。
3. Oracle HTML DB に使用する Oracle Database がアクセス可能で実行中であることを確認します。
4. Oracle Universal Installer を起動するには、次のコマンドを入力します。

```
$ cd /tmp
$ /directory_path/runInstaller
```

このコマンドの `directory_path` は、インストール・メディアまたはハード・ディスク上の companion ディレクトリのパスです。

5. 「ようこそ」画面で「次へ」をクリックします。
6. このシステムへの Oracle 製品の初回インストールの場合は、「インベントリ・ディレクトリと資格証明の指定」画面が表示されます。次の情報を指定して「次へ」をクリックします。
 - **インベントリおよびディレクトリのフルパスの入力**
 次のようなパスを入力したことを確認します。 `oracle_base` は、ORACLE_BASE 環境変数に指定した値です。

```
oracle_base/oraInventory
```
 - **オペレーティング・システム・グループ名の指定**
 Oracle インベントリ・グループ `oinstall` を指定したことを確認します。
7. 「インストールする製品の選択」画面で、「Oracle Database 10g Products」を選択して「次へ」をクリックします。

8. 「ホームの詳細の指定」画面で、次の項目を入力します。

- **名前：**このフィールドには、デフォルトの Oracle ホームが表示されます。指定した Oracle ホームが Oracle Database の Oracle ホームであることを確認します。
- **パス：**このフィールドには、デフォルトの Oracle ホームのディレクトリが表示されません。Oracle Database の Oracle ホームのディレクトリの位置を入力します。このディレクトリには、Oracle ホームのファイルをインストールします。

関連項目： Oracle ホームの検索方法については、2-17 ページの「[Oracle Database の要件](#)」を参照してください。

選択した Oracle ホームに Oracle Real Application Clusters (RAC) がインストールされている場合は、Oracle Universal Installer により「選択されたノード」画面が表示されます。次へ進むには「次へ」をクリックします。

注意： RAC インストールでは、ソフトウェアは、すべてのクラスタ・ノードにインストールされます。

9. 「製品固有の前提条件のチェック」画面で、Oracle Universal Installer によるシステムのチェック中に発生したエラーをチェックして修正します。
10. インストールの完了後に、「終了」→「はい」をクリックして Oracle Universal Installer を終了します。
11. Oracle HTTP Server を起動するには、5-2 ページの「Oracle HTTP Server の起動、停止および再起動」の指示に従ってください。

関連項目： 第 4 章「Oracle Database Companion CD のインストール後の作業」

Oracle Workflow 中間層コンポーネントをインストールするための Oracle Workflow Server の準備

Oracle Workflow Server は、インストールした後、Oracle Workflow 中間層コンポーネントをインストールする前に構成する必要があります。Oracle Workflow を構成するには、Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントを使用できます。グラフィカル・ユーザー・インタフェース (GUI) を使用して Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントを実行する手順は、次のとおりです。

関連項目： 非対話型モードで Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントを実行する方法については、B-6 ページの「非対話型モードでの Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントの実行」の項を参照してください。

1. Oracle Workflow に使用する Oracle Database がアクセス可能で実行中であることを確認します。
2. Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントを起動するには、次のコマンドを入力します。

```
$ORACLE_HOME/wf/install/wfinstall.csh
```
3. 「Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントへようこそ」画面で、次の項目を指定します。
 - **インストール・オプション：**「サーバーのみ」または「言語の追加」インストール・オプションを選択します。

「サーバーのみ」オプションを選択した場合、Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントは、Oracle Workflow を Oracle Database にインストールします。

注意： Oracle Workflow リリース 2.6.4 にアップグレードする場合は、既存の Oracle Workflow Server がリリース 2.6.2 以上であることを確認してください。

「言語の追加」インストール・オプションを選択した場合は、追加する言語の略語を選択します。Oracle Workflow は、言語を追加する前にインストールする必要があります。

関連項目： Oracle Database で使用する言語の略語のリストは、『Oracle Database グローバリゼーション・サポート・ガイド』を参照してください。

- **ワークフロー・アカウント**: Oracle Workflow データベース・アカウントで使用する名前を入力するか、デフォルト名（通常は `owf_mgr`）を受け入れます。

このアカウントのデフォルトの表領域は `USERS` で、一時表領域は `TEMP` です。必要な場合は、この表領域を変更できます。

注意: Oracle Workflow の既存のインストールをアップグレードする場合は、既存の Oracle Workflow データベース・アカウントの名前とパスワードを入力します。

- **ワークフロー・パスワード**: Oracle Workflow アカウントのパスワードを入力します。
- **SYS パスワード**: システム上にある Oracle Database の `SYS` アカウントのパスワードを入力します。
- **TNS 接続ディスクリプタ**: データベース接続文字列を TNS 形式で指定します。

```
(DESCRIPTION = (ADDRESS_LIST = (ADDRESS = (PROTOCOL = TCP) (HOST =
host_name) (PORT = port_number))) (CONNECT_DATA = (SERVICE_NAME =
database_service_name)))
```

接続文字列は `tnsnames.ora` ファイルに格納されます。このファイルは、デフォルトで `$ORACLE_HOME/network/admin` ディレクトリにあります。

4. Oracle Internet Directory を Oracle Workflow のディレクトリ・リポジトリとして統合する場合は、「LDAP パラメータを入力します」 → 「LDAP の値の取得」を選択します。

注意: 既存の Oracle Workflow インストールをアップグレードするときに、すでに Oracle Internet Directory との統合を実装している場合は、アップグレード時に Oracle Internet Directory との統合を保持するために、ここで Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) の値を再入力する必要があります。

接続する LDAP ディレクトリに関する次の LDAP サーバー情報を入力し、「OK」をクリックします。これらの値は、インストール後、必要な場合は、「グローバル・ワークフロー・プリファレンス」 Web ページで更新できます。

関連項目: 詳細は、『Oracle Workflow 管理者ガイド』の Oracle Workflow の設定に関する項を参照してください。

- **LDAP ホスト名**: LDAP ディレクトリがインストールされるホスト名を入力します。
- **LDAP 非 SSL ポート**: ホストで使用するポート番号を入力します。これは、Secure Sockets Layer (SSL) ポート以外のポートであることが必要です。
- **LDAP 管理ユーザー名**: LDAP サーバーに接続する際に使用するユーザー名を入力します。このユーザー名は書込み権限があり、LDAP ディレクトリにバインドされている必要があります。次に例を示します。

```
cn=orcladmin
```

- **LDAP 管理パスワード**: LDAP ユーザー・アカウントの Oracle Internet Directory パスワードを入力します。LDAP パスワード値はアスタリスク (*) で表示され、暗号化形式で格納されます。
- **変更ログ DN**: 変更ログ・ファイルがある LDAP ノードを入力します。次に例を示します。

```
cn=changelog
```

- **ユーザー・ベース:** ユーザー・レコードを検索できる LDAP ノードを入力します。次に例を示します。

```
cn=Base, cn=OracleSchemaVersion
```

注意: インストール時に Oracle Internet Directory との統合を設定した後は、WF_LDAP API を使用して、Oracle Workflow ディレクトリ・サービスを Oracle Internet Directory と同期化する必要があります。手順については、『Oracle Workflow 管理者ガイド』を参照してください。

5. シードされた Java ベース通知メーラー・サービス・コンポーネントである Workflow Notification Mailer の構成パラメータを入力するには、「メーラー・パラメータを入力します」→「メーラーの値の取得」を選択します。

次のパラメータの値を入力して、「OK」をクリックします。

- **電子メール・アカウントのインバウンド: サーバー名:** インバウンド IMAP メール・サーバーの名前を入力します。
- **電子メール・アカウントのインバウンド: ユーザー名:** 通知メーラーが電子メール・メッセージを受信するメール・アカウントのユーザー名を入力します。
- **電子メール・アカウントのインバウンド: パスワード:** 「ユーザー名」フィールドで指定したメール・アカウントのパスワードを入力します。
- **電子メール・アカウントのアウトバウンド: サーバー名:** アウトバウンド SMTP メール・サーバーの名前を入力します。
- **電子メール処理: 処理済フォルダ:** 通知メーラーが正常に処理した通知メッセージを格納する、インバウンド電子メール・アカウントのメール・フォルダの名前を入力します。
- **電子メール処理: 削除フォルダ:** 通知メーラーが通知メッセージと認識しない受信メッセージを格納する、インバウンド電子メール・アカウントのメール・フォルダの名前を入力します。
- **メッセージ生成: HTML エージェント:** Oracle HTTP Server で Oracle Workflow に対して定義された Web エージェントを識別するベース URL を入力します。通知メーラーは、この URL を使用して HTML 添付ファイル付きの電子メール通知をサポートします。このパラメータは、デフォルトで次のプレースホルダ値に設定されます。

```
http://localhost.com/pls/wf
```

Oracle HTTP Server をすでにインストールしている場合は、localhost.com を、Web リスナーがリクエストを受け入れるサーバーと TCP/IP ポート番号に置き換えます。それ以外の場合、このパラメータはプレースホルダ値に設定したままにします。この場合は、Oracle HTTP Server と Oracle Workflow をインストールした後に、Oracle Workflow Manager の通知メーラー構成ウィザードでこのパラメータを設定する必要があります。

関連項目: 『Oracle Workflow 管理者ガイド』の第 2 章「Oracle Workflow の設定」を参照してください。

- **メッセージ生成: 返信先アドレス:** 受信メッセージを受信する電子メール・アカウントのアドレスを入力します。このアドレスは通知応答の送信先になります。

通知メーラー構成値は、必要な場合は初回インストール後に Oracle Workflow Manager で更新できます。また、「グローバル・ワークフロー・プリファレンス」Web ページで Oracle Workflow の HTML エージェント値を更新することもできます。

関連項目: 詳細は、『Oracle Workflow 管理者ガイド』の Oracle Workflow の設定に関する項、および Oracle Workflow Manager のオンライン・ヘルプを参照してください。

6. Oracle Workflow データベース・アカウントに割り当てられた表領域を変更するには、最初に「**表領域の変更**」を選択し、値リストから既存の表領域を選択します。
7. 「**送信**」を選択して構成を開始します。
8. 構成が完了すると、確認画面が表示されます。「**OK**」をクリックします。

構成のステータスをチェックするには、`$ORACLE_HOME/wf/install/workflow.log` ファイルを確認します。

注意：「サーバーのみ」インストール・オプションを選択して実行した Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントは、「言語の追加」インストール・オプションを選択した場合にのみ再実行できます。「サーバーのみ」インストール・オプションを選択してコンフィギュレーション・アシスタントを再実行しないでください。これは、指定した Oracle ホームにインストールできるのは1つの Oracle Workflow スキーマのみであるためです。この指示に従わないと、Oracle Workflow 中間層サービスでエラーが発生する場合があります。

Oracle Workflow スキーマの再作成が必要な場合は、最初に既存のスキーマを削除してから Oracle Workflow を削除する必要があります。次に、この章で説明する手順に従って、Oracle Workflow を再インストールし、Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントを使用して新規の Oracle Workflow スキーマを作成します。

Oracle Database 10g Companion Products のインストール

Oracle Database 10g Companion Products には、次の製品が含まれています。

- Oracle HTTP Server
- Oracle Workflow 中間層コンポーネント

注意： Oracle Workflow 中間層コンポーネントは、新規の Oracle ホームまたは既存の Oracle HTTP Server ホームのいずれかにインストールできます。Oracle Workflow は、最初に Oracle Database 10g Products インストール・タイプから Oracle Workflow Server をインストールし、Workflow コンフィギュレーション・アシスタントを実行して構成したことを確認してください。

Oracle Database 10g Companion Products を新規の Oracle ホームにインストールする手順は、次のとおりです。

1. インストール・メディアからインストールするとき、ディスクをマウントしていない場合はマウントします。
2. 必要な場合は、Oracle ソフトウェア所有者ユーザー (oracle) としてログインし、DISPLAY 環境変数を設定します。
3. Oracle Universal Installer を起動するには、次のコマンドを入力します。

```
$ cd /tmp
$ /directory_path/runInstaller
```

このコマンドの `directory_path` は、インストール・メディアまたはハード・ディスク上の companion ディレクトリのパスです。

4. 「ようこそ」画面で「**次へ**」をクリックします。

5. このシステムへの Oracle 製品の初回インストールの場合は、「インベントリ・ディレクトリと資格証明の指定」画面が表示されます。次の情報を指定して「次へ」をクリックします。
 - **インベントリおよびディレクトリのフルパスの入力**

次のようなパスを入力したことを確認します。oracle_base は、ORACLE_BASE 環境変数に指定した値です。

```
oracle_base/oraInventory
```
 - **オペレーティング・システム・グループ名の指定**

Oracle インベントリ・グループ oinstall を指定したことを確認します。
6. 「インストールする製品の選択」画面で、「Oracle Database 10g Companion Products」を選択して「次へ」をクリックします。
7. 「ホームの詳細の指定」画面で、次の項目を入力します。
 - **名前**: Oracle ホームの名前を入力します。Oracle Database 10g Companion Products は、新規 Oracle ホームにインストールできます。あるいは、Oracle Workflow 中間層を、既存の Oracle HTTP Server Oracle ホームにのみインストールできます。Oracle Database 10g Companion Products を既存の Oracle Database ホームにインストールすることはできません。
 - **パス**: Oracle ホームのディレクトリの位置を入力します。ディレクトリが存在しない場合は、Oracle Universal Installer によりそのディレクトリが作成されます。
8. 「使用可能な製品コンポーネント」画面で、次のいずれかの製品を選択します。
 - **Apache Standalone**
 - **Oracle Workflow Middle Tier**

注意: Apache Standalone オプションは、Oracle HTTP Server をインストールする場合に選択します。Oracle Workflow 中間層を新しい Oracle ホームにインストールする場合は、Apache Standalone オプションを選択する必要があります。

9. 「製品固有の前提条件のチェック」画面で、Oracle Universal Installer によるシステムのチェック中に発生したエラーをチェックして修正します。

Oracle Workflow 中間層を既存の Oracle HTTP Server の Oracle ホームのみにインストールする場合は、選択した Oracle ホームが存在することを手動で確認する必要があります場合があります。次に、「次へ」をクリックします。
10. 「Oracle Workflow 中間層の構成」画面で、Oracle Workflow 中間層に必要な構成設定を指定します。

Oracle Workflow 中間層を構成するには、mod_plsql 構成ファイルにデータベース・アクセス記述子 (DAD) を作成し、Oracle HTTP Server 構成ファイルにディレクトリ別名を作成する必要があります。これらの作業は、指定した情報を使用して Oracle Universal Installer が完了します。

次の情報を入力します。

 - **ワークフロー・スキーマ**

Oracle Workflow Server データベース・オブジェクトをデータベースにインストールする際に使用したユーザー (スキーマ名) を指定します。デフォルトのユーザー名は owf_mgr です。
 - **DB ホスト名**

データベースがインストールされているシステムのホスト名を指定します。ホスト名がローカル・ホストの場合は、localhost ではなく、コンピュータの名前を入力します。

- **ポート番号**
データベース・システム上の Oracle Net Listener の TCP/IP ポート番号を指定します。デフォルトのポート番号は 1521 です。
 - **Oracle SID**
Oracle Workflow Server データベース・オブジェクトをインストールしたデータベースのデータベース・インスタンス識別子 (SID) を指定します。
11. 「Oracle Workflow 中間層の構成」画面で、前の手順で作成した Oracle Workflow スキーマのパスワードを入力します。次に、「次へ」をクリックします。
 12. Oracle Apache のインストール画面で、次の情報を入力して「次へ」をクリックします。
 - **パスワードを入力**
前の画面で指定した Workflow ユーザー（通常は owf_mgr）のパスワードを指定します。このパスワードは、mod_plsql の DAD で使用されます。
 - **パスワードの確認**
正しいパスワードを指定したかどうかを確認するために、パスワードを再入力します。
 13. 「サマリー」画面で、インストールされる製品のリストをチェックし、「インストール」をクリックします。
 14. プロンプトが表示されたら、root ユーザーとして新規端末ウィンドウで次のスクリプトを実行します。

```
oracle_base/oraInventory/orainstRoot.sh
oracle_home/root.sh
```

次に、「OK」をクリックします。
 15. インストールの終了画面で、Oracle HTTP Server で使用される URL をメモします。

注意： これらの URL は、次のファイルにも示されます。

```
$ORACLE_HOME/Apache/Apache/setupinfo.txt
```

16. 「終了」 → 「はい」 をクリックして Oracle Universal Installer を終了します。
17. Oracle HTTP Server を起動するには、5-2 ページの「Oracle HTTP Server の起動、停止および再起動」の指示に従ってください。

関連項目： [第 4 章「Oracle Database Companion CD のインストール後の作業」](#)

Oracle Database Companion CD の インストール後の作業

この章では、ソフトウェアのインストール後に実行する必要がある作業について説明します。
この章の内容は、次のとおりです。

- [パッチ・セット情報](#)
- [Oracle HTTP Server のインストール後の作業](#)
- [Oracle HTML DB のインストール後の作業](#)
- [Oracle Workflow Server のインストール後の作業](#)

パッチ・セット情報

Oracle Companion CD コンポーネントを正しくインストールした後、最新のパッチ・セットをインストールすることをお勧めします。パッチ・セットをインストールすることで、最新の Oracle Database Companion CD に更新されます。

OracleMetaLink を使用するには、オンライン登録が必要です。OracleMetaLink にログインした後、左側の列からパッチを選択します。

パッチを検索してダウンロードする手順は、次のとおりです。

1. 次の Web サイトで OracleMetaLink にログインします。

<http://metalink.oracle.com>

注意： OracleMetaLink にユーザー登録していない場合は、「**Register for MetaLink!**」をクリックし、表示される指示に従って登録してください。

2. OracleMetaLink のメイン・ページで「**パッチ**」をクリックします。
3. 「**簡易検索**」を選択します。
4. 次の情報を指定して「**実行**」をクリックします。
 - 「**検索条件**」フィールドで、「**製品**」または「**ファミリー**」を選択し、次に HTML DB、Oracle HTTP Server (Oracle HTTP Server (OHS) および mods を入力)、Oracle Workflow など、Companion CD 製品を指定します。
 - 「**リリース**」フィールドで、現行のリリース番号を指定します。
 - 「**パッチ・タイプ**」フィールドで、Patchset/Minipack を指定します。
 - 「**Platform or Language**」フィールドで、使用しているプラットフォームを選択します。
5. **Results for Platform** の下で、OracleMetaLink を使用して Oracle Database の最新のパッチ・セットを検索します。
6. 使用可能なパッチのリストから、ダウンロードするパッチ番号をクリックします。
7. 「**README の表示**」をクリックし、README を確認してからダウンロードを実行します。

注意： 各パッチには、インストール要件および指示が記載された README ファイルがあります。一部のパッチは Oracle Universal Installer でインストールします。その他のパッチには特別な手順が必要です。先に進む前に必ず README ファイルを確認することをお勧めします。

8. 「**パッチ・セット**」ページに戻って「**ダウンロード**」をクリックし、ファイルをシステムにダウンロードし、保存します。
9. unzip ユーティリティを使用して、パッチ ZIP ファイルを解凍します。

Oracle HTTP Server のインストール後の作業

Oracle HTTP Server をインストールした場合は、次の各項で説明する作業を完了してください。

- ファイルのバックアップ
- 以前のリリースの Oracle HTTP Server からの移行
- Oracle HTTP Server の高可用性機能の有効化

ファイルのバックアップ

インストールの完了後に、`root.sh` スクリプトのバックアップを作成することをお勧めします。他の製品を同じ Oracle ホームにインストールすると、Oracle Universal Installer によりインストール中に既存の `root.sh` スクリプトの内容が更新されます。オリジナルの `root.sh` スクリプトに含まれていた情報が必要になった場合は、バックアップの `root.sh` ファイルからリカバリできます。

また、パッチを適用する前に、Oracle ホーム全体のバックアップを作成することもお勧めします。

以前のリリースの Oracle HTTP Server からの移行

このシステム上で、以前のリリースの Oracle Database とともにインストールされた Oracle HTTP Server を使用している場合は、その HTTP Server の構成を現行のリリースに移行できます。

注意： この項では、Oracle Application Server の一部としてインストールされたリリースの Oracle HTTP Server から移行する方法については説明しません。この種の移行はサポートされません。

移行作業は、次の項で説明するように 2 つの部分にわかれています。

- `httpd.conf` ファイルの移行
- `mod_plsql` で使用される DAD の移行

`httpd.conf` ファイルの移行

以前のリリースの Oracle HTTP Server の構成を現行リリースに移行するには、そのリリースで使用されている `httpd.conf` ファイルをコピーして変更する必要があります。

次の各項では、この作業の実行方法について説明します。

- 手順 1: `httpd.conf` ファイルをコピーして開く
- 手順 2: 一括変更を実行する
- 手順 3: `LoadModule` のディレクティブ・リストを変更する
- 手順 4: サポートされない機能のディレクティブとセクションを削除する
- 手順 5: ポート番号を変更する
- 手順 6: `User` ディレクティブと `Group` ディレクティブの値を確認する
- 手順 7: 既存のセクションとディレクティブを変更する
- 手順 8: 新規のセクションとディレクティブを追加する
- 手順 9: サーバー証明書と秘密鍵を移行する
- 手順 10: SSL のセクションとディレクティブを変更する
- 手順 11: 必須ファイルを新規ディレクトリにコピーまたは移動する

手順 1: httpd.conf ファイルをコピーして開く

次の手順に従って、以前のリリースで使用されている httpd.conf ファイルを現行リリースの構成ファイル・ディレクトリにコピーします。

1. ユーザーを Oracle ソフトウェア所有者ユーザー（通常は oracle）に切り替えます。

```
$ su - oracle
```
2. ORACLE_HOME 環境変数を設定して、現行リリースの Oracle ホームのパスを指定します。
 - Bourne、Bash または Korn シェルの場合

```
$ ORACLE_HOME=new_oracle_home_path
$ export ORACLE_HOME
```
 - C シェルの場合

```
% setenv ORACLE_HOME new_oracle_home_path
```
3. 現行リリースの Oracle HTTP Server に使用する構成ファイル・ディレクトリのバックアップを作成します。

```
$ cp $ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf $ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf.orig
```
4. 構成ファイル・ディレクトリに移動します。

```
$ cd $ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf
```
5. 以前のリリースで使用されている httpd.conf ファイルを、現行のディレクトリにコピーします。次に例を示します。

```
$ cp /old_oracle_home/Apache/Apache/conf/httpd.conf .
```
6. テキスト・エディタで httpd.conf ファイルを開きます。

手順 2: 一括変更を実行する

次の手順に従って、httpd.conf ファイルに対して一括変更を実行します。

1. 以前のリリースの Oracle ホーム・ディレクトリ・パスの出現箇所をすべて検索し、現行の Oracle ホーム・ディレクトリ・パスに置き換えます。
2. mod_ssl.c の出現箇所をすべて mod_oss1.c に変更します。

注意： 現在 SSL を使用していない場合にも、httpd.conf ファイル内の SSL 関連ディレクティブを変更することをお勧めします。

手順 3: LoadModule のディレクティブ・リストを変更する

次の手順に従って、LoadModule のディレクティブ・リストを変更します。

1. 次のディレクティブを削除します。

```
LoadModule oprocmgr_module    libexec/liboprocgr.so
LoadModule rewrite_module     libexec/mod_rewrite.so
```

注意： このファイルには、後で mod_rewrite モジュール用の LoadModule ディレクティブを追加する必要があります。

2. onsint モジュールをロードする次のディレクティブを、<IfDefine SSL> セクションの直前に追加します。

```
LoadModule onsint_module      libexec/mod_onsint.so
```

3. <IfDefine SSL> セクションの LoadModule ディレクティブ内で、次のように `ssl_module` を `ossl_module` に変更し、`mod_ssl.so` を `mod_ossl.so` に変更します。

```
LoadModule ossl_module      libexec/mod_ossl.so
```

手順 4: サポートされない機能のディレクティブとセクションを削除する

次の手順に従って、サポートされない機能に関するディレクティブとセクションをすべて削除する必要があります。

1. <IfModule mod_alias.c> セクションから次のディレクティブを削除します。

```
Alias /jservdocs/ "oracle_home/Apache/Jserv/docs/"
Alias /soapdocs/ "/oracle_home/soap/"
```

2. 次の include ディレクティブを削除します。

```
include "/oracle_home/Apache/Jserv/etc/jserv.conf"
```

3. <IfModule mod_oprocmgr.c> セクションを削除します。

手順 5: ポート番号を変更する

`httpd.conf` ファイルは、Oracle HTTP Server または Oracle Database とともにインストールされた以前のリリースの Oracle HTTP Server によって使用されます。このファイルには、SSL 対応サーバーを起動したかどうかに基づいて非 SSL (HTTP) リクエスト用に異なるポートが指定されています。次の例では、これらのポートが `port1` および `port2` として示されています。

```
Port port1
Listen port1

<IfModule mod_ossl.c>
  Port port2
  Listen port2
  Listen SSL_port
</IfModule>
```

これらのディレクティブを次のように変更することをお勧めします。

1. SSL を使用していなかった場合は、次のディレクティブを削除します。

```
Port port2
Listen port2
```

Oracle HTTP Server は HTTP リクエストをポート `port1` でリスニングするようになります。

2. SSL 用に定義されたポートのみを使用していた場合は、各ディレクティブを次の例のように変更します。

```
Port port2
Listen port2

<IfModule mod_ossl.c>
  Listen SSL_port
</IfModule>
```

Oracle HTTP Server は HTTP リクエストをポート `port2`、HTTPS リクエストをポート `SSL_port` でリスニングするようになります。

3. 以前のリリースの Oracle HTTP Server をこのリリースと同時に使用し続ける場合は、`Port` および `Listen` ディレクティブに指定されているポートを未使用のポートに変更します。

4. 前述の手順で `SSL_port` を変更した場合は、次の手順を実行します。
 - a. `<VirtualHost _default_:SSL_port>` ディレクティブを検索し、`SSL_port` の値が `<IfModule mod_oss1.c>` セクションの `Listen` ディレクティブに指定されている値と一致することを確認します。
 - b. `<VirtualHost _default_:SSL_port>` セクションで、`Port` ディレクティブに指定されているポート番号が `SSL_port` と同じであることを確認します。

手順 6: User ディレクティブと Group ディレクティブの値を確認する

必要な場合は、次の手順に従って User ディレクティブと Group ディレクティブに指定されている値を変更します。

- User ディレクティブでは、Oracle HTTP Server のインストールに使用した Oracle ソフトウェア所有者ユーザーのユーザー名を指定する必要があります。デフォルト値は `oracle` です。
- Group ディレクティブでは、このシステム上の Oracle インベントリ・グループの名前を指定する必要があります。デフォルト値は `oinstall` です。

手順 7: 既存のセクションとディレクティブを変更する

次の手順に従って、既存のセクションとディレクティブを変更する必要があります。

1. デフォルト・ディレクトリのセクション `<Directory />` で、`Options` ディレクティブに `MultiViews` オプションを追加します。次に例を示します。

```
<Directory />
  Options FollowSymLinks MultiViews
  AllowOverride None
</Directory>
```

2. `<IfModule mod_alias.c>` セクションに新しい `<IfModule mod_perl.c>` セクションを作成し、このセクションに `/perl/` の別名を定義する `Alias` ディレクティブを移動します。次に例を示します。

```
<IfModule mod_alias.c>
...
  <IfModule mod_perl.c>
    Alias /perl/ "/oracle_home/Apache/Apache/cgi-bin/"
  </IfModule>
...
</IfModule>
```

3. `<IfModule mod_dms.c>` セクションを次の例のように変更します。 `hostname` および `domain` 変数を適切な値に置き換えます。

```
<IfModule mod_dms.c>
  <Location /dms0>
    SetHandler dms-handler
    Order deny,allow
    Deny from all
    Allow from localhost hostname.domain hostname
  </Location>
</IfModule>
```

4. `PERL5LIB` 環境変数を設定するディレクティブで、Perl ディレクトリの位置とバージョンを次の例のように編集します。

```
SetEnv PERL5LIB "/oracle_home/perl/lib/5.6.1:/oracle_home/perl/lib/site_perl/5.6.1"
```

手順 8: 新規のセクションとディレクティブを追加する

次の手順に従って、新規のセクションとディレクティブをファイルに追加する必要があります。

1. 次のセクションを追加して WEB-INF ディレクトリを保護します。

```
#Protect WEB-INF directory

<DirectoryMatch /WEB-INF/>
  Order deny,allow
  Deny from all
</DirectoryMatch>
```

2. oracle_apache.conf ファイルをインクルードする行の前に次の数行を挿入します。

```
# Include the configuration files needed for mod_oc4j
include "/oracle_home/Apache/Apache/conf/mod_oc4j.conf"

# Loading mod_rewrite module here as it has to load before mod_oc4j
LoadModule rewrite_module      libexec/mod_rewrite.so
```

手順 9: サーバー証明書と秘密鍵を移行する

SSL を使用していて、既存のサーバー証明書と秘密鍵がある場合は、このリリースの Oracle HTTP Server で使用する前に、mod_ssl に必要な書式に移行する必要があります。

既存のサーバー証明書と秘密鍵を移行する手順は、次のとおりです。

1. 次のようなコマンドを別の端末ウィンドウに入力します。

```
$ /new_oracle_home/Apache/Apache/bin/ssl2ossl -cert cert_file \
      -key key_file \
      { [ -chain chain_file] |
        [ -cafile CA_file] |
        [ -capath CA_path] }\
      -wallet wallet_path \
      [ -certpass key_file_pwd] \
      [ -wltpass wallet_pwd] \
      [ -ssowallet yes] \
      [ -validate yes]
```

次の表に、このコマンドで使用可能な各オプションの推奨値を示します。

注意: オプション -chain、-cafile、-capath から 1 つ以上を指定する必要があります。

オプション	推奨値
-cert	以前のリリース用の httpd.conf ファイル内で SSLCertificateFile ディレクティブに指定されていた値を使用します。
-key	以前のリリース用の httpd.conf ファイル内で SSLCertificateKeyFile ディレクティブに指定されていた値を使用します。
-chain	以前のリリース用の httpd.conf ファイル内で SSLCertificateChainFile ディレクティブの前にコメント文字 (#) が付いていない場合は、そのディレクティブに指定されていた値を使用します。 注意: SSLCertificateChainFile ディレクティブが指定されていない場合、またはコメント文字で始まっている場合は、-chain オプションを指定しないでください。

オプション	推奨値
-cafile	<p>以前のリリース用の httpd.conf ファイル内で SSLCertificateFile ディレクティブの前にコメント文字 (#) が付いていない場合は、そのディレクティブに指定されていた値を使用します。</p> <p>注意: SSLCertificateFile ディレクティブが指定されていない場合、またはコメント文字で始まっている場合は、-cafile オプションを指定しないでください。</p>
-capath	<p>以前のリリース用の httpd.conf ファイル内で SSLCertificatePath ディレクティブの前にコメント文字 (#) が付いていない場合は、そのディレクティブに指定されていた値を使用します。</p> <p>注意: SSLCertificatePath ディレクティブが指定されていない場合、またはコメント文字で始まっている場合は、-capath オプションを指定しないでください。</p>
-wallet	<p>Wallet を作成するディレクトリへのパスを指定します。デフォルト値は次のとおりです。</p> <p><code>/new_oracle_home/Apache/Apache/conf/ssl.wlt/default</code></p>
-certpass	秘密鍵ファイルが暗号化されている場合は、そのパスワードを指定します。
-wltpass	<p>新規 Wallet のパスワードを指定します。</p> <p>このオプションを指定しないと、ssl2oss1 ユーティリティでは Wallet パスワードの入力と確認を求めるプロンプトが表示されます。</p>
-ssowallet	Oracle Single Sign-On と互換性のある Wallet を作成するには、値 <code>yes</code> を指定します。
-validate	Wallet が正常に変換されるかどうかを検証するには、値 <code>yes</code> を指定します。このオプションに値 <code>yes</code> を指定すると、Wallet は作成されません。

- 必要な場合は、次のようなコマンドを入力し、ssl2oss1 コマンドに指定した Wallet パスワードの暗号化バージョンを生成します。

注意: ssl2oss1 コマンドで -ssowallet オプションを指定した場合は、この手順を実行する必要はありません。それ以外の場合は、httpd.conf ファイルでパスワードを指定する必要があるため、パスワードは暗号化することをお勧めします。

```
$ $ORACLE_HOME/Apache/Apache/bin/iasobf -p wallet_pwd
```

このコマンドの出力は、-p オプションに指定したパスワードの暗号化バージョンです。次の項では、この値を SSLWalletPassword ディレクティブに対して指定する必要があります。

手順 10: SSL のセクションとディレクティブを変更する

注意: 現在 SSL を使用していない場合にも、httpd.conf ファイル内の SSL 関連セクションおよびディレクティブを変更することをお勧めします。

<IfModule mod_oss1.c> セクションの各ディレクティブを次のように変更します。

- SSLSessionCache ディレクティブの設定を次のように変更します。

```
SSLSessionCache shmcb:/oracle_home/Apache/Apache/logs/ssl_scache(512000)
```

2. SSLCipherSuite ディレクティブの設定を次のように変更します。

```
SSLCipherSuite SSL_RSA_WITH_RC4_128_MD5:SSL_RSA_WITH_RC4_128_SHA:
SSL_RSA_WITH_3DES_EDE_CBC_SHA:SSL_RSA_WITH_DES_CBC_SHA:
SSL_RSA_EXPORT_WITH_RC4_40_MD5:SSL_RSA_EXPORT_WITH_DES40_CBC_SHA
```

3. 次のディレクティブとその関連コメントを削除します。

```
SSLRandomSeed
SSLCertificateFile
SSLCertificateKeyFile
SSLCertificateChainFile
SSLCACertificateFile
SSLCACertificatePath
SSLVerifyDepth
```

4. <VirtualHost _default_:SSL_port> セクションに、次の行を追加します。

```
# Server Wallet:
# The server wallet contains the server's certificate, private key
# and trusted certificates. Set SSLWallet at the wallet directory
# using the syntax: file:path_to_wallet_directory
SSLWallet file:/oracle_home/Apache/Apache/conf/ssl.wlt/default

# Server Wallet Password:
# Both clear text wallet password and obfuscated password are allowed
# here. An obfuscated one is recommended.
# Examples:
# SSLWalletPassword clear_pass
# SSLWalletPassword obfuscated_pass
#SSLWalletPassword ...
```

5. サーバー証明書と秘密鍵を移行した場合は、次の手順を実行します。

- a. SSLWallet ディレクティブにデフォルト以外の値が指定されている場合は、それを変更して Wallet のパスを指定します。
- b. Oracle Single Sign-On と互換性のある Wallet を（前項で `-ssowallet yes` オプションを使用して）作成していない場合は、SSLWalletPassword ディレクティブからコメントを削除し、値としてクリアテキストまたは暗号化形式の Wallet パスワードを指定します。

手順 11: 必須ファイルを新規ディレクトリにコピーまたは移動する

ファイル用のスクリプトを、ドキュメント・ルート・ディレクトリおよびスクリプト・ディレクトリから、新規リリース用の同等のディレクトリにコピー（または移動）します。該当する場合は次のファイルをコピーします。

注意： 以前のリリースの Oracle ホーム・ディレクトリのうち、サブディレクトリにあるファイルのみをコピーする必要があります。他の位置にある別名ディレクトリには、そのディレクトリと内容に対するアクセス権でサーバーによる読取りが許可されているかぎり、引き続きアクセスできます。User または Group ディレクティブを変更した場合は、これらのアクセス権の変更が必要になることがあります。

- DocumentRoot または Alias ディレクティブに指定されているディレクトリ内のファイルとサブディレクトリ
- ScriptAlias ディレクティブに指定されているディレクトリにある CGI、Perl、FastCGI の各プログラム、スクリプトおよびその関連ファイル

mod_plsql で使用される DAD の移行

以前のリリースの Oracle HTTP Server を含むデータベースへのアクセスに mod_plsql を使用していた場合は、データベース・アクセス記述子 (DAD) を現行リリースの mod_plsql で必要な書式に移行する必要があります。dadTool.pl Perl スクリプトを使用すると、この移行タスクを完了できます。このスクリプトを実行する手順は、次のとおりです。

1. 必要な場合は、ユーザーを Oracle ソフトウェア所有者ユーザー (通常は oracle) に切り替えます。


```
$ su - oracle
```
2. ORACLE_HOME 環境変数を設定して現行リリース用の Oracle ホームのパスを指定し、PATH 環境変数を設定して perl 実行可能ファイルを含むディレクトリを組み込みます。

- Bourne、Bash または Korn シェルの場合

```
$ ORACLE_HOME=new_oracle_home_path
$ PATH=${ORACLE_HOME}/perl/bin:${PATH}
$ PATH=${ORACLE_HOME}/Apache/modplsql/conf:${PATH}
$ export ORACLE_HOME PATH
```

- C シェルの場合

```
% setenv ORACLE_HOME new_oracle_home_path
% setenv PATH ${ORACLE_HOME}/perl/bin:${PATH}
% setenv PATH ${ORACLE_HOME}/Apache/modplsql/conf:${PATH}
```

3. プラットフォームに該当する共有ライブラリ・パス環境変数を設定し、\$ORACLE_HOME/lib ディレクトリを組み込みます。

たとえば、Bourne シェルで LD_LIBRARY_PATH 環境変数を設定するには、次のコマンドを入力します。

```
$ =${ORACLE_HOME}/lib:${}; export
```

4. 次のコマンドを入力して、現行リリースの Oracle HTTP Server に使用する mod_plsql 構成ディレクトリに移動します。

```
$ cd $ORACLE_HOME/Apache/modplsql/conf
```

5. 次のコマンドを入力して、以前のリリースで使用されていた DAD 構成ファイル (wdbsvr.app) を、このディレクトリにコピーします。

```
$ cp /old_oracle_home/Apache/modplsql/cfg/wdbsvr.app .
```

6. 次のコマンドを入力してスクリプトを実行します。

```
$ perl dadTool.pl -m
```

このスクリプトは、wdbsvr.app ファイルから DAD 情報を読み取って、dads.conf ファイルに等価の DAD を作成します。

Oracle HTTP Server の高可用性機能の有効化

Oracle HTTP Server の高可用性機能を使用可能にするには、Oracle HTTP Server とともに Oracle Process Manager and Notification サーバー (OPMN) を使用する必要があります。OPMN を使用するには、最初に OPMN サービスを起動します。OPMN サービスと Oracle HTTP Server プロセスを一緒に起動するには、次のコマンドを入力します。

```
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl startall
```

注意： このリリースでは、Oracle HTTP Server を起動および停止する `apachectl` ユーティリティはサポートされません。

OPMN サービスの実行中は、Oracle HTTP Server を起動、停止または再起動できます。

OPMN サービスと Oracle HTTP Server プロセスを停止するには、次のコマンドを入力します。

```
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl stopall
```

関連項目： 5-2 ページ「Oracle HTTP Server の起動、停止および再起動」

Oracle HTML DB のインストール後の作業

Oracle HTML DB をインストールした場合は、次の作業を完了してください。

- [プロセスの再起動](#)
- [新規 Oracle HTML DB インストールに対する Oracle HTTP Server の構成](#)
- [Oracle HTML DB のアップグレードに対する Oracle HTTP Server の構成](#)
- [PlsqlDatabasePassword パラメータの不明瞭化](#)
- [リモートの Oracle Database に対する Oracle HTML DB のインストールおよび構成](#)

プロセスの再起動

インストールの開始前に停止したプロセス (リスナー・プロセスなど) は、再起動する必要があります。Oracle HTML DB を既存の Oracle ホームにインストールした場合は、Oracle HTTP Server を再起動する必要があります。Oracle HTTP Server を再起動するには、次のコマンドを入力します。

```
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl restartproc ias-component=HTTP_Server
```

新規 Oracle HTML DB インストールに対する Oracle HTTP Server の構成

Oracle HTML DB は、`mod_plsql` を使用して Oracle HTTP Server にアクセスできることが必要です。次の項では、`mod_plsql` を使用して Oracle HTTP Server の異なる 3 つのバージョンを構成する方法について説明します。

この項の内容は、次のとおりです。

- [Oracle HTTP Server リリース 9.0.3](#)
- [Oracle HTTP Server 10g リリース 1 または Oracle Application Server 10g](#)

Oracle HTTP Server リリース 9.0.3

`wdbsvr.app` ファイルには、DAD に関する情報が格納されています。DAD は、HTTP リクエストを実行するために Oracle HTTP Server コンポーネント `mod_plsql` がデータベース・サーバーに接続する方法を指定する一連の値です。DAD を作成し、Oracle HTML DB インスタンスへの接続方法を指定します。

Oracle9i wdsrvr.app ファイルの変更

DAD を作成するには、wdsrvr.app ファイルを変更して、Oracle HTML DB のエントリを追加します。

wdsrvr.app ファイルを変更する手順は、次のとおりです。

1. テキスト・エディタを使用して、wdsrvr.app ファイルを開きます。このファイルは、次のディレクトリにあります。

```
$ORACLE_HOME/Apache/modplsql/cfg
```

2. 次の構文を使用して Oracle HTML DB のエントリを追加します。イタリック体で記載されている設定を変更する必要があります。

```
[DAD_htmlldb]
connect_string = localhost:1521:orcl
password = htmlldb
username = htmlldb_public_user
default_page = htmlldb
document_table = wwv_flow_file_objects$
document_path = docs
document_proc = wwv_flow_file_mgr.process_download
reuse = Yes
enablesso = No
stateful = STATELESS_RESET
nls_lang = American_America.AL32UTF8
```

各項目の意味は次のとおりです。

- *connect_string* は、Oracle HTML DB がインストールされたホスト ID、ポート番号および Oracle9i Database を示します。host:port:sid の形式を使用します。
使用する 9i バージョンの Oracle HTTP Server が、Oracle HTML DB と併用するように指定したデータベースと同じ Oracle ホームにインストールされている場合は、このパラメータを空白のままにします。
- *password* は、インストール時に指定した HTML DB パスワードです。
- *nls_lang* は、言語設定を示します。データベースのグローバリゼーション・サポート設定と一致する必要があります。次に例を示します。

```
American_America.AL32UTF8
```

グローバリゼーション・サポート設定の地域部分または言語部分に空白が含まれている場合は、次の例のように、値を二重引用符で囲む必要があります。

```
nls_lang = "ENGLISH_UNITED KINGDOM.AL32UTF8"
```

次の例のように、ビュー NLS_DATABASE_PARAMETERS を問い合わせることで、データベースのグローバリゼーション・サポート設定に関する情報を検索できます。

```
SELECT parameter,value
FROM nls_database_parameters
WHERE PARAMETER IN ('NLS_CHARACTERSET','NLS_LANGUAGE','NLS_TERRITORY');
```

3. 前述の例のように、ユーザー名の設定など、残りの設定はそのままにしてください。
4. wdsrvr.app ファイルを保存し、エディタを終了します。

Oracle9i httpd.conf ファイルの変更

images ディレクトリをコピーしたファイル・システム・パスを指し示す別名が含まれるように、httpd.conf ファイルを変更する必要があります。

関連項目：『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』

1. テキスト・エディタを使用して、`httpd.conf` ファイルを開きます。このファイルは、次のディレクトリにあります。

```
$ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf
```

2. `images` ディレクトリの別名として `/i/` を使用して、`images` ディレクトリをコピーしたファイル・システム・パスのエントリを追加します。次に例を示します。

```
Alias /i/ "$ORACLE_HOME/Apache/Apache/images/"
```

パスの最後にスラッシュ (/) を付けます。

3. `httpd.conf` ファイルを保存し、エディタを終了します。
4. Oracle HTTP Server を停止し、再起動します。

- Oracle HTTP Server を停止するには、次のコマンドを入力します。

```
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl stopproc ias-component=HTTP_Server
```

- Oracle HTTP Server を再起動するには、次のコマンドを入力します。

```
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl restartproc ias-component=HTTP_Server
```

Oracle HTTP Server 10g リリース 1 または Oracle Application Server 10g

`images` ディレクトリをコピーしたファイル・システム・パスを指し示す別名が含まれるように、`dads.conf` ファイルを変更する必要があります。

`images` ディレクトリの位置を示す別名が含まれるように `dads.conf` ファイルを変更する手順は、次のとおりです。

1. テキスト・エディタを使用して、`dads.conf` ファイルを開きます。このファイルは、デフォルトで次のディレクトリにあります。

```
$ORACLE_HOME/Apache/modplsql/conf/
```

2. `images` ディレクトリの別名として `/i/` を使用して、`images` ディレクトリをコピーしたファイル・システム・パスのエントリを追加します。次に例を示します。

```
Alias /i/ "$ORACLE_HOME/Apache/Apache/images/"
```

パスの最後にスラッシュ (/) を付けます。

3. 次の構文を使用して Oracle HTML DB の DAD エントリを追加します。`PlsqlDatabasePassword`、`PlsqlDatabaseConnectionString` および `PlsqlNLSLanguage` の値をユーザーの環境に適切な値に置換します。

```
<Location /pls/htmldb>
  SetHandler pls_handler
  Order deny,allow
  Allow from all
  AllowOverride None
  PlsqlDatabaseUsername      HTMLDB_PUBLIC_USER
  PlsqlDatabasePassword     htmldb
  PlsqlDatabaseConnectionString localhost:1521:htmldbdv ServiceNameFormat
  PlsqlDefaultPage          htmldb
  PlsqlDocumentTablename    wwv_flow_file_objects$
  PlsqlDocumentPath         docs
  PlsqlDocumentProcedure    wwv_flow_file_mgr.process_download
  PlsqlAuthenticationMode   Basic
  PlsqlNLSLanguage          AMERICAN_AMERICA.AL32UTF8
</Location>
```

グローバリゼーション・サポート設定の地域部分または言語部分に空白が含まれている場合は、次の例のように、値を二重引用符で囲む必要があります。

```
PlsqlNLSLanguage      "ENGLISH_UNITED KINGDOM.AL32UTF8"
```

4. dads.conf ファイルを保存し、エディタを終了します。
5. **Oracle Application Server のみ**: 次のコマンドを入力します。

```
$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl updateConfig -ct ohs
```

6. Oracle HTTP Server を停止し、再起動します。

```
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl stopproc ias-component=HTTP_Server
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl restartproc ias-component=HTTP_Server
```

関連項目: 4-15 ページの「[PlsqlDatabasePassword パラメータの不明瞭化](#)」
および『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』

Oracle HTML DB のアップグレードに対する Oracle HTTP Server の構成

リリース 1 (10.1) から Oracle HTML DB をアップグレードしていて、初期インストールで指定したパスワードが今回のインストールで指定したパスワードと異なる場合は、DAD が格納されているファイルを変更する必要があります。次の項では、ユーザーの環境の Oracle HTTP Server のタイプに応じて、変更する必要があるパラメータについて説明します。

この項の内容は、次のとおりです。

- [Oracle HTTP Server リリース 9.0.3](#)
- [Oracle HTTP Server 10g リリース 1 または Oracle Application Server 10g](#)

注意: 次の作業は、初期インストールで指定したパスワードが今回のインストールで指定したパスワードと異なる場合のみ実行してください。

Oracle HTTP Server リリース 9.0.3

Oracle HTML DB をアップグレードしていて、Oracle Database リリース 9.2.0.x に付属しているバージョンの Oracle HTTP Server を実行している場合は、wdbsvr.app ファイルの password パラメータを変更する必要があります。

wdbsvr.app ファイルの password パラメータを変更する手順は、次のとおりです。

1. テキスト・エディタを使用して、wdbsvr.app ファイルを開きます。このファイルは、次のディレクトリにあります。

```
$ORACLE_HOME/Apache/modplsql/cfg
```

2. 次のものを検索することで、Oracle HTML DB の DAD 設定を見つけます。

```
DAD_htmlldb
```

3. インストール時に指定したパスワードと一致するように password パラメータの横の値を編集します。
4. 変更内容を保存します。
5. Oracle HTTP Server を停止し、再起動します。

```
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl stopproc ias-component=HTTP_Server
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl restartproc ias-component=HTTP_Server
```

関連項目: 『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』

Oracle HTTP Server 10g リリース 1 または Oracle Application Server 10g

Oracle HTML DB をアップグレードしていて、Oracle HTTP Server 10g リリース 1 または Oracle Application Server 10g を実行している場合は、`marvel.conf` ファイルの `PlsqlDatabasePassword` パラメータを変更する必要があります。

`marvel.conf` ファイルの `PlsqlDatabasePassword` パラメータを変更する手順は、次のとおりです。

1. テキスト・エディタを使用して、`marvel.conf` ファイルを開きます。このファイルは、次のディレクトリにあります。

```
$ORACLE_HOME/Apache/modplsql/conf
```

2. 次のものを検索することで、Oracle HTML DB の DAD 設定を見つけます。

```
/pls/htmldb
```

3. インストール時に指定したパスワードと一致するように `PlsqlDatabasePassword` パラメータの値を変更します。

4. 変更内容を保存します。

5. Oracle Application Server 10g の場合は、次のコマンドを入力します。

```
$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl updateConfig -ct ohs
```

6. Oracle HTTP Server を停止し、再起動します。

```
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl stopproc ias-component=HTTP_Server
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl restartproc ias-component=HTTP_Server
```

関連項目： 4-15 ページの「[PlsqlDatabasePassword パラメータの不明瞭化](#)」および『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』

PlsqlDatabasePassword パラメータの不明瞭化

`PlsqlDatabasePassword` パラメータは、データベースにログインするためのパスワードを指定します。`dadTool.pl` ユーティリティを使用して、`dads.conf` ファイルのパスワードを不明瞭化できます。

`dadTool.pl` ユーティリティは、次のディレクトリにあります。

```
$ORACLE_HOME/Apache/modplsql/conf
```

新規 Oracle HTML DB インストールでのパスワードの不明瞭化

新規 Oracle HTML DB インストールでは、`PlsqlDatabasePassword` パラメータは `dads.conf` ファイルにあります。新規インストールでパスワードを不明瞭化するには、`dadTool.README` ファイルの指示に従って `dadTool.pl` ユーティリティを実行します。

Oracle HTML DB のアップグレードでのパスワードの不明瞭化

以前のリリースの Oracle HTML DB からアップグレードした場合、DAD 情報は `marvel.conf` ファイルにあります。`dadTool.pl` ユーティリティを実行するには、その前に `marvel.conf` ファイルから `dads.conf` ファイルに DAD エントリをコピーする必要があります。

アップグレード時にパスワードを不明瞭化する手順は、次のとおりです。

1. テキスト・エディタを使用して、次のディレクトリにある `marvel.conf` ファイルから `dads.conf` ファイルに、`/pls/htmldb` のエントリをコピーします。

```
$ORACLE_HOME/Apache/modplsql/conf
```

2. `dadTool.README` ファイルの指示に従って `dadTool.pl` を実行します。

3. /pls/htmldb のエントリを dads.conf ファイルから marvel.conf にコピーして戻します。
4. /pls/htmldb のエントリを dads.conf ファイルから削除します。

リモートの Oracle Database に対する Oracle HTML DB のインストールおよび構成

htmldbca コマンドライン・ツールを使用して、次の手順を実行できます。

- リモートの Oracle Database での Oracle HTML DB のインストールおよび構成
- リモートの Oracle Database での既存の Oracle HTML DB のアップグレード
- リモートの Oracle Database での既存の Oracle HTML DB への言語の追加

この項の内容は、次のとおりです。

- [htmldbca の実行要件](#)
- [htmldbca の構文](#)
- [htmldbca の実行](#)

htmldbca の実行要件

htmldbca を使用するには、システムに次の要件が必要です。

- **HTML DB がインストールされたローカルの Oracle Database Companion CD のインストール**

Oracle Universal Installer は、Oracle HTML DB と同じ Oracle ホームの bin ディレクトリに htmldbca 実行可能ファイルを格納します。

- **リモート・データベース**

このデータベースは、リモート・コンピュータの Oracle HTML DB ホームまたは Oracle Database インストールと同じコンピュータ上に配置できます。このリモート Oracle Database インストールへの有効な接続が必要です。

- **リモート・データベースへの接続権限**

SYSDBA ロールを使用して SYS で接続できる必要があります。htmldbca によって、SYS ユーザーのパスワードを求めるプロンプトが表示されます。

関連項目： 別の Oracle Database インスタンスへの接続方法については、『Oracle Database Net Services 管理者ガイド』を参照してください。

htmldbca の構文

htmldbca の構文は、次のとおりです。

```
htmldbca [options]
```

この構文では、options の意味は次のとおりです。

- **-oracle_home string:** Oracle HTML DB をインストールする Oracle ホームの位置を指定します。

この Oracle ホームを指定しないと、htmldbca では、ORACLE_HOME 環境変数の設定を使用します。ORACLE_HOME が未設定または使用不可で、oracle_home オプションを指定しないと、Oracle ホームの入力を求めるプロンプトが htmldbca によって表示されます。

このオプションは必須です。

次に例を示します。

```
htmldbca -oracle_home /u01/app/oracle/product/10.2.0/db_2
```

- `-db_host string`: リモート Oracle Database のホスト名を指定します。
このオプションは必須ですが、指定しないと、入力を求めるプロンプトが `htmldbca` によって表示されます。
次に例を示します。

```
htmldbca -db_host shobeen
```
- `-db_servicename string`: Oracle Database サービス名を指定します。
このオプションは必須ですが、指定しないと、入力を求めるプロンプトが `htmldbca` によって表示されます。
次に例を示します。

```
htmldbca -db_servicename welcome
```
- `sys_password` | `-sys_obfuscatedPassword string`: SYS のリモート・パスワードまたは不明瞭化されたパスワードを指定します。
このオプションは必須ですが、いずれかのパラメータを指定しないと、`sys_password` の入力を求めるプロンプトが `htmldbca` によって表示されます。その場合、`sys_obfuscatedPassword` はオプションになります。
次に例を示します。

```
htmldbca -sys_password welcome
```
- `-htmldb_password` | `-htmldb_obfuscatedPassword string`: Oracle HTML DB のパスワードまたは不明瞭化されたパスワードを指定します。
このオプションは必須ですが、いずれかのパスワードを指定しないと、`htmldb_password` の入力を求めるプロンプトが `htmldbca` によって表示されます。以前のバージョンの Oracle HTML DB からアップグレードしている場合は、HTMLDB_PUBLIC_USER スキーマのそのバージョンに対して作成したパスワードを入力します。
次に例を示します。

```
htmldbca -htmldb_password htmldb_welcome
```

インストールが完了すると、このパスワードを使用して、Oracle HTML DB に管理ユーザーとして接続できます。指定したパスワードは、HTMLDB_PUBLIC_USER スキーマ (`mod_plsql` でデータベースに接続するために使用)、FLOWS_010600 スキーマおよび FLOWS_FILES スキーマでも使用されます。

関連項目： インストール後にパスワードを不明瞭化する方法については、4-15 ページの「[新規 Oracle HTML DB インストールでのパスワードの不明瞭化](#)」を参照してください。
- `-ts_html db string`: リモート HTML DB に作成する HTML DB 表領域の名前を指定します。
このオプションは必須ですが、指定しないと、入力を求めるプロンプトが `htmldbca` によって表示されます。
次に例を示します。

```
htmldbca -ts_html db sysaux
```

- `-ts_files string`: HTML DB ファイルの表領域を指定します。デフォルトでは、`htmldbca` によって `ts_htmlpdb` の値が使用されます。

このオプションは必須ではありませんが、無効な値を入力すると、有効な値の入力を求めるプロンプトが `htmldbca` によって表示されます。

次に例を示します。

```
htmldbca -ts_files sysaux
```

- `-ts_temp string`: Oracle HTML DB の一時表領域を指定します。デフォルト値は、`temp` 表領域を使用するように設定されます。

このオプションは必須ではありませんが、無効な値を入力すると、有効な値の入力を求めるプロンプトが `htmldbca` によって表示されます。

次に例を示します。

```
htmldbca -ts_temp sysaux
```

- `-load_lang string [, string[, string[...]]]`: インストールする 1 つ以上の追加言語を指定します。

このオプションは必須ではありませんが、無効な値を入力すると、有効な値の入力を求めるプロンプトが `htmldbca` によって表示されます。プロンプトが表示された場合、入力できる言語は 1 つのみです。値を入力しないと、英語が選択されます。

次に例を示します。

```
htmldbca -load_lang de, fr, it
```

言語の選択肢は、次のとおりです。

- de: ドイツ語
- en: 英語 (これがデフォルトです。) 英語バージョンの Oracle HTML DB がリモート Oracle Database にすでにインストールされている場合、`htmldbca` は通知メッセージを表示して終了します。
- es: スペイン語
- fr: フランス語
- it: イタリア語
- ja: 日本語
- ko: 韓国語
- pt-br: ポルトガル語 (ブラジル)
- zh-cn: 中国語 (北京)
- zh-tw: 中国語 (台湾)

関連項目: Oracle Database の言語サポートの詳細は、『Oracle Database グローバリゼーション・サポート・ガイド』を参照してください。

- `-DAD_name string`: Oracle HTML DB の新しい DAD 名を作成します。デフォルト値は `htmlldb` です。 `htmldbca` は、新しい DAD 値を使用して `$ORACLE_HOME/Apache/modplsql/conf/marvel.conf` ファイルを更新します。

このオプションは必須ではありませんが、重複する値を入力すると、有効な値の入力を求めるプロンプトが `htmldbca` によって表示されます。変更内容を有効にするには、Oracle HTTP Server を再起動する必要があります。その際は、次の項に説明されている `-restart` パラメータを使用できます。

次に例を示します。

```
htmldbca -DAD_name my_htmlldb -restart
```

あるいは、`htmldbca` を実行した後、次のコマンドを入力して Oracle HTTP Server を再起動できます。

```
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl restartproc ias-component=HTTP_Server
```

このコマンドが完了した後は、次の形式で URL を入力して、このインスタンスにアクセスできます。

```
http://host:port/pls/DAD_name
```

次に例を示します。

```
http://mycompany:7778/pls/my_html
```

- `-restart`: 構成を完了した後、Oracle HTTP Server を再起動します。これはオプションで、省略した場合も指定を求めるプロンプトは表示されません。次に例を示します。

```
htmldbca -restart
```

- `-interactive on|off`: 対話モードをオンまたはオフに切り替えます。対話モードがオンで、パラメータ値が欠落または無効な場合は、`htmldbca` によってプロンプトが表示されます。対話モードがオフの場合、プロンプトは表示されません。したがって、`htmldbca` を実行する場合は、必要なすべてのプロンプト値をコマンドラインに指定する必要があります。デフォルトでは、`htmldbca` は対話モードで実行されます。

このオプションは必須ではありません。次に例を示します。

```
htmldbca -interactive off
```

- `-help`: `htmldbca` の使用方法の簡単な説明が表示されます。

このオプションは必須ではありません。次に例を示します。

```
htmldbca -help
```

htmldbca の実行

`htmldbca` を実行するには、`htmldbca` コマンドのみで、または前述の項に記載されているオプションの組合せを使用して実行します。

`-interactive` モードがオフに設定されていない場合は、実行に必要な情報をコマンドラインに指定しないと、入力を求めるプロンプトが `htmldbca` によって表示されます。

Oracle Workflow Server のインストール後の作業

この項の内容は、次のとおりです。

- [初期化パラメータの値の確認](#)
- [無効なオブジェクトのコンパイル](#)
- [Oracle Workflow HTML のヘルプの構成](#)
- [その他の設定作業の完了](#)

初期化パラメータの値の確認

次の表に記載されている初期化パラメータが、必要な値以上に設定されていることを確認します。必要に応じて、値を変更してください。

注意： 現在の値が必要な値よりも高い場合は、現在の値を変更しないでください。

パラメータ	必要な値
AQ_TM_PROCESSES	1 よりも大きい値
JOB_QUEUE_PROCESSES	10 以上の値

これらの初期化パラメータの値を確認し、必要に応じて変更する手順は、次のとおりです。

1. SYS ユーザーでデータベースにログインします。

```
SQL> CONNECT SYS/SYS_password
```
2. 初期化パラメータの現在の値を判断するには、各初期化パラメータに対して次のコマンドを使用します。

```
SQL> SHOW PARAMETER parameter_name
```
3. 初期化パラメータの値を変更するには、次のようなコマンドを入力します。

```
SQL> ALTER SYSTEM SET parameter_name=value
```
4. データベースがサーバー・パラメータ・ファイルを使用していない場合は、初期化パラメータ・ファイル `initsid.ora` のパラメータに指定されている値を編集します。

無効なオブジェクトのコンパイル

SYS スキーマの無効なオブジェクトをコンパイルするには、最初に Oracle Database にログインします。次に、`utlrp.sql` スクリプトを実行します。

```
@$ORACLE_HOME/rdbms/admin/utlrp.sql
```

関連項目：

- 『Oracle Database インストレーション・ガイド』の新規またはアップグレードしたデータベースの構成に関する項
- 『Oracle Database リファレンス』

Oracle Workflow HTML のヘルプの構成

Oracle Workflow では、各 Web ページの「ヘルプ」ボタンで、状況に依存した HTML のヘルプにアクセスできます。Oracle Workflow HTML のヘルプを表示するには、その前に \$ORACLE_HOME/wf/wfdoc.zip ファイルからユーザーのファイル・システムに doc ディレクトリを抽出する必要があります。

1. unzip コマンドを使用し、中間層 Oracle ホームの Workflow ディレクトリにある ZIP ファイルから、doc ディレクトリ・ツリーを抽出します。
この抽出には、最低 5 MB の空きディスク領域が必要です。doc ディレクトリ・ツリーを抽出した後、必要に応じて wfdoc.zip ファイルを削除します。
2. Oracle Workflow のいずれかの Web ページで「ヘルプ」ボタンをクリックし、HTML のヘルプにアクセスします。

Web リスナーのベース URL に仮想パスを追加して、HTML のヘルプ・ファイルのディレクトリにアクセスすることもできます。Oracle Workflow のヘルプの目次ページは、次の URL です。

```
http://hostname:portID/OA_DOC/lang/wf/toc.htm
```

3. カスタム・ヘルプを追加する場合は、次のプレースホルダ・ファイルを独自のヘルプ素材で置き換えてください。

```
$ORACLE_HOME/wf/doc/lang/wfcust/wfcust.htm
```

カスタム・ヘルプの主要な入り口となる HTML ファイルは、wfcust.htm という名前で、contents というアンカーが含まれている必要があります。カスタム・ヘルプは、Oracle Workflow のヘルプの目次にあるカスタム・ヘルプ・リンクを介してアクセスできます。あるいは、次の URL を使用してカスタム・ヘルプに直接アクセスできます。

```
http://hostname:portID/OA_DOC/lang/wfcust/wfcust.htm
```

その他の設定作業の完了

Oracle Workflow Server および中間層のインストール・プロセスを完了した後は、いくつかの追加手順を実行し、サイトに適した Oracle Workflow を設定する必要があります。

これらの手順を実行する手順は、『Oracle Workflow 管理者ガイド』の Oracle Workflow の設定に関する項を参照してください。

Oracle Database Companion CD 製品の スタート・ガイド

この章では、Oracle HTTP Server および Oracle HTML DB をインストールし、それぞれインストール後の作業を完了した後に、インストール内容をチェックして、これらのソフトウェアを起動する方法を説明します。

この章の内容は、次のとおりです。

- [インストール内容のチェック](#)
- [Oracle HTTP Server のスタート・ガイド](#)
- [Oracle HTML DB のスタート・ガイド](#)
- [Oracle Workflow のスタート・ガイド](#)

インストール内容のチェック

Oracle ソフトウェアのインストール内容は、Oracle Universal Installer を使用して次の手順でチェックできます。

1. Oracle Universal Installer を起動します。
2. 表示された「ようこそ」画面で「インストールされた製品」をクリックします。
「インベントリ」画面が表示され、システム上のすべての Oracle ホームと各 Oracle ホームにインストールされている製品が表示されます。製品のパスをチェックするには、「環境」タブをクリックします。

Oracle HTTP Server のスタート・ガイド

この項の内容は、次のとおりです。

- [Oracle HTTP Server の起動、停止および再起動](#)
- [Oracle HTTP Server へのログイン](#)

Oracle HTTP Server の起動、停止および再起動

Oracle Workflow または Oracle Workflow 中間層コンポーネントをインストールした場合は、これらのコンポーネントを使用する前に Oracle HTTP Server を再起動する必要があります。

次の各コマンドを使用して、Oracle HTTP Server を起動、停止および再起動します。

- Oracle HTTP Server を起動する場合は、次のように入力します。

```
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl startproc ias-component=HTTP_Server
```
- Oracle HTTP Server を再起動する場合は、次のように入力します。

```
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl restartproc ias-component=HTTP_Server
```
- Oracle HTTP Server を停止する場合は、次のように入力します。

```
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl stopproc ias-component=HTTP_Server
```

Oracle HTTP Server へのログイン

Oracle HTTP Server にログインするには、ブラウザで次のような URL を入力します。

```
http://server:port/
```

各項目の意味は次のとおりです。

- `server` は、Oracle HTTP Server をインストールしたコンピュータです。(たとえば `mycomputer.us.mycompany.com` など)
- `port` は、Oracle HTTP Server に割り当てられたポート番号です。インストール時、この番号のデフォルトは 7777 です。Oracle HTTP Server インストールのポート番号に関する情報は、次のいずれかのファイルから入手できます。
 - `$ORACLE_HOME/install/portlist.ini`
 - `$ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf/httpd.conf`

ログイン後は、Oracle HTTP Server の製品デモ、およびこのリリースの新機能リストを参照できます。このリンクからは、Oracle Technology Network にもアクセスできます。

Oracle HTML DB のスタート・ガイド

この項の内容は、次のとおりです。

- [Oracle HTML DB へのログイン](#)
- [Oracle HTML DB 管理者の設定作業](#)

Oracle HTML DB へのログイン

Oracle HTML DB アプリケーションを表示または開発するには、Web ブラウザで JavaScript と HTML 4.0 および CSS 1.0 規格がサポートされている必要があります。

関連項目： サポートされている Web ブラウザのリストは、2-16 ページの「[ブラウザの要件](#)」を参照してください。

Oracle HTML DB にログインする手順は、次のとおりです。

注意： Oracle HTML DB にログインするには、その前に、ワークスペースへのアクセス権が管理者から付与されている必要があります。

1. Web ブラウザで次のページを開きます。

```
http://hostname:port/pls/database_access_descriptor/htmldb_admin
```

各項目の意味は次のとおりです。

- `hostname` は、Oracle HTTP Server をインストールしたシステムの名前です。
- `port` は、Oracle HTTP Server に割り当てられたポート番号です。インストール時、この番号のデフォルトは 7777 です。Oracle HTTP Server インストールのポート番号に関する情報は、次のいずれかのファイルから入手できます。
 - `$ORACLE_HOME/install/portlist.ini`
 - `$ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf/httpd.conf`
- `database_access_descriptor` は、Oracle HTTP Server が HTTP リクエストを実行するためにデータベースに接続する方法を示します。デフォルト値は `htmldb` です。

関連項目： DAD の使用方法の詳細は、`$ORACLE_HOME/Apache/modplsql/conf/dads.readme` を参照してください。

Oracle HTML DB ログイン・ページが表示されます。

2. 「**ユーザー名**」フィールドに、`admin` と入力します。
3. 「**パスワード**」フィールドに、Oracle HTML DB のインストール時に指定した、Oracle HTML DB 管理者アカウントのパスワードを入力します。
4. 「**ログイン**」をクリックします。Oracle HTML DB 管理サービス・ページが表示されます。

Oracle HTML DB 管理者の設定作業

Oracle HTML DB 管理者は、次の作業を実行する必要があります。

- **Oracle HTML DB 管理サービスへのログイン:** Oracle HTML DB 管理サービスは、Oracle HTML DB インスタンス全体を管理するための個別のアプリケーションです。
- **プロビジョニング・モードの指定:** Oracle HTML DB 管理サービスでは、ワークスペースの作成（またはプロビジョニング）プロセスを開発環境で使用方法を決定する必要があります。
- **ワークスペースの作成:** ワークスペースは Oracle HTML DB 開発環境内の共有作業領域で、固有の ID と名前が付けられています。Oracle HTML DB 管理者は、ワークスペースを手動で作成するか、またはユーザーにリクエストを送信させることができます。
- **ワークスペースへのログイン:** Oracle HTML DB 管理サービスにワークスペースを作成した後は、Oracle HTML DB ログイン・ページに戻ってワークスペースにログインします。

関連項目: Oracle HTML DB の使用方法と管理方法、および Oracle HTML DB を使用したアプリケーションの開発方法の詳細は、『Oracle HTML DB ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

Oracle Workflow のスタート・ガイド

この項の内容は、次のとおりです。

- [Oracle Workflow ホーム・ページへのログイン](#)
- [Oracle Workflow Manager へのログイン](#)
- [Oracle Workflow 管理者の設定作業](#)

Oracle Workflow ホーム・ページへのログイン

Web ブラウザで Oracle Workflow ホーム・ページにアクセスするには、Workflow ディレクトリ・サービスの有効なユーザーであることが必要です。ディレクトリ・サービスは、インストールおよび構成時に選択した設定に応じて、Oracle Internet Directory またはネイティブ・データベース・ユーザーをベースとします。

Oracle Workflow ホーム・ページにアクセスするには、有効な Oracle Workflow ユーザーとして次の URL に接続します。

```
http://hostname:port/pls/wf/wfa_html.home
```

関連項目: 使用するサーバーおよびポート番号が不明な場合は、`$ORACLE_HOME/oc4j/j2ee/deploy_db_wf.ini` を参照してください。

Oracle Workflow Manager へのログイン

Oracle Workflow Server インストールには、Oracle Enterprise Manager の Oracle Workflow Manager コンポーネントが含まれています。このコンポーネントは、Oracle Workflow の管理ツールを提供します。Oracle Workflow を Oracle Database ホームにインストールすると、Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントにより Oracle Workflow Manager が構成されます。ここで、Java 2 Enterprise Edition (OC4J) インスタンス用に、次の 2 つの Oracle Application Server コンテナが作成されます。

- **OC4J_Workflow_Component_Container:** Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントは、このインスタンス内に 2 つのアプリケーションをデプロイします。1 つは エージェント・リスナー・サービス・コンポーネントを実行するアプリケーションで、もう 1 つは通知メーラー・サービス・コンポーネントを実行するアプリケーションです。
- **OC4J_Workflow_Management_Container:** Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントは、Oracle Workflow Manager ユーザー・インタフェースを実装するために、このインスタンス内に 1 つのアプリケーションをデプロイします。

OC4J インスタンスの起動、停止および再起動

OC4J インスタンスを起動するには、次のスクリプトを実行します。

```
$ORACLE_HOME/wf/admin/wfmgrstart.csh  
$ORACLE_HOME/wf/admin/wfsvcstart.csh
```

Oracle Workflow Manager にデプロイされている OC4J インスタンスを停止および再起動できます。インスタンスを停止するには、次のスクリプトを実行します。

```
$ORACLE_HOME/wf/admin/wfmgrstop.csh  
$ORACLE_HOME/wf/admin/wfsvcstop.csh
```

Oracle Workflow Manager ユーザー・インタフェースへのアクセス

Oracle Workflow Manager ユーザー・インタフェースにアクセスする手順は、次のとおりです。

1. 次のような URL を使用して、Oracle Enterprise Manager Database Control にログインします。

```
http://server:port/em
```

次に例を示します。

```
http://myserver.mycompany:5500/em
```

2. ホーム・ページで、「**関連リンク**」セクションにナビゲートします。
3. 「**関連リンク**」セクションで、「**ワークフロー・マネージャ**」を選択します。
4. Oracle Workflow データベース・ユーザー名（通常は `owf_mgr`）とパスワードを使用してログインします。

関連項目：

- 『Oracle Workflow 管理者ガイド』
- 『Oracle Workflow 開発者ガイド』
- 『Oracle Workflow ユーザーズ・ガイド』
- 『Oracle Workflow API リファレンス』

Oracle Workflow 管理者の設定作業

Oracle Workflow 管理者は、『Oracle Workflow 管理者ガイド』の「Oracle Workflow の設定」の章で説明している作業を完了してください。

Oracle Database Companion CD 製品の削除

この章では、システムから Oracle ソフトウェアを削除する方法について説明します。この章の内容は、次のとおりです。

- Oracle HTML DB データベース・オブジェクトの削除
- Oracle Workflow の削除
- Oracle ソフトウェア・ファイルの削除

Oracle HTML DB データベース・オブジェクトの削除

Oracle HTML DB をインストールすると、コンフィギュレーション・アシスタントにより、インストール時に指定したデータベースにデータベース・オブジェクトが作成されます。Oracle HTML DB を完全に削除するには、ソフトウェアを削除した後、そのデータベースからデータベース・オブジェクトを削除する必要があります。データベースから Oracle HTML DB データベース・オブジェクトを削除する手順は、次のとおりです。

1. SQL*Plus を使用して、次のように SYS または SYSTEM ユーザーでデータベースに接続します。

```
$ sqlplus "SYS/SYS_password AS SYSDBA"
```

2. 次のコマンドを入力して、データベース・オブジェクトを削除します。

```
SQL> ALTER SESSION SET CURRENT_SCHEMA = flows_010600;
SQL> EXEC wwv_flow_upgrade.drop_public_synonyms;
SQL> ALTER SESSION SET CURRENT_SCHEMA = SYSTEM;
SQL> DROP USER flows_010600 CASCADE;
SQL> DROP USER flows_files CASCADE;
SQL> DROP USER htmldb_public_user CASCADE;
```

Oracle Workflow の削除

Oracle Workflow を削除する手順は、次のとおりです。

1. Oracle Universal Installer を使用して、Oracle Workflow Server または Oracle Workflow 中間層コンポーネントを削除します。
2. データベースから Oracle Workflow スキーマを削除します。

SYS ユーザーでデータベースにログインし、次のようにコマンドを入力します。

```
drop user Workflow_schema_name cascade
```

次に例を示します。

```
drop user owf_mgr cascade
```

Oracle ソフトウェア・ファイルの削除

Oracle Universal Installer を使用して Oracle ソフトウェアを削除する手順は、次のとおりです。

注意： Oracle ソフトウェアの削除には、必ず Oracle Universal Installer を使用します。Oracle Universal Installer を使用して先にソフトウェアを削除してから、Oracle ホーム・ディレクトリを削除してください。

1. 必要に応じて、oracle ユーザーとしてログインします。

```
$ su - oracle
```

2. ORACLE_HOME 環境変数を設定して、削除する Oracle ホームのパスを指定します。

- Bourne、Bash または Korn シェルの場合

```
$ ORACLE_HOME=oracle_home_path
$ export ORACLE_HOME
```

- C シェルの場合

```
$ setenv ORACLE_HOME oracle_home_path
```

3. 次のコマンドを入力して、Oracle Universal Installer を起動します。

```
$ORACLE_HOME/oui/bin/runInstaller
```

4. 「ようこそ」画面で「製品の削除」をクリックします。

「インベントリ」画面に、システム上のすべての Oracle ホームと各 Oracle ホームにインストールされている製品が表示されます。

5. 「インベントリ」画面で、削除する製品を含む Oracle ホームを選択します。

6. 特定の製品を削除する場合は、その製品をツリー・ウィンドウで選択します。

7. 「削除」をクリックします。

選択した製品および依存コンポーネントの削除の確認を求める確認画面が表示されます。

8. 「はい」をクリックします。

ソフトウェアの削除中には処理の進捗を示すインジケータが表示されます。

Oracle Database Companion CD のインストール に関するトラブルシューティング

この付録では、トラブルシューティングについて説明します。この付録の内容は、次のとおりです。

- 要件の確認
- X Window の表示エラー
- インストール・エラーが発生した場合の操作
- インストール・セッションのログの確認
- コンフィギュレーション・アシスタントのトラブルシューティング
- インストール失敗後のクリーン・アップ
- サイレント・モードでのレスポンス・ファイルに関するエラー処理
- Oracle HTML DB でイメージが正しく表示されない場合
- Oracle HTML DB のオンライン・ヘルプが動作しない場合

要件の確認

この付録に示すトラブルシューティング手順を実行する前に、システムが要件を満たしていることと、第2章に示したインストール前の作業をすべて完了していることを確認してください。

X Window の表示エラー

Oracle Universal Installer をリモート・システム上で実行しているときに、Oracle Universal Installer のユーザー・インタフェースをローカル・システム上で表示すると、次のようなエラー・メッセージが表示される場合があります。

```
Failed to connect to server
Connection refused by server
Can't open display
```

これらのエラー・メッセージの1つが表示された場合は、次の手順を実行してください。

注意： この手順が該当するのは、UNIX ベースのワークステーションのユーザーのみです。X サーバー・ソフトウェアがインストールされた PC またはその他のシステムを使用している場合は、リモート・システムの X アプリケーションをローカル・システム上で表示する方法について、X サーバーのマニュアルを参照してください。

1. ローカル端末ウィンドウで、X Window セッションを開始したユーザーとしてログインします。
2. 次のコマンドを入力して、ローカルの X サーバー上にリモート・ホストの X アプリケーションを表示します。

```
$ xhost fully_qualified_remote_host_name
```

次に例を示します。

```
$ xhost somehost.us.acme.com
```

3. 次のコマンドを入力します。*workstation_name* はワークステーションのホスト名または IP アドレスです。

- Bourne、Bash または Korn シェルの場合

```
$ DISPLAY=workstation_name:0.0
$ export DISPLAY
```

- C シェルの場合

```
% setenv DISPLAY workstation_name:0.0
```

4. X Window アプリケーションがローカル・システム上で正しく表示されるかどうかを判断するには、次のコマンドを入力します。

```
$ xclock
```

モニターに xclock が表示されます。

5. xclock が表示される場合は、xclock を終了して Oracle Universal Installer を再起動します。

インストール・エラーが発生した場合の操作

インストール中にエラーが発生した場合は、次のように操作してください。

- Oracle Universal Installer を終了しないでください。
- インストール画面の 1 つに誤った情報を入力して「次へ」をクリックした場合は、「戻る」をクリックして元の画面に戻り、情報を訂正します。
- Oracle Universal Installer でのファイルのコピーまたはリンク中にエラーが発生した場合は、A-3 ページの「インストール・セッションのログの確認」の項を参照してください。
- コンフィギュレーション・アシスタントの実行中にエラーが発生した場合は、A-4 ページの「コンフィギュレーション・アシスタントのトラブルシューティング」の項を参照してください。
- 問題を解決できない場合は、A-4 ページの「インストール失敗後のクリーン・アップ」の項にある手順に従って、失敗したインストールの内容を削除します。

インストール・セッションのログの確認

インストール中には、Oracle Universal Installer により実行されるすべてのアクションがログ・ファイルに記録されます。インストール中にエラーが発生した場合は、問題の原因と考えられる情報をログ・ファイルで確認してください。

ログ・ファイルの内容を表示する手順は、次のとおりです。

1. 必要な場合は、次のコマンドを入力して oraInventory ディレクトリの位置を判別します。

```
$ cat /var/opt/oracle/oraInst.loc
```

oraInventory ディレクトリの位置は、このファイルの inventory_loc パラメータに指定されています。

2. 次のコマンドを入力して、Oracle Universal Installer のログ・ファイル・ディレクトリに移動します。orainventory_location は oraInventory ディレクトリの位置です。

```
$ cd /orainventory_location/logs
```

3. 次のコマンドを入力して、ログ・ファイル名を判別します。

```
$ ls -ltr
```

このコマンドによりファイル・リストが作成順に表示され、最新のファイルが最後に表示されます。インストーラのログ・ファイル名は次のような名前です。date_time はインストールの開始日時を示します。

```
installActionsdate_time.log
```

4. ログ・ファイル内で、エラーに関する情報があると思われる最新項目を表示するには、次のようなコマンドを入力します。

```
$ tail -50 installActionsdate_time.log | more
```

このコマンドでは、ログ・ファイルの最後の 50 行が表示されます。

5. Oracle Universal Installer により表示されるエラーまたはログ・ファイルにリストされるエラーが再リンクの問題を示している場合は、次のファイルで詳細を確認してください。

```
$ORACLE_HOME/install/make.log
```

コンフィギュレーション・アシスタントのトラブルシューティング

コンフィギュレーション・アシスタントの実行中に発生したインストール・エラーのトラブルシューティング方法は、次のとおりです。

- A-3 ページの「[インストール・セッションのログの確認](#)」に示したインストール・ログ・ファイルを確認します。
- \$ORACLE_HOME/cfgtoollogs ディレクトリにある特定のコンフィギュレーション・アシスタントのログ・ファイルを確認します。エラーの原因となった問題を修正します。
- 「Fatal Error. Reinstall」というメッセージが表示された場合は、ログ・ファイルを確認してその問題の原因を調べます。詳細は、「[致命的エラー](#)」の項を参照してください。

コンフィギュレーション・アシスタントの障害

Oracle のコンフィギュレーション・アシスタント障害は、インストール画面の最下部に表示されます。追加情報がある場合は、コンフィギュレーション・アシスタント・インタフェースに表示されます。コンフィギュレーション・アシスタントの実行ステータスは、次のファイルに格納されます。

```
oraInventory_location/logs/installActionsdate_time.log
```

致命的エラー

コンフィギュレーション・アシスタントの実行中に致命的エラーを受け取った場合は、次の手順で現行のインストールを削除し、Oracle ソフトウェアを再インストールする必要があります。

1. A-4 ページの「[インストール失敗後のクリーン・アップ](#)」の説明に従って、失敗したインストールの内容を削除します。
2. 致命的エラーの原因を修正します。
3. Oracle ソフトウェアを再インストールします。

インストール失敗後のクリーン・アップ

インストールが失敗した場合は、インストール中に、Oracle Universal Installer によって作成されたファイルを削除し、Oracle ホーム・ディレクトリを削除する必要があります。手順は次のとおりです。

1. 3-7 ページの「[Oracle Database 10g Products のインストール](#)」の項にある説明に従って Oracle Universal Installer を起動します。
2. 「ようこそ」画面で「[製品の削除](#)」をクリックするか、Oracle Universal Installer のいずれかの画面で「[インストールされた製品](#)」をクリックします。
「インベントリ」画面が表示され、インストールされている製品の一覧が表示されます。
3. 削除する製品を選択して「[削除](#)」をクリックします。
4. 失敗したインストールで作成された Oracle ホーム・ディレクトリを手動で削除します。
5. Oracle ソフトウェアを再インストールします。

サイレント・モードでのレスポンス・ファイルに関するエラー処理

サイレント・モード・インストールが成功したか失敗したかを判断するには、次のログ・ファイルを参照します。

```
/oraInventory_location/logs/silentInstalldate_time.log
```

必要な場合は、前述の項にある oraInventory ディレクトリの位置の判別方法を参照してください。

次の場合は、サイレント・インストールに失敗します。

- レスポンス・ファイルを指定しない場合
- 誤った、または不完全なレスポンス・ファイルを指定した場合

たとえば、よくある問題としては、製品固有のすべてのデータを正しく入力しても、ステージング領域の位置が誤っているということがあります。この場合は、FROM_LOCATION 変数をチェックし、インストール・メディアの products.xml ファイルを指していることを確認します。インストール・メディアでは、この products.xml は response/stage 内にあります。

- Oracle Universal Installer で、ディスク領域不足などのエラーが発生した場合

Oracle Universal Installer またはコンフィギュレーション・アシスタントは、実行時にレスポンス・ファイルを検証します。検証に失敗すると、サイレント・モード・インストールまたは構成プロセスが終了します。Oracle Universal Installer は、パラメータ値のコンテキスト、書式または型が不正である場合、ファイルに値が指定されていない場合と同様に処理します。

Oracle HTML DB でイメージが正しく表示されない場合

images ディレクトリをコピーしたファイル・システム・パスを指し示す別名エントリを、4-11 ページの「新規 Oracle HTML DB インストールに対する Oracle HTTP Server の構成」で追加しています。Oracle HTML DB のイメージが正しく表示されない場合は、/i/ 別名の定義が複数存在する可能性があります。この問題を処理する方法は、次のとおりです。

- 可能な場合は、/i/ の最初のインスタンスを他の別名に変更します。
- \$ORACLE_HOME/html/db/images ディレクトリから、最初の別名 /i/ で定義されたディレクトリにイメージをコピーします。

Oracle HTML DB のオンライン・ヘルプが動作しない場合

ユーザーが仮想ホストを介して Oracle HTML DB にアクセスしている場合は、オンライン・ヘルプが動作しません。次の例について考えてみます。

Oracle HTML DB の DAD が格納されている Oracle HTTP Server のホスト名が internal.server.com で、ポートが 7777 であるとします。ユーザーは仮想ホストを介して Oracle HTML DB にアクセスします。この場合、ユーザーの Web ブラウザには、external.server.com とポート 80 が表示されます。

この例では、ユーザーが internal.server.com にアクセスできない場合、Oracle HTML DB のオンライン・ヘルプは動作しません。この問題を解決するには、Oracle HTML DB の DAD に次の行を追加して、CGI 環境変数の SERVER_NAME および SERVER_PORT を上書きします。

```
PlsqlCGIEnvironmentList SERVER_NAME=external.server.com
PlsqlCGIEnvironmentList SERVER_PORT=80
```

関連項目： CGI 環境変数の上書き方法は、『Oracle Application Server mod_plsql ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

非対話型モードでの Oracle Database Companion CD 製品のインストール

この付録では、拡張インストールについて説明します。この付録の内容は、次のとおりです。

- 非対話型モードでの Oracle コンポーネントのインストール
- 非対話型モードでの Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントの実行

非対話型モードでの Oracle コンポーネントのインストール

通常、Oracle Universal Installer は対話型モードで実行され、グラフィカル・ユーザー・インタフェース (GUI) 画面で情報の入力を求められます。別の方法として、Oracle Universal Installer を非対話型モードで実行できます。このモードは、サイレント・モードまたはサイレント・インストールとも呼ばれます。

非対話型モードを使用して Oracle Database Companion CD の製品をインストールする必要があるのは、次のような場合です。

- 複数ノードに Companion CD 製品のアンアテンド・デプロイを実行する必要がある場合。非対話型インストール・モードは、オペレーティング・システムのスケジューラまたはサイトで通常使用しているその他のジョブ・サブシステムからスケジュールできます。この方法は特に、多数の Oracle Database インストールが必要な大規模サイトで、各コンピュータに対して同じ設定を使用して複数のインストールを迅速に実行する必要がある場合に有効です。
- ユーザーとの対話を予定していない場合。
- 対話型モードの Oracle Universal Installer を実行するためのグラフィック機能が使用できない場合。

この項では、非対話型モードで Oracle Universal Installer を実行するためのレスポンス・ファイルの使用方法について説明します。この項の内容は、次のとおりです。

- [非対話型モードで Oracle コンポーネントをインストールするためのレスポンス・ファイルの使用](#)
- [レスポンス・ファイル・テンプレートの編集](#)
- [レスポンス・ファイルの記録](#)
- [サイレント・モードまたは抑止モードでの Oracle Universal Installer の実行](#)

非対話型モードで Oracle コンポーネントをインストールするためのレスポンス・ファイルの使用

非対話型モードを使用するには、レスポンス・ファイルを使用して Oracle Universal Installer を実行します。レスポンス・ファイルは、インストール・プロセス時に Oracle Universal Installer で使用される変数および値が含まれたテキスト・ファイルです。Oracle には、カスタマイズ可能なサンプル・レスポンス・ファイルのセットが用意されています。または、インストールの選択内容を記録して独自のレスポンス・ファイルを作成できます。

関連項目： レスポンス・ファイルの書式の詳細は、『Oracle Universal Installer および Opatch ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

レスポンス・ファイル・テンプレートの編集

表 B-1 に、インストール・メディアに収録されているサンプルのレスポンス・ファイルを示します。

表 B-1 レスポンス・ファイル

レスポンス・ファイル	説明
htmldb.HTMLDBONLY.rsp	Oracle HTML DB のインストールのみ
htmldb.HTMLDBwithOHS.rsp	Oracle HTML DB と Oracle HTTP Server のインストール
companionCD.db.rsp	Oracle Database 10g 製品インストール・タイプ
companionCD.midtier.rsp	Oracle Database Companion CD インストール・タイプ

レスポンス・ファイル・テンプレートを変更する手順は、次のとおりです。

1. 次のように、レスポンス・ファイル・ディレクトリからシステム上のディレクトリに、レスポンス・ファイルをコピーします。

```
$ cp /directory_path/response/response_file.rsp local_directory
```

この例で、`directory_path` は、インストール・メディアまたはハード・ドライブの `companion` ディレクトリのパスです。ソフトウェアをハード・ドライブにコピーした場合は、`response` ディレクトリのファイルを編集することもできます。

2. テキスト・エディタでレスポンス・ファイルを開きます。

```
$ vi /local_dir/response_file.rsp
```

Oracle Database インストールに固有の設定を編集するだけでなく、`FROM_LOCATION` パスが正しく、インストール・メディアの `stage` ディレクトリ内の `products.xml` ファイルを指していることを確認します。この変数を、絶対パスを指すように設定できます。次に例を示します。

```
FROM_LOCATION="/directory_path/response/stage/products.xml"
```

パスワードなどの機密情報は、レスポンス・ファイル内ではなくコマンドラインに指定できる点に注意してください。

関連項目： レスポンス・ファイルの作成方法の詳細は、『Oracle Universal Installer および Opatch ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

3. ファイル内の指示に従って、ファイルを編集します。

注意： レスポンス・ファイルを正しく構成しないと、Oracle Universal Installer またはコンフィギュレーション・アシスタントは失敗します。

4. ファイルのアクセス権を 700 に変更します。

```
$ chmod 700 /local_dir/response_file.rsp
```

注意： Oracle Database インストール用に完全指定されたレスポンス・ファイルには、データベース管理アカウントのパスワード、および OSDBA グループのメンバーであるユーザーのパスワードが含まれていません（自動バックアップに必要）。Oracle ソフトウェア所有者ユーザーのみがレスポンス・ファイルを表示または変更できるようにするか、またはインストールの完了後にこれらのパスワードの削除を考慮してください。

レスポンス・ファイルの記録

Oracle Universal Installer を対話型モードで使用して、編集可能なレスポンス・ファイルを記録し、後でそのファイルを使用してサイレント・モードまたは抑止モード・インストールを完了できます。レスポンス・ファイルを記録しているときは、インストールを完了するか、または「サマリー」ページで、システムへのソフトウェアのコピーが開始される前に Oracle Universal Installer を終了できます。

非対話型インストール時に記録モードを使用する場合は、Oracle Universal Installer によって、元のソース・レスポンス・ファイルで指定された変数値が新規レスポンス・ファイルにコピーされます。

新規レスポンス・ファイルを記録する手順は、次のとおりです。

1. レスポンス・ファイルの作成対象のコンピュータが第 2 章で指定されている要件を満たしていることを確認します。

レスポンス・ファイルを記録するために Oracle Universal Installer を実行すると、システムがチェックされ、ソフトウェアのインストール要件を満たしているかどうかを検証されます。

2. 次のようなコマンドを入力して Oracle Universal Installer を起動します。

注意： レスポンス・ファイルに相対パスを指定しないでください。相対パスを指定すると、Oracle Universal Installer は失敗します。

```
$ /directory_path/runInstaller -record -destinationFile filename
```

各項目の意味は次のとおりです。

- `directory_path` は、インストール・メディアまたはハード・ドライブの companion ディレクトリのパスです。
 - `-record` は、レスポンス・ファイルに入力するレスポンスを記録することを示します。
 - `filename` は、記録するレスポンス・ファイルのフルパスとファイル名です。
3. Oracle Universal Installer の各画面で、必要な情報を指定します。
 4. Oracle Universal Installer で「サマリー」画面が表示されたときは、次のいずれかの手順を実行します。
 - レスポンス・ファイルを作成した後でインストールを続行する場合は、「インストール」をクリックします。
 - レスポンス・ファイルを作成するのみで、ソフトウェアをインストールせずに Oracle Universal Installer を終了する場合は、「取消」に続いて「はい」をクリックします。

レスポンス・ファイルは、`-destinationFile` オプションを使用して指定した位置に保存されます。

5. インストールを完了しない場合は、「ファイルの場所の指定」画面で指定したパスを使用して作成された Oracle ホーム・ディレクトリを削除します。
6. 記録されたレスポンス・ファイルを別のシステムで使用する前に、テキスト・エディタを使用してファイルを編集し、必要な変更を加えます。
ファイルを編集するときは、ファイル内のコメントを参考にしてください。
7. B-5 ページの「サイレント・モードまたは抑止モードでの Oracle Universal Installer の実行」の項にある指示に従って、レスポンス・ファイルを実行します。

サイレント・モードまたは抑止モードでの Oracle Universal Installer の実行

Oracle Universal Installer をサイレント・モードまたは抑止モードで実行する手順は、次のとおりです。

1. 第 2 章に示されているインストール前の作業を完了します。
2. Oracle ソフトウェア所有者ユーザー（通常は `oracle`）としてログインします。
3. 抑止モード・インストールを完了する場合は、`DISPLAY` 環境変数を設定します。

注意： サイレント・モード・インストールを完了する場合は、`DISPLAY` 環境変数を設定する必要はありません。

4. Oracle Universal Installer をサイレント・モードまたは抑止モードで起動するには、次のようなコマンドを入力します。

注意： レスポンス・ファイルに相対パスを指定しないでください。相対パスを指定すると、Oracle Universal Installer は失敗します。

```
$ /directory_path/runInstaller [-silent] [-noconfig] -responseFile filename
[-paramFile oraparamsilent.ini]
```

各項目の意味は次のとおりです。

- `directory_path` は、インストール・メディアまたはハード・ドライブの companion ディレクトリのパスです。
- `-silent` は、Oracle Universal Installer をサイレント・モードで実行することを示します。
- `-noconfig` を指定すると、インストール時のコンフィギュレーション・アシスタントの実行が抑止され、かわりにソフトウェアのみのインストールが実行されます。
- `filename` は、構成したインストール・レスポンス・ファイルのフルパスとファイル名です。
- `-paramFile` オプションは、サイレント・インストールの実行時に使用できる代替パラメータ・ファイル (`oraparamsilent.ini`) を指定します。この代替パラメータ・ファイルには、Solaris 用の CDE または X Window System ソフトウェア・パッチのチェックは含まれません。

関連項目： `runInstaller` コマンドの他のオプションの詳細は、次のコマンドを入力してください。

```
$ /directory_path/runInstaller -help
```

5. インストールの完了後は、`root` ユーザーとしてログインし、`root.sh` スクリプトを実行します。

```
$ su
# $ORACLE_HOME/root.sh
```

関連項目：

- レスポンス・ファイルを使用したインストールの詳細は、『Oracle Universal Installer および Opatch ユーザーズ・ガイド』の Oracle 製品のインストールに関する項を参照してください。
- レスポンス・ファイルを使用したソフトウェアの削除の詳細は、『Oracle Universal Installer および Opatch ユーザーズ・ガイド』の製品の削除に関する項を参照してください。

非対話型モードでの Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントの実行

Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントを非対話型モードで実行するには、Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントの `wfinstall.csh` スクリプトに構成パラメータ設定を直接入力します。必須の全パラメータ、および使用する機能に対して必須のパラメータを指定する必要があります。

非対話型モードで Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントを実行する手順は、次のとおりです。

1. `$ORACLE_HOME/wf/install` ディレクトリに移動します。このディレクトリは、`wfinstall.csh` スクリプトのデフォルト位置です。
2. `wfinstall.csh` スクリプトをテキスト・エディタで開き、次のような行を探します。

```
... repository.jar" WorkflowCA /wkdir workflow_directory /orahome
oracle_home
```

次に例を示します。

```
... repository.jar" WorkflowCA /wkdir /d1/iasinstall/m21pw1/wf
/orahome /d1/iasinstall/m21pw1
```

3. スクリプトを編集して、`/wkdir`、`/orahome` および `/ospath` の各パラメータの後に、独自のパラメータを追加します。パラメータはすべて同じ行に入力します。同じ行に入力しないと、スクリプトが正しく実行されません。

```
... repository.jar" WorkflowCA /wkdir workflow_directory /orahome
oracle_home /wfacct workflow_schema
/instype installation_type /tnsconndesc connection_string
```

各項目の意味は次のとおりです。

- `/wkdir`: Oracle ホーム・ディレクトリ内の Oracle Workflow ディレクトリ。デフォルト・ディレクトリは `$ORACLE_HOME/wf` です。
- `/orahome`: Oracle ホーム・ディレクトリの位置。
例: `/u01/app/oracle/product/10.2/db_2`。
- `/wfacct`: ワークフロー・アカウント。
- `/instype`: 次のいずれかのインストール・オプションを指定します。
 - `server`: Workflow Server のみを構成します。GUI モードとコマンドライン・モードの両方で使用できます。
 - `add_language`: 使用される言語（複数可）を設定します。GUI モードとコマンドライン・モードの両方で使用できます。
- `/tnsconndesc`: Oracle Database への接続文字列。

注意: パラメータをユーザー・インタフェース・モードと非対話型モードの両方で入力できる場合、この項では、非対話型モードのパラメータ名とともに、Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタント画面の対応するフィールド名を示します。

4. /instype パラメータに add_language を指定した場合は、追加する言語を指定して /nlsopt パラメータを入力します。

追加する言語を二重引用符で囲みます。たとえば、アラビア語、ドイツ語およびデンマーク語を指定するには、次の値を入力します。

```
"ar d dk"
```

使用可能な言語をすべて使用するには、nlsop を all に設定します。Oracle Workflow Server では、Oracle Database でサポートされているすべての言語がサポートされます。

関連項目： 標準の言語略称のリストは、『Oracle Database グローバリゼーション・サポート・ガイド』のロケール・データに関する項を参照してください。

5. /instype パラメータに server を指定した場合、Oracle Internet Directory を Oracle Workflow ディレクトリ・サービスとして統合する場合は、次のパラメータを入力します。

- /ldaphost: LDAP ホスト名
- /ldapport: LDAP 非 SSL ポート
- /ldapuser: LDAP 管理ユーザー名
- /ldaplogbase: 変更ログの DN
- /ldapuserbase: ユーザー・ベース (例: /ldapuserbase cn=Users,dc=us,dc=oracle,dc=com)

すでに Oracle Internet Directory と統合されている Oracle Workflow の既存インストールをアップグレードしている場合、データベースで定義済の場合は Oracle Internet Directory 統合に関する LDAP パラメータを省略できます。

この場合、Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントは、データベースに定義されている既存の LDAP パラメータを使用して Oracle Internet Directory 統合を構成します。ただし、ここで新規 LDAP パラメータを指定すると、設定が更新されます。

6. /instype パラメータに server または all を指定した場合、Oracle Workflow Notification Mailer を使用する場合は次のパラメータを入力します。

- /mailserver: インバウンド電子メール・アカウント:サーバー名
- /mailuser: インバウンド電子メール・アカウント:ユーザー名
- /mailhost: アウトバウンド電子メール・アカウント:サーバー名
- /htmlagent: メッセージ生成:HTML エージェント
- /mailreply: メッセージ生成:返信先アドレス
- /processfolder: 電子メール処理:処理済フォルダ名
- /discardfolder: 電子メール処理:削除フォルダ名

7. /instype パラメータに server を指定したときに、Oracle Workflow データベース・アカウントに割り当てられた表領域を変更する場合は、/tablespace パラメータに既存の有効な表領域名を設定します。

8. Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントによるログ情報の書込み方法を制御するには、次のパラメータを設定します。

- /debug: Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントによってデバッグ情報が workflow.log ファイルに書き込まれるようにする場合は、true を指定します。デフォルトでは、Oracle Workflow でデバッグ情報は記録されません。
- /logdir: Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントによって workflow.log ファイルが書き込まれるディレクトリのパスを指定するか、またはログ・ファイルを作成しない場合はnolog を指定します。デフォルトでは、ログ・ファイルは \$ORACLE_HOME/wf/install ディレクトリに書き込まれます。

9. 変更内容を保存し、wfinstall.csh ファイルを閉じます。
10. wfinstall.csh スクリプトを実行するには、次のコマンドを入力します。

```
$ORACLE_HOME/wf/install/wfinstall.csh
```

wfinstall.csh スクリプトに最低限のパラメータが含まれていて、すべてが 1 行のテキストでファイルに入力されている場合、Oracle Workflow Assistant 画面は表示されず、構成は非対話型モードで実行されます。ただし、セキュリティ対策として、サイトで使用されているインストール・オプションによっては、実行時に次のパスワードの入力を求めるプロンプトが表示される場合があります。

- Oracle Workflow データベース・アカウントのパスワード
- SYS パスワード
- LDAP ユーザー・アカウントのパスワード (LDAP のパラメータを入力している場合)
- 通知メーラー電子メール・アカウントのパスワード (メーラーのパラメータを入力している場合)

Oracle Database Companion CD グローバル化・サポートの 構成

この付録では、グローバル化・サポートについて説明します。この付録の内容は、次のとおりです。

- 異なる言語での Oracle コンポーネントのインストールと使用
- NLS_LANG 環境変数を使用したロケールおよびキャラクタ・セットの構成

異なる言語での Oracle コンポーネントのインストールと使用

この項では、次の手順について説明します。

- [異なる言語での Oracle HTML DB のインストール](#)
- [異なる言語での Oracle Workflow のインストール](#)
- [異なる言語での Oracle Universal Installer の実行](#)
- [異なる言語での Oracle コンポーネントの使用](#)

異なる言語での Oracle HTML DB のインストール

Oracle HTML DB インタフェースは、ドイツ語、スペイン語、フランス語、イタリア語、日本語、韓国語、ポルトガル語（ブラジル）、簡体字中国語および繁体字中国語に翻訳されています。Oracle HTML DB の単一インスタンスは、これらの翻訳言語のうち1つ以上の言語でインストールできます。実行時に、ユーザーの Web ブラウザの言語設定によって特定の言語が判断されます。

翻訳された Oracle HTML DB は、特定の言語をサポートするキャラクタ・セットを持つデータベースにインストールする必要があります。

注意： 翻訳された Oracle HTML DB を、その言語の文字コードをサポートしていないデータベースにインストールしようとすると、インストールに失敗する場合があります。または、実行時に、翻訳された Oracle HTML DB インスタンスが正しく表示されない場合があります。

データベース・キャラクタ・セット AL32UTF8 では、すべての翻訳言語の Oracle HTML DB がサポートされます。

翻訳された Oracle HTML DB は、SQL*Plus を使用して手動でインストールできます。インストール・ファイルは UTF8 でエンコードされています。

注意： AL32UTF8 は、XMLType データに適した Oracle Database キャラクタ・セットです。これは、IANA に登録されている標準 UTF-8 エンコーディングと同等です。UTF-8 エンコーディングでは、有効なすべての XML キャラクタがサポートされます。

Oracle Database データベース・キャラクタ・セット UTF8（ハイフンなし）を、データベース・キャラクタ・セット AL32UTF8 またはキャラクタ・エンコーディング UTF-8 と混同しないでください。データベース・キャラクタ・セット UTF8 は、AL32UTF8 に変更されています。XML データに UTF8 を使用しないでください。UTF8 でサポートされるのは Unicode バージョン 3.1 以前のみであり、有効なすべての XML キャラクタがサポートされていません。AL32UTF8 にはこのような制限はありません。

XML データにデータベース・キャラクタ・セット UTF8 を使用すると、致命的なエラーが発生したり、セキュリティに悪影響を与える可能性があります。データベース・キャラクタ・セットでサポートされていない文字が入力ドキュメントの要素名に表示される場合は、置換文字（通常は疑問符「?」）で置換されます。この結果、解析が終了し、例外が発生します。

注意： ターゲット・データベースのキャラクタ・セットに関係なく、翻訳された Oracle HTML DB をインストールするには、SQL*Plus を起動する前に、NLS_LANG 環境変数のキャラクタ・セット値を AL32UTF8 に設定する必要があります。

次に、翻訳された Oracle HTML DB をロードする際に有効な NLS_LANG 設定の例を示します。

```
American_America.AL32UTF8
Japanese_Japan.AL32UTF8
```

翻訳された Oracle HTML DB をインストールする手順は、次のとおりです。

1. NLS_LANG 環境変数を設定します。キャラクタ・セットは AL32UTF8 である必要があります。次に例を示します。

```
set NLS_LANG=American_America.AL32UTF8
```

2. SQL*Plus を起動し、ターゲット・データベースに SYS で接続します。
3. 次の文を実行します。

```
ALTER SESSION SET CURRENT_SCHEMA = FLOWS_010600;
```

4. 適切な言語固有のスクリプトを実行します。次に例を示します。

```
@load_de.sql
```

インストール・スクリプトは、解凍されたディストリビューション /htmldb/builder 内の言語コードで識別されるサブディレクトリに格納されています。たとえば、ドイツ語のスクリプトは /htmldb/builder/de に格納され、日本語のスクリプトは /htmldb/builder/ja に格納されています。これらの各ディレクトリに、言語コードで識別される言語ロード・スクリプトがあります。たとえば、load_de.sql または load_ja.sql があります。

異なる言語での Oracle Workflow のインストール

Oracle Workflow を異なる言語でインストールするには、Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントで「言語の追加」オプションを使用します。

関連項目： Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントの起動方法は、3-8 ページの「[Oracle Workflow 中間層コンポーネントをインストールするための Oracle Workflow Server の準備](#)」を参照してください。

異なる言語での Oracle Universal Installer の実行

Oracle Universal Installer は、デフォルトでオペレーティング・システムの選択言語で実行されます。Oracle Universal Installer は、次の言語で実行することもできます。

- ポルトガル語（ブラジル）
- ドイツ語
- 日本語
- 簡体字中国語
- 繁体字中国語
- フランス語
- イタリア語
- 韓国語
- スペイン語

異なる言語で Oracle Universal Installer を実行するには、Oracle Universal Installer を実行する前に、オペレーティング・システムが実行されている言語を変更してください。

関連項目： 異なる言語で Oracle Universal Installer を実行する方法の詳細は、『Oracle Universal Installer および Opatch ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

異なる言語での Oracle コンポーネントの使用

Oracle コンポーネント（Oracle Net コンフィギュレーション・アシスタントおよび Oracle Database Configuration Assistant など）を使用する言語を指定できます。この指定では、Oracle Universal Installer が実行される言語は変更されないことに注意してください。選択した言語で Oracle コンポーネントを実行するには、その言語がオペレーティング・システムの言語設定と同じであることが必要です。オペレーティング・システムの言語は、「コントロールパネル」の地域のオプション・ウィンドウで変更できます。

異なる言語でコンポーネントを使用する手順は、次のとおりです。

1. Oracle Universal Installer を起動します。
2. 「インストール・タイプの選択」画面で、「製品の言語」をクリックします。
3. 「言語の選択」画面で、「使用可能な言語」フィールドから Oracle コンポーネントを使用する言語を選択します。
4. 「>」矢印を使用してその言語を「選択された言語」フィールドに移動し、「OK」をクリックします。
5. 対象とする製品を選択して、「次へ」をクリックします。

インストールの完了後、インストールされたコンポーネントのダイアログ・ボックスのテキスト、メッセージおよびオンライン・ヘルプが、選択した言語で表示されます。

NLS_LANG 環境変数を使用したロケールおよびキャラクタ・セットの構成

Oracle が提供するグローバリゼーション・サポートにより、ユーザーは、希望するロケールおよびキャラクタ・セット設定でデータベースと対話できます。NLS_LANG 環境変数を設定すると、Oracle ソフトウェアのロケール動作が指定されます。これにより、クライアント・アプリケーションおよびデータベースで使用される言語および地域が設定されます。また、SQL*Plus などのクライアント・プログラムによりデータを入力および表示するためのキャラクタ・セットが設定されます。

NLS_LANG 環境変数では、次の書式が使用されます。

```
NLS_LANG=language_territory.characterset
```

各項目の意味は次のとおりです。

- `language_territory` は、Oracle メッセージ、ソート、日付名および月名の表示に使用される言語を指定します。
- `territory` は、デフォルトの日付書式、通貨書式および数値書式の表記規則を指定します。
- `characterset` は、クライアント・アプリケーションで使用されるエンコーディングを指定します。

多くの場合、これはユーザー端末またはオペレーティング・システムのキャラクタ・セットに対応する Oracle キャラクタ・セットです。

NLS_LANG 環境変数は、すべての UNIX ベースのプラットフォームでシェルのローカル環境変数として設定されます。たとえば、オペレーティング・システムのロケール設定が `en_US.UTF-8` である場合、対応する NLS_LANG 環境変数は `AMERICAN_AMERICA.AL32UTF8` に設定する必要があります。

関連項目： NLS_LANG パラメータおよびグローバリゼーション・サポート初期化パラメータの詳細は、『Oracle Database グローバリゼーション・サポート・ガイド』を参照してください。

次の表に、NLS_LANG 環境変数の有効な値の一部を示します。

注意: オペレーティング・システムのロケール環境設定を決定する方法は、オペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。

オペレーティング・システムのロケール	NLS_LANG の値
フランス語 (フランス)	FRENCH_FRANCE.WE8ISO8859P15 FRENCH_FRANCE.WE8ISO8859P1 FRENCH_FRANCE.WE8MSWIN1252 FRENCH_FRANCE.AL32UTF8
日本語 (日本)	JAPANESE_JAPAN.JA16EUC JAPANESE_JAPAN.JA16SJIS JAPANESE_JAPAN.AL32UTF8

Oracle Database Companion CD の ポート番号の管理

インストール時に、Oracle Universal Installer によって、各コンポーネントに対して、デフォルトのポート番号のセットからポート番号が割り当てられます。この付録では、デフォルトのポート番号の一覧を示し、割り当てられたポートをインストール後に変更する方法について説明します。この付録の内容は、次のとおりです。

- [ポートの管理](#)
- [ポート番号およびアクセス URL の表示](#)
- [Oracle コンポーネントのポート番号およびプロトコル](#)
- [Oracle HTTP Server ポートの変更](#)
- [Oracle Workflow コンテナ・ポートの変更](#)
- [Oracle Ultra Search ポートの変更](#)

ポートの管理

多数の Oracle Database コンポーネントおよびサービスでポートが使用されます。管理者として、これらのサービスで使用されるポート番号を認識し、ポート番号がホスト上の複数のサービスで使用されないようにすることが重要です。

ほとんどのポート番号がインストール時に割り当てられます。すべてのコンポーネントおよびサービスに割当て済みのポート範囲があり、これは、Oracle Database によってポートの割当て時に使用されるポート番号のセットです。範囲内の最小番号から順に、次のチェックが実行されます。

- そのポートが、ホスト上の別の Oracle Database インストールで使用されているかどうか
Oracle Database は、他のインストールが実行中かどうかに関係なく、ポートが使用中かどうかを検出できます。
- そのポートが、現在実行中のプロセスで使用されているかどうか
非 Oracle Database プロセスも含めて、ホスト上のすべてのプロセスが対象となります。
- そのポートが、`/etc/services` ファイルにリストされているかどうか

これらのチェックのいずれかに該当する場合、Oracle Database は、割当て済ポート範囲内で次に大きい番号のポートに移動し、空きポートが見つかるまでチェックを続けます。

ポート番号およびアクセス URL の表示

ほとんどの場合、Oracle Database コンポーネントのポート番号は、ポートの構成に使用されるツール内にリストされています。また、一部の Oracle Database アプリケーションのポートは、`portlist.ini` ファイルにリストされています。このファイルは、`$ORACLE_HOME/install` ディレクトリにあります。

ポート番号を変更したとき、`portlist.ini` ファイルの内容は自動的に更新されません。したがって、このファイル内の情報を使用できるのは、ポート番号が変更されていない場合のみです。ポート番号を変更するには、この付録で説明されている方法を使用してください。

Oracle コンポーネントのポート番号およびプロトコル

次の表に、インストール時に構成されるコンポーネントで使用するポート番号とプロトコルをリストします。デフォルトでは、範囲内の最初のポートが使用可能な場合は、そのポートがコンポーネントに割り当てられます。

表 D-1 Oracle コンポーネントで使用されるポート

コンポーネントおよび説明	ポート番号	ポート範囲	プロトコル
Oracle HTTP Server	7777	7777 ~ 7877	HTTP
Oracle HTML DB などの Oracle アプリケーションは、このポートを介して Web サーバーと通信できます。インストール時に構成されます。このポートの変更方法は、D-3 ページの「 Oracle HTTP Server ポートの変更 」を参照してください。			
Oracle Workflow コンポーネント・コンテナ	6010	6010 ~ 6020	TCP/HTTP
Oracle Workflow 用の HTTP ポート。インストール時に自動的に構成されます。このポートの変更方法は、D-4 ページの「 Oracle Workflow コンテナ・ポートの変更 」を参照してください。			
Oracle Workflow コンポーネント・コンテナ	6030	6030 ~ 6040	TCP
Oracle Workflow 用の JMS ポート。インストール時に自動的に構成されます。このポートの変更方法は、D-4 ページの「 Oracle Workflow コンテナ・ポートの変更 」を参照してください。			

表 D-1 Oracle コンポーネントで使用されるポート (続き)

コンポーネントおよび説明	ポート番号	ポート範囲	プロトコル
Oracle Workflow コンポーネント・コンテナ Oracle Workflow 用の RMI ポート。インストール時に自動的に構成されます。このポートの変更方法は、D-4 ページの「 Oracle Workflow コンテナ・ポートの変更 」を参照してください。	6110	6050 ~ 6060	TCP
Oracle Workflow 管理コンテナ Oracle Workflow 管理用の HTTP ポート。インストール時に自動的に構成されます。このポートの変更方法は、D-4 ページの「 Oracle Workflow コンテナ・ポートの変更 」を参照してください。	6070	6070 ~ 6080	TCP/HTTP
Oracle Workflow 管理コンテナ Oracle Workflow 管理用の JMS ポート。インストール時に自動的に構成されません。このポートの変更方法は、D-4 ページの「 Oracle Workflow コンテナ・ポートの変更 」を参照してください。	6090	6090 ~ 6100	TCP
Oracle Workflow 管理コンテナ Oracle Workflow 管理用の RMI ポート。インストール時に自動的に構成されません。このポートの変更方法は、D-4 ページの「 Oracle Workflow コンテナ・ポートの変更 」を参照してください。	6110	6110 ~ 6120	TCP
Oracle Ultra Search Oracle Ultra Search 用の HTTP ポート。このポート番号は、Oracle Ultra Search のインストール時に、「カスタム」インストール・タイプを使用して自動的に割り当てられます。ポート番号の変更方法は、D-5 ページの「 Oracle Ultra Search ポートの変更 」を参照してください。	5620	5620 ~ 5639	TCP/HTTP
Oracle Ultra Search Oracle Ultra Search 用の RMI ポート。このポート番号は、Oracle Ultra Search のインストール時に、「カスタム」インストール・タイプを使用して自動的に割り当てられます。ポート番号の変更方法は、D-5 ページの「 Oracle Ultra Search ポートの変更 」を参照してください。	5640	5640 ~ 5659	TCP
Oracle Ultra Search Oracle Ultra Search 用の JMS ポート。このポート番号は、Oracle Ultra Search のインストール時に、「カスタム」インストール・タイプを使用して自動的に割り当てられます。ポート番号の変更方法は、D-5 ページの「 Oracle Ultra Search ポートの変更 」を参照してください。	5660	5660 ~ 5679	TCP

Oracle HTTP Server ポートの変更

Oracle HTTP Server ポートを変更する手順は、次のとおりです。

1. Oracle HTTP Server ホームで、`$ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf/httpd.conf` ファイル内の次の設定を変更します。

```
Port port
Listen listener
```

2. Oracle HTTP Server を再起動します。

```
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl restartproc ias-component=HTTP_Server
```

Oracle Workflow コンテナ・ポートの変更

次の各項では、Oracle Workflow コンポーネント・コンテナおよび管理コンテナの HTTP、RMI および JMS ポートの変更方法について説明します。

HTTP ポートの変更

HTTP ポートを変更するには、次のファイルを編集します。

- Oracle Workflow コンポーネント・コンテナの場合：
\$ORACLE_HOME/oc4j/j2ee/OC4J_Workflow_Component_Container/config/http-web-site.xml

web-site 要素のポート属性を変更します。

```
<web-site port="6001" ...>
```

- Oracle Workflow 管理コンテナの場合：
\$ORACLE_HOME/oc4j/j2ee/OC4J_Workflow_Management_Container/config/http-web-site.xml

web-site 要素のポート属性を変更します。

```
<web-site port="6061" ...>
```

RMI ポートの変更

Oracle Workflow コンポーネント・コンテナの RMI ポートを変更するには、
\$ORACLE_HOME/oc4j/j2ee/OC4J_Workflow_Component_Container/config/rmi.xml
ファイル内の rmi-server 要素のポート属性を変更します。

```
<rmi-server port="6041">
```

Oracle Workflow 管理コンテナの場合、
\$ORACLE_HOME/oc4j/j2ee/OC4J_Workflow_Management_Container/config/rmi.xml
ファイル内の rmi-server 要素のポート属性を変更します。

```
<rmi-server port="6101">
```

JMS ポートの変更

Oracle Workflow コンポーネント・コンテナの JMS ポートを変更するには、
\$ORACLE_HOME/oc4j/j2ee/OC4J_Workflow_Management_Container/config/jms.xml
ファイル内の jms-server 要素のポート属性を変更します。

```
<jms-server port="6021">
```

Oracle Workflow 管理コンテナの場合、
\$ORACLE_HOME/oc4j/j2ee/OC4J_Workflow_Management_Container/config/jms.xml
ファイル内の jms-server 要素のポート属性を変更します。

```
<jms-server port="6080">
```

Oracle Ultra Search ポートの変更

次の各項では、Oracle Ultra Search ポートの変更方法について説明します。

HTTP ポートの変更

HTTP ポートを変更するには、
\$ORACLE_HOME/oc4j/j2ee/OC4J_SEARCH/config/http-web-site.xml ファイル内の
web-site 要素の port 属性を変更します。

```
<web-site port="5620"...>
```

RMI ポートの変更

RMI ポートを変更するには、\$ORACLE_HOME/oc4j/j2ee/OC4J_SEARCH/config/rmi.xml
ファイル内の rmi-server 要素の port 属性を変更します。

```
<rmi-server port="5640"...>
```

JMS ポートの変更

JMS ポートを変更するには、\$ORACLE_HOME/oc4j/j2ee/OC4J_SEARCH/config/jms.xml
ファイル内の jms-server 要素の port 属性を変更します。

```
<jms-server port="5660"...>
```


索引

A

Apache HTTP Server, 1-3
Apache JServ, 1-4
apachectl ユーティリティ, 1-4, 4-11

B

.bash_profile ファイル, 2-9
Bash シェル
デフォルトのユーザー起動ファイル, 2-9
Bourne シェル
デフォルトのユーザー起動ファイル, 2-9

C

chmod コマンド, 2-8, B-3
chown コマンド, 2-8
companionCD.db.rsp レスポンス・ファイル, B-3
companionCD.midtier.rsp レスポンス・ファイル, B-3
CSD
要件
Solaris, 2-15
C シェル
デフォルトのユーザー起動ファイル, 2-9

D

DAD, 1-8, 3-6, 3-12, 3-13, 4-13, 4-14, 4-15, A-5
mod_plsql で使用される DAD の移行, 4-10
Oracle HTML DB インストール時に作成, 3-6
Oracle HTML DB に対する新しい名前, 4-19
概要, 5-3
構成ファイル, 4-10, 4-11
dads.conf ファイル, 4-15
dadTool.pl ユーティリティ, 4-15
dcmctl ユーティリティ, 1-4
DHCP コンピュータ、インストール, 2-19
DISPLAY 環境変数, 3-4, 3-7, 3-11, A-2, B-5
設定, 2-9, 2-10
Dynamic Host Configuration Protocol
「DHCP」を参照

E

env コマンド, 2-10

G

getconf コマンド, 2-12
groupadd コマンド, 2-4

H

HTML DB
「Oracle HTML DB」を参照
htmlbdca ユーティリティ, 4-16
htmldb.HTMLDBONLY.rsp レスポンス・ファイル, B-3
htmldb.HTMLDBwithOHS.rsp レスポンス・ファイル,
B-3
HTTP Server
「Oracle HTTP Server」を参照
httpd.conf ファイル、移行, 4-3

I

id コマンド, 2-5
IP アドレス、複数, 2-19
isainfo コマンド, 2-12

J

JAccelerator, 1-7
Java
Solaris のフォント・パッケージ要件, 2-12
JDK
Solaris で必要なフォント・パッケージ, 2-12
JPublisher
Oracle SQLJ Runtime, 1-8
Oracle SQLJ Translator, 1-8
概要, 1-7

K

Korn シェル
デフォルトのユーザー起動ファイル, 2-9

L

Legato Single Server Version
「LSSV」を参照
.login ファイル, 2-9
LSSV, 1-5

M

marvel.conf ファイル, 4-15
mkdir コマンド, 2-8
mod_fastcgi, 1-3
mod_oss1, 1-4
mod_osso, 1-4
mod_perl, 1-3
mod_plsql, 1-3, 4-10
mod_ssl, 1-4
more コマンド, 2-7

N

NCOMP

「ネイティブ・コンパイル Java ライブラリ」を参照

NESTED TABLE 型, 1-7

Network Information Services

「NIS」を参照

Net コンフィギュレーション・アシスタント

トラブルシューティング, A-4

NIS

ローカル・ユーザーおよびグループの代替, 2-4

NLS_LANG 環境変数, C-4

O

OC4J_Workflow_Component_Container, 5-4

OC4J_Workflow_Management_Container, 5-4

OFA

「Optimal Flexible Architecture」を参照

oinstall グループ

「Oracle インベントリ・グループ」を参照

有無の確認, 2-4

OPMN

「Oracle Process Manager and Notification サーバー」を参照

Optimal Flexible Architecture

Oracle インベントリ・ディレクトリの推奨パス, 2-8

Oracle ベース・ディレクトリに関する推奨事項, 2-6

Oracle ベース・ディレクトリの推奨パス, 2-6

Oracle ホーム・ディレクトリの推奨パス, 2-8

Oracle Application Server の OC4J コンテナ

OC4J_Workflow_Component_Container, 5-4

OC4J_Workflow_Management_Container, 5-4

Oracle Database 10g Companion Products

Oracle HTTP Server, 1-8

Oracle Workflow 中間層コンポーネント, 1-8

インストール, 3-11

要件, 2-18

「Oracle Database 10g Companion Products」インストール・タイプ

インストールされる製品, 1-8

Oracle Database 10g Companion Products の要件, 2-18

Oracle Database 10g Products

JPublisher, 1-7

Oracle Database Examples, 1-6

Oracle JDBC Development Drivers, 1-5

Oracle SQLJ, 1-5

Oracle Text のナレッジ・ベース, 1-6

Oracle Ultra Search, 1-7

Oracle Workflow Server, 1-6

インストール, 3-7

ネイティブ・コンパイル Java ライブラリ, 1-7

Oracle Database 10g Products インストール・タイプ

インストールされる製品, 1-5

Oracle Database 10g Products のインストール前の作業, 2-17

Oracle Database 10g Products の要件

Oracle Database の要件, 2-17

Oracle Workflow Server の要件, 2-17

ディスク領域要件, 2-17

Oracle Database Examples

概要, 1-6

サンプル・スキーマ, 1-6

必須製品, 1-6

Oracle Database Recovery Manager, 1-5

Oracle Database の非対話型インストール

「レスポンス・ファイル」も参照

概要, B-2

記録モード, B-4

手順, B-2

Oracle Enterprise Manager

Oracle Workflow Manager コンポーネント, 5-4

Oracle Enterprise Manager Database Control

Oracle Workflow Manager へのログイン, 5-5

Oracle HTML DB

Oracle Text の要件, 2-16

インストール後の作業, 4-11

Oracle HTTP Server の再起動, 4-11

インストール先, 1-3

インストール前の作業

Oracle XML DB のチェック, 2-16

概要, 1-3

管理設定作業, 5-4

異なる言語でのインストール, C-2

データベース・オブジェクトの削除, 6-2

ポート

「Oracle HTTP Server ポート」を参照

要件

ディスク領域要件のチェック, 2-16

リモート・データベースに対するインストール, 4-16

リモート・データベースに対する構成, 4-16

ログイン, 5-3

Oracle HTML DB インストール・タイプ

インストールされる製品, 1-3

Oracle HTML DB 製品

インストール, 3-4

Oracle HTML DB 製品の要件, 2-11

Oracle HTTP Server, 2-11

Oracle Database の要件, 2-11

Oracle Process Manager and Notification サーバー, 4-11

移行, 4-3

一時ディスク領域要件, 2-11, 2-12

インストール後の作業, 4-3

インストール先, 1-4

概要, 1-3

起動, 5-2

使用される Apache HTTP Server バージョン, 1-3

スワップ領域要件, 2-11

その他のリリースとの違い, 1-4

ソフトウェア要件, 2-12

停止, 5-2

- ハードウェア要件, 2-11
- 必要なバージョン, 2-16
- 物理 RAM 要件, 2-11
- ポート
 - デフォルト, D-2
- ポート、変更, D-3
- メモリー要件, 2-11
- リリース 9.0.3
 - 構成 (アップグレード), 4-14
- Oracle HTTP Server インストール後の作業
 - ファイルのバックアップ, 4-3
- Oracle HTTP Server の起動, 5-2
- Oracle HTTP Server の停止, 5-2
- Oracle HTTP Server の要件, 2-18
- Oracle Identity Management, 2-18
- Oracle *interMedia* Image Accelerator, 1-7
- Oracle Internet Directory
 - Oracle Workflow ディレクトリ・サービスの同期化, 3-10
 - Oracle Workflow との統合, 3-9
- Oracle JDBC Development Drivers, 1-5
 - 概要, 1-5
- Oracle JDBC ドライバ, 1-5
- Oracle JVM, 1-7
- Oracle Messaging Gateway
 - CSD 要件
 - Solaris, 2-15
- Oracle *MetaLink* Web サイト
 - バッチ, 4-2
- Oracle Process Manager and Notification サーバー, 1-3
 - apachectl コーティリティの置換, 1-4
- Oracle Process Manager and Notification サーバー (OPMN), 4-11
- Oracle SQLJ
 - 概要, 1-5
- Oracle SQLJ Runtime, 1-8
- Oracle SQLJ Translator, 1-8
- Oracle Text
 - Oracle HTML DB の要件, 2-16
 - デフォルト言語スクリプト, 2-16
- Oracle Text のナレッジ・ベース
 - 概要, 1-6
- Oracle Ultra Search
 - 概要, 1-7
 - 変更, D-5
 - ポート
 - 変更, D-5
- Oracle Universal Installer
 - 異なる言語での実行, C-3
 - 非対話型モードでの実行, B-2
- Oracle Workflow
 - HTML のヘルプの構成, 4-21
 - OC4J_Workflow_Component_Container, 5-4
 - OC4J_Workflow_Management_Container, 5-4
 - Oracle Internet Directory との統合, 3-9
 - Oracle Workflow Manager へのログイン, 5-4
 - 「Oracle Workflow Client」、「Oracle Workflow Manager」、「Oracle Workflow 中間層コンポーネント」、「Oracle Workflow Server」、「Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタント」を参照
 - インストール後の作業, 4-20, 4-21
 - インストールのその他の選択肢, 1-7
 - 管理設定作業, 5-5
 - 削除, 6-2
 - スタート・ガイド, 5-4
 - ディレクトリ・サービス, 3-10
 - 表領域、変更, 3-11
 - ポート
 - デフォルト, D-2
 - 変更, D-4
 - ホーム・ページへのログイン, 5-4
- Oracle Workflow Manager
 - Oracle Enterprise Manager, 5-4
 - ログイン, 5-4
- Oracle Workflow Server
 - Oracle Workflow 中間層コンポーネントをインストールするための準備, 3-8
 - 概要, 1-6
 - 構成, 3-8
- Oracle Workflow Server の要件, 2-18
- Oracle Workflow インストール後の作業
 - Oracle Workflow HTML のヘルプの構成, 4-21
 - 追加設定作業, 4-21
 - 要件の確認, 4-20
- Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタント, 3-8
 - 非対話型モードでの実行, B-6
- Oracle Workflow 中間層コンポーネント
 - 概要, 1-8
- Oracle XML DB, 2-16
- ORACLE_BASE 環境変数, 2-6, 2-8
 - シェル起動ファイルからの削除, 2-9
- ORACLE_HOME 環境変数
 - シェル起動ファイルからの削除, 2-9
 - 設定されていない, 2-10
- ORACLE_HOSTNAME 環境変数
 - インストール前に設定, 2-19
 - 概要, 2-19
 - 複数の別名を持つコンピュータ, 2-19
 - 複数のホームがあるコンピュータ, 2-19
- ORACLE_SID 環境変数
 - シェル起動ファイルからの削除, 2-9
- Oracle *MetaLink*, 2-2
- Oracle インベントリ
 - 説明, 2-8
- Oracle インベントリ・グループ
 - 有無の確認, 2-4
 - 作成, 2-4
- Oracle インベントリ・ディレクトリ
 - 推奨パス, 2-8
 - 説明, 2-8
- Oracle コンポーネント
 - 異なる言語での使用, C-4
- Oracle ソフトウェア所有者ユーザー, 2-5
 - Oracle ベース・ディレクトリとの関係, 2-6
 - 有無の判別, 2-5
 - 環境の構成, 2-9
 - 作成, 2-5
 - 説明, 2-3
 - デフォルト・シェルの判別, 2-9
 - 必要なグループ・メンバーシップ, 2-3
 - 変更, 2-6
- Oracle ソフトウェアのファイル
 - 削除, 6-2

Oracle ベース・ディレクトリ
ORACLE_BASE 環境変数, 2-6
Oracle ソフトウェア所有者ユーザーとの関係, 2-6
既存の識別, 2-7
作成, 2-8
新規の作成, 2-8
推奨パス, 2-6
説明, 2-6
適切なファイル・システム, 2-8
要件, 2-6
例, 2-6

Oracle ホーム・ディレクトリ
Oracle ベース・ディレクトリの識別に使用, 2-7
推奨パス, 2-8
説明, 2-8
複数のホーム、ネットワークの考慮事項, 2-19
要件, 2-8

Oracle ホーム名, 2-8

oracle ユーザー
Oracle ベース・ディレクトリとの関係, 2-6
環境の構成, 2-9
説明, 2-3
デフォルト・シェルの判別, 2-9
必要なグループ・メンバーシップ, 2-3

oraInst.loc ファイル, 2-4, 2-7, A-3

oraInventory ディレクトリ
「Oracle インベントリ・ディレクトリ」を参照

oratab ファイル
フォーマット, 2-7

P

passwd コマンド, 2-6
patchadd コマンド, 2-15
PlsqlDatabasePassword パラメータ, 4-15
portlist.ini ファイル, D-2
Pro*C/C++
Solaris で必要なパッチ, 2-14
.profile ファイル, 2-9

R

readme.txt ファイル, D-2
Red Hat Package Manager
「RPM」を参照
RMAN
「Oracle Database Recovery Manager」を参照
root.sh スクリプト、バックアップ作成, 4-3
root ユーザー, 2-2
RPM
チェック, 2-13
rpm コマンド, 2-13

S

Secure Sockets Layer
「SSL」を参照
SHELL 環境変数
値の確認, 2-9
Solaris
Java 用フォント・パッケージ, 2-12
SSL, 1-3

T

TMPDIR 環境変数, 2-12
TMP 環境変数, 2-12
tmp ディレクトリ
領域の解放, 2-11
領域のチェック, 2-11
TNS_ADMIN 環境変数
設定されていない, 2-10

U

umask, 2-10
umask コマンド, 2-9, 2-10
unsetenv コマンド, 2-10
unset コマンド, 2-10
useradd コマンド, 2-5
usermod コマンド, 2-6

V

VARRAY 型, 1-7

W

wdbsvr.app ファイル, 4-10, 4-11, 4-12
WebSphere MQ
必要な CSD
Solaris, 2-15

X

X Window
表示エラー, A-2
X Window System
リモート・ホストの有効化, 2-3
X Window System ワークステーション, 2-2
xterm コマンド, 2-3
X 端末, 2-2

あ

アーキテクチャ、チェック, 2-12
アクセス権
Oracle ベース・ディレクトリ, 2-8
アップグレード
Oracle HTTP Server 9.0.3 の構成, 4-14
wdbsvr.app の変更, 4-14
パスワードの不明瞭化, 4-15
「パッチ」を参照

い

一時ディスク領域
解放, 2-11
チェック, 2-11
一時ディレクトリ, 2-11
インストール
Oracle Database 10g Companion Products, 3-11
Oracle Database 10g Products, 3-7
Oracle HTML DB 製品, 3-4
エラー, A-4
サイレント・モード, A-5

概要, 1-2
サイレント・モード, B-4, B-5
非対話型
 エラー処理, A-5
非対話型モード, B-2
レスポンス・ファイル
 サイレント・モード, A-5
ログ・ファイル, A-3
インストール後の作業, 4-1
 Oracle HTML DB, 4-11
 Oracle HTTP Server, 4-3
 Oracle Workflow, 4-20, 4-21
インストール・タイプ
 Oracle Database 10g Companion Products, 1-8
 Oracle Database 10g Products, 1-5
 Oracle HTML DB, 1-3
インストール前の作業
 Oracle Database 10g Products, 2-17
インストール・メディア
 マウント, 3-3
インストール・ログ, A-3

え

エラー
 インストール, A-4
 コンフィギュレーション・アシスタント, A-4
 サイレント・モード, A-5
 非対話型インストール, A-5

お

オペレーティング・システム
 ディストリビューションのチェック, 2-13
 バージョンのチェック, 2-13
オペレーティング・システム・グループ
 NIS の使用, 2-4
 oinstall グループの有無の確認, 2-4
 Oracle インベントリ, 2-3, 2-4
 oracle ユーザーに必要, 2-3
 要件, 2-3
オペレーティング・システム・ユーザー
 NIS の使用, 2-4
 oracle, 2-3
 Oracle ソフトウェア所有者ユーザー, 2-5, 2-6
 要件, 2-3

か

環境
 oracle ユーザー用の構成, 2-9
 設定の確認, 2-10
環境変数
 DISPLAY, 2-9, 2-10, 3-4, 3-7, 3-11, A-2, B-5
 NLS_LANG, C-4
 ORACLE_BASE, 2-6, 2-8
 ORACLE_HOME, 2-10
 ORACLE_HOSTNAME, 2-19
 SHELL, 2-9
 TMP と TMPDIR, 2-12
 TNS_ADMIN, 2-10
 シェル起動ファイルからの削除, 2-9

き

起動ファイル
 シェル, 2-9

く

グループ
 「オペレーティング・システム・グループ」を参照
グローバルゼーション・サポート, C-1

け

言語
 異なる言語での Oracle HTML DB のインストール, C-2
 異なる言語での Oracle Workflow のインストール, C-3
 異なる言語での Oracle コンポーネントのインストール, C-3
 異なる言語での Oracle コンポーネントの使用, C-4

こ

構成
 Oracle HTTP Server 10g, 4-13
異なる言語での Oracle Workflow のインストール, C-3
コマンド, 2-10
 chmod, 2-8, B-3
 chown, 2-8
 env, 2-10
 getconf, 2-12
 groupadd, 2-4
 id, 2-5
 isainfo, 2-12
 mkdir, 2-8
 more, 2-7
 passwd, 2-6
 patchadd, 2-15
 rpm, 2-13
 umask, 2-9
 unset, 2-10
 unsetenv, 2-10
 useradd, 2-5
 usermod, 2-6
 xterm, 2-3
コンフィギュレーション・アシスタント
 エラー, A-4
 トラブルシューティング, A-4

さ

サイレント・インストール
 「非対話型インストール」を参照
サイレント・モード・インストール, B-4, B-5
サンプル・スキーマ, 1-6

し

シェル
oracle ユーザーのデフォルト・シェルの判別, 2-9
シェル起動ファイル
環境変数の削除, 2-9
編集, 2-9
システム・アーキテクチャ、チェック, 2-12
障害
コンフィギュレーション・アシスタント, A-4
新規インストール
httpd.conf ファイルの変更, 4-12
Oracle HTTP Server 9.0.3 の構成, 4-11
wdbsvr.app の変更, 4-11
パスワードの不明瞭化, 4-15

せ

セキュリティ
Oracle Identity Management, 2-18

そ

ソフトウェア要件
チェック, 2-13

ち

致命的エラー, A-4

て

ディスク領域要件, 2-18
ディレクトリ
Oracle インベントリ, 2-8
Oracle インベントリ・ディレクトリ, 2-8
Oracle ベース, 2-6
Oracle ホーム, 2-8
Oracle ホーム・ディレクトリ, 2-8
oraInventory, 2-8
データベース・アクセス記述子
「DAD」を参照
データベース・オブジェクト
Oracle HTML DB の削除, 6-2
データベース・コンフィギュレーション・アシスタント
トラブルシューティング, A-4
デフォルトのファイル・モード作成マスク
設定, 2-9

と

動作保証
ソフトウェア, 2-2
ハードウェア, 2-2
トラブルシューティング, A-1
致命的エラー, A-4

ね

ネイティブ・コンパイル Java ライブラリ
概要, 1-7
ネットワーク・アダプタ
「ループバック・アダプタ、プライマリ・ネットワーク・アダプタ」を参照
複数の別名を持つコンピュータ, 2-19
プライマリ、複数の別名を持つコンピュータ, 2-19
ネットワーク・カード、複数, 2-19
ネットワークに関するトピック
DHCP コンピュータ, 2-19
複数のネットワーク・カード, 2-19
ネットワークの設定
概要, 2-19
複数の別名を持つコンピュータ, 2-19

は

パスワード
不明瞭化, 4-15
パスワードの不明瞭化, 4-15
バックアップ
Oracle Database Recovery Manager, 1-5
パッケージ
チェック, 2-13
バッチ
Oracle Companion CD 製品のダウンロード, 4-2
ダウンロード場所, 2-15
バッチのダウンロード場所, 2-15
バッチ要件
チェック, 2-15

ひ

非対話型インストール
サイレント・モード, B-4, B-5
エラー, A-5
非対話型の Oracle Workflow 構成, B-6
表領域、変更, 3-11

ふ

ファイル
.bash_profile ファイル, 2-9
dads.conf, 4-15
.login ファイル, 2-9
marvel.conf, 4-15
oraInst.loc, 2-4, A-3
oraInst.loc ファイル, 2-7
oratab ファイル, 2-7
portlist.ini, D-2
.profile, 2-9
wdbsvr.app, 4-10, 4-11, 4-12
シェル起動ファイル, 2-9
ファイル・システム
Oracle ベース・ディレクトリ, 2-8
ファイル・モード作成マスク
設定, 2-9
複数の別名、コンピュータ, 2-19
複数のホームがあるコンピュータ、インストール, 2-19

プラットフォーム
アーキテクチャ・サポートのチェック, 2-12
プロセッサ
システム・アーキテクチャのチェック, 2-12

へ

ベース・ディレクトリ
「Oracle ベース・ディレクトリ」を参照
別名、複数, 2-19

ほ

ポート, D-5
Oracle HTTP Server
デフォルト, D-2
変更, D-3
Oracle Workflow
デフォルト, D-2
変更, D-4
アクセス URL, D-2
アプリケーション用に構成, D-2
デフォルトの範囲, D-1
ホーム・ディレクトリ
「Oracle ホーム・ディレクトリ」を参照

ま

マスク
デフォルトのファイル・モード作成マスクの設定,
2-9

も

モード
デフォルトのファイル・モード作成マスクの設定,
2-9

ゆ

ユーザー
Oracle ソフトウェア所有者, 2-3
root, 2-2
ユーティリティ
dadTool.pl, 4-15

よ

要件
Oracle Database 10g Companion Products, 2-18
Oracle HTML DB
Oracle Text の要件, 2-16
Oracle HTML DB 製品, 2-11
Oracle HTTP Server, 2-11, 2-12
要件のチェック
システム・アーキテクチャ, 2-12
ソフトウェア, 2-13

り

リカバリ
Oracle Database Recovery Manager, 1-5

れ

例
Oracle ベース・ディレクトリ, 2-6
レスポンス・ファイル
companionCD.db.rsp, B-3
companionCD.midtier.rsp, B-3
htmldb.HTMLDBONLY.rsp, B-3
htmldb.HTMLDBwithOHS.rsp, B-3
「非対話型インストール」も参照
インストール時の指定, B-5
カスタマイズ, B-3
作成, B-4
使用, B-2
テンプレート, B-3
メディア収録, B-2

ろ

ログ
インストール, A-3
ログ・ファイル, A-3
確認, A-3
トラブルシューティング, A-3

